

千歳市

オレイカ 1 遺跡 (2)

一般国道 337 号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 15 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

千歳市

オレイカ 1 遺跡(2)

一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、一般国道337号新千歳空港関連工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成15年度に実施した、千歳市オリイカ1遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（北埋調報）第206集である。本遺跡の報告書としては、平成14年度に刊行した北埋調報第188集に続く2冊目となり、本書V章において、二年度分の調査成果の概要を掲載してある。
2. 遺跡の地番は、北海道千歳市中央^{ほっかいどう ちとせし ちゆうおう}2529番地3・27・28である。
3. 調査は第2調査部第4調査課が担当した。
4. 本書は、菊池慈人、末光正卓が執筆・編集した。文責者について、文末に（丸括弧）で氏名を記してある。
5. 現場写真、及び遺物写真の撮影は、菊池慈人が担当した。
6. 現場での火山灰等の野外観察は、第1調査部第1調査課主査 花岡正光が行った。
7. 脆弱遺物（凝灰岩の台石）の保存処理は、第1調査部第1調査課主査 田口尚が行った。
8. 調査報告終了後の出土遺物は、北海道立埋蔵文化財センターで保管される。
9. 発掘調査、整理作業にあたっては、下記の諸機関、各氏から御指導、御協力をいただいた。
北海道教育委員会 千歳市教育委員会 恵庭市教育委員会 苫小牧市立博物館
渡辺重建工業株式会社 アジア航測株式会社
北海道教育委員会 千葉英一、宗像公司
千歳市教育委員会 金井邦彦、田村俊之、豊田宏良、松田淳子、久原直利
恵庭市教育委員会 松谷純一、長町章弘
苫小牧市立博物館 赤石慎三
平取町教育委員会 森岡健治
厚真町教育委員会 乾 哲也
野村 崇 大谷敏三

記号等の説明

1. 確認された遺構については、次の要領で略号を付し、本文及び図表中において用いた。
 - * Ⅲ層で確認された遺構は、「U (upper)」を、Ⅴ層より下位で確認されたものは「L (lower)」をそれぞれ頭に付した。ただし、焼土については、確認された層位名を付すこととした。
 - * 遺構名の英訳語からアルファベット2文字をえらび、ハイフンで番号(確認した順番)とつなぐ。
土坑： P I (pit) L P I ; ⅤあるいはⅥ層で確認された土坑
焼土 (炉跡)： F P (fire place) V F P ; Ⅴ層で確認された焼土
 - * 遺物がまとまって出土した場合についても、略号を付し、遺構に準ずるものとして扱った。
土器 (破片) 集中： C P (concentration of potsherds)
礫集中 (集石)： C S (concentration of stones)
2. 実測図、拓影図の縮尺は、原則として次のとおりで、スケールを付けてある。
遺 構 1 : 40 復原土器 1 : 4 破片土器 1 : 3
剥片石器 1 : 2 磨製石器 1 : 2 礫 石 器 1 : 3
3. 遺構図・地形図等の方位は「真北」を示し、数値は「標高」(単位m)を表す。
4. 本文及び図表中で、遺構の規模については次の要領で示した。なお、一部破壊されているもの等については、現存長を(丸括弧)を用いて示した。
「確認面の長径×短径/床面・坑底面の長径×短径/確認面からの最大深 (m)」
焼土等は次のように示した。
「長径×短径/最大厚 (m)」
5. 土層の表記は、基本層序については「ローマ数字 (大文字)」で、遺構覆土等の部分的な層位については「アラビア数字」で示した。
6. 掲載する遺物は、出土総点数に対してどの程度の量であるのかを示すために、「掲載率 (%)」を算出した。すなわち掲載率とは、「掲載点数/総点数×100」で得られる値 (百分率) である。

目 次

例言

記号等の説明

目次

図目次

表目次

図版目次

I 章 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
(1) 道央圏連絡道路（一般国道337号）事業	
(2) 新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査の経緯	
4 遺跡の立地と環境	5
(1) 立地	
(2) 環境	
5 調査結果の概要	7

II 章 調査の方法

1 調査の方法	11
(1) グリッドの設定	
(2) 発掘調査の方法	
(3) 一次整理の方法	
2 基本層序	15
3 整理の方法	20
(1) 土器	
(2) 石器類	
(3) 遺物と記録類の保管	
4 遺物の分類	21
(1) 土器	
(2) 石器類	

III 章 遺構と出土遺物

1 概要	25
2 土坑（L P I）	25

3 土器破片集中 (LCP)	29
LCP-4	
4 礫集中 (LCS)	29
LCS-2	
5 焼土 (FP)	29
VFP-1~10	
6 出土遺物	33
(1) 土器	
(2) 石器類	
IV章 包含層出土の遺物	
1 概要	41
2 土器	50
(1) 復原土器	
(2) 破片土器	
3 石器類	53
(1) 剥片石器群	
(2) 磨製石器群	
(3) 礫石器群	
V章 まとめ	
1 調査区の地形	63
2 遺構の概要	63
(1) III層の遺構	
(2) V層の遺構	
3 遺物の概要	67
(1) 土器	
(2) 石器類	

写真図版

引用参考文献

報告書抄録

目 次

図1	遺跡の位置	2	図17	焼土(3)・VFP-7	32
図2	道央圏連絡道路計画路線図 (新千歳空港関連)	4	図18	遺構出土の土器	34
図3	北海道假製五万分の一図 「漁(いざり)」(1910年発行)	6	図19	LPI-9出土の石器	34
図4	オリカ1遺跡現況図	6	図20	LCS-2・ VFP-7出土の石器	35
図5	遺構位置図及びⅦ層上面地形測量図	8	図21	包含層出土遺物分布図(1)	45
図6	グリッド設定図(1)	11	図22	包含層出土遺物分布図(2)	46
図7	グリッド設定図(2)	12	図23	包含層出土遺物分布図(3)	47
図8	Ⅲ層上面地形測量図	13	図24	包含層出土遺物分布図(4)	48
図9	先行トレンチ位置図 及び土層断面実測位置図	16	図25	包含層出土遺物分布図(5)	49
図10	基本層序柱状図	16	図26	包含層出土の土器(1)	50
図11	土層断面図	18	図27	包含層出土の土器(2)	51
図12	遺構位置図及びⅤ層上面地形測量図	26	図28	包含層出土の土器(3)	52
図13	土坑(LPI-9・10)	27	図29	包含層出土の剥片石器(1)	54
図14	土器破片集中(LCP-4)・ 礫集中(LCS-2)	28	図30	包含層出土の剥片石器(2)	55
図15	焼土(1)・VFP-1~6	30	図31	包含層出土の磨製石器	56
図16	焼土(2)・VFP-8~10	31	図32	包含層出土の礫石器(1)	58
			図33	包含層出土の礫石器(2)	59
			図34	遺構位置図及びⅦ層上面地形測量図 (二年度分)	64

表 目 次

表1	検出遺構一覧表	9	表16	包含層出土石器類点数表	43
表2	遺物出土点数一覧表	9	表17	包含層出土復原土器観察表	60
表3	測量基準杭一覧表	12	表18	包含層出土破片土器観察表	60
表4	基本層序一覧表	17	表19	包含層出土剥片石器群観察表	61
表5	遺構一覧表	36	表20	包含層出土磨製石器群観察表	61
表6	遺構属性一覧表	36	表21	包含層出土礫石器群観察表	61
表7	焼土属性一覧表	36	表22	遺構一覧表(二年度分)	64
表8	遺構出土土器点数表	37	表23	包含層出土土器点数表 (二年度分)	66
表9	遺構出土復原土器観察表	37	表24	包含層出土剥片石器群点数表 (二年度分)	68
表10	遺構出土破片土器観察表	37	表25	包含層出土磨製石器群点数表 (二年度分)	68
表11	遺構出土石器類点数表	38	表26	包含層出土礫石器群・自然礫点数表 (二年度分)	69
表12	遺構出土剥片石器群観察表	39			
表13	遺構出土礫石器群観察表	39			
表14	遺構出土自然礫観察表	39			
表15	包含層出土土器点数表	42			

図 版 目 次

- 図版 1 調査区全景 S→
調査状況 SE→
- 図版 2 L P I - 9 遺物出土状況 S→
V F P - 7 土層断面 S→
- 図版 3 L C S - 2 検出状況 N→
V F P - 2 断面 NE→
V F P - 5 断面 NW→
V F P - 8 断面 NW→
V F P - 9 断面 SW→
- 図版 4 土器出土状況(L C P - 4) NW→
石斧(図31-25)出土状況 SE→
砥石(図33-44)出土状況 SW→
調査区完掘状況 S→
- 図版 5 L C P - 4 出土の土器
V F P - 5 出土の土器
L P I - 9 出土の石器類
- 図版 6 L P I - 9 出土の礫石器
L C S - 2 出土の自然礫
V F P - 7 出土の石器類
- 図版 7 包含層出土の土器(1)
- 図版 8 包含層出土の土器(2)
- 図版 9 包含層出土の土器(3)
- 図版 10 包含層出土の剥片石器
- 図版 11 包含層出土の磨製石器
- 図版 12 包含層出土の礫石器(1)
- 図版 13 包含層出土の礫石器(2)
- 図版 14 包含層出土の礫石器(3)

I 章 調査の概要

1 調査要項

事業名 一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委託者 国土交通省北海道開発局札幌開発建設部
受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 オルイカ1遺跡（北海道教育委員会登録番号 A-03-88）
所在地 千歳市中央2529-3・27・28
調査面積 1,600㎡
調査期間 平成15年4月1日～平成16年3月31日（現地調査 5月6日～7月11日）

2 調査体制

理事長 森重 楯一
専務理事 宮崎 勝
常務理事・第1調査部長 畑 宏明
第2調査部長 西田 茂
第2調査部第4調査課長 三浦 正人
主 任 菊池 慈人（発掘担当者）
主 任 末光 正卓（発掘担当者）

3 調査の経緯（図2）

(1) 道央圏連絡道路（一般国道337号）事業

現在、道内では国土交通省北海道開発局により、地域発展のための地域連携や交流、及び地域拠点同士の連結を強化する等の目的で、計画・実施されている「地域高規格道路」事業がある。このうち、札幌開発建設部により、実施あるいは計画されているものに「道央圏連絡道路（一般国道337号）」がある。これは、国際化しつつある新千歳空港、特定重要港指定の苫小牧港、重要港指定の石狩湾新港、さらに特定重要港を有する小樽市等、物流・人流の拠点を結び、さらに北海道横断自動車道、北海道縦貫自動車道（千歳東IC・江別東IC・銭函IC）を結び、広域交通ネットワークを形成することを目指すものである。道路は、千歳市平和を起点に長沼町、南幌町、江別市、当別町、札幌市、石狩市を結び、小樽市銭函に至る延長約80kmである。

本高規格道路の現況は次のとおりである。新千歳空港（千歳市平和）から北海道横断自動車道千歳東IC（千歳市泉郷中央）までが、「新千歳空港関連」（9.2km）で、このうち新千歳空港ICから日の出IC付近までの間の2.5kmが供用中、その他は整備区間である。千歳東ICから国道274号（長沼町幌内東）までが「泉郷道路」（8.2km）で、整備区間である。長沼町幌内東から北海道縦貫自動車道江別東IC（江別市江別太）までは、「長沼南幌道路」で、調査区間である。江別東ICから美原までは、「美原バイパス」（3.9km）、美原から国道275号（当別町蕨岱）までが「美原道路」（8.0km）で、ともに整備区間である。当別町蕨岱から国道231号（石狩市生振）までが「当別バイパス」（15.4km）で、一部暫定二車線であるが、供用中である（札幌開発建設部札幌新道建設事務所 2002）。

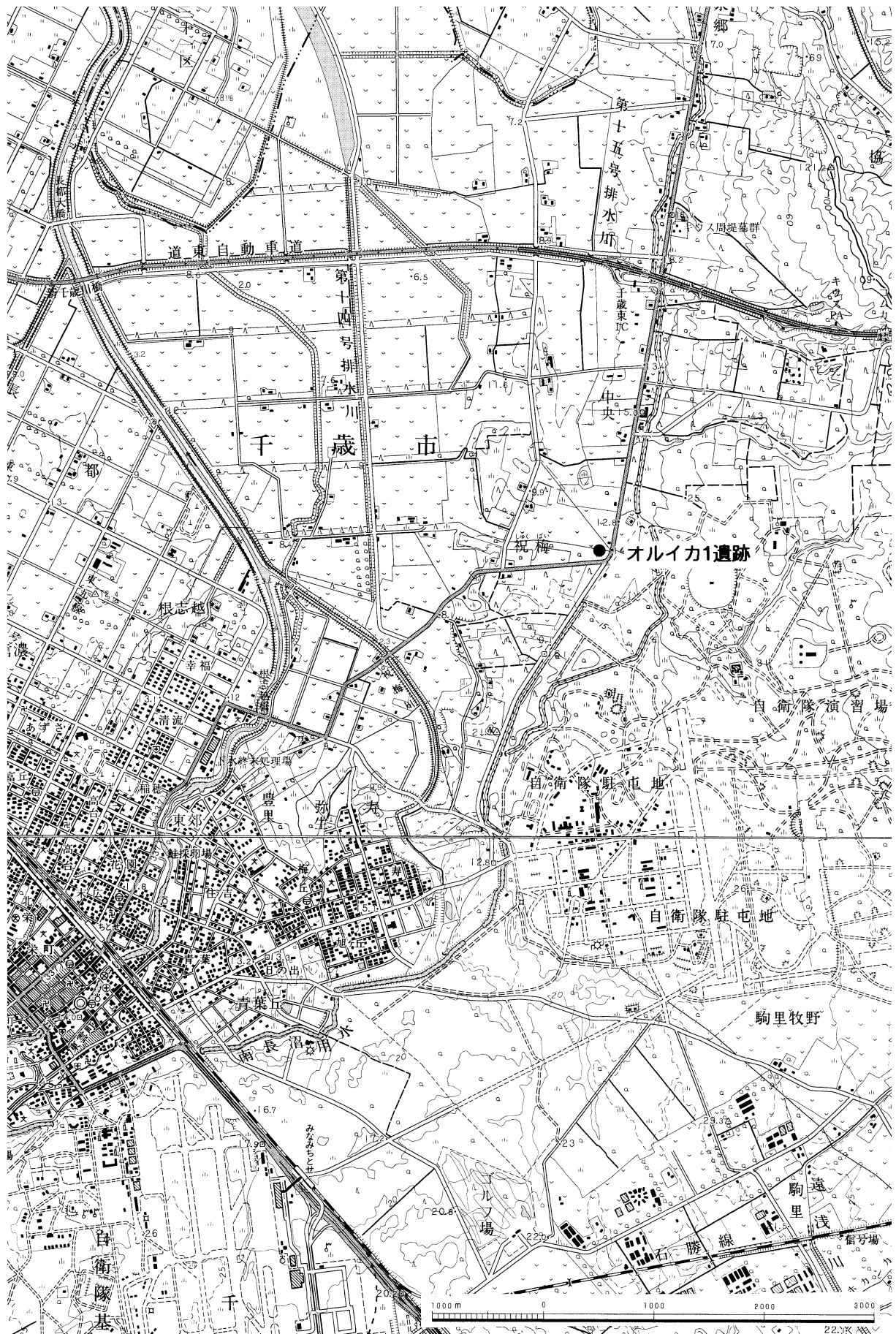


図1 遺跡の位置

(この図は国土地理院発行50,000:1地形図「恵庭」「千歳」を使用したものである。)

本書で報告するオリイカ1遺跡は、新千歳空港関連工事用地内にある。

(2) 新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査の経緯

事前協議書の提出

平成2(1990)年12月、札幌開発建設部は千歳市教育委員会を經由して北海道教育委員会あてに「国道337号根志越道路整備工事」についての埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。協議書の内容によれば、工事起点は千歳市柏台1465-1、終点は千歳市中央1048-1である。工事面積は581,000㎡、工事期間は平成6年着手、平成9年終了の予定となっていた。協議を受けた北海道教育委員会は同3(1991)年6月、路線内の埋蔵文化財所在確認調査を実施した。その結果、範囲確認調査が必要な箇所は12ヶ所、対象面積299,000㎡とし全計画路線の約半分程度について範囲確認調査が必要と判断、同年7月北海道教育委員会から札幌開発建設部へ回答された。

平成7(1995)年5月、事業名の変更等により再び事前協議書が札幌開発建設部から北海道教育委員会へ提出された。事業名は「一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事」となり、事業面積約828,000㎡、年次計画は平成8年から平成12年となった。

埋蔵文化財発掘調査

1. 柏台1遺跡(A-03-274)

平成7(1995)年11月と平成8(1996)年5月、本事業に関するはじめての範囲確認調査が北海道教育委員会によって千歳市柏台地区(「柏台1遺跡」旧名称 祝梅砂丘遺跡)で行われた。この調査で、現地表下約4mの火山灰質シルト層から遺物が出土した。翌平成9(1997)年、当センターにより当初予定面積4,000㎡についての発掘調査が行われたが、この時に遺物包含層の範囲が拡大することが明らかとなり、発掘調査必要面積は最終的に6,300㎡と確定した。

結果、平成9年度には2,900㎡が、同10年度には3,400㎡が調査され、翌平成11年度に調査報告書が刊行された(『千歳市柏台1遺跡』北埋調報138)。柏台1遺跡付近は、現在は「日の出IC」として供用されている。

2. チプニー1遺跡(A-03-277)・チプニー2遺跡(A-03-278)

千歳市中央地区を流れるチプニー川の左岸にある「チプニー1遺跡」は、平成12(2000)年6月に、北海道教育委員会により範囲確認調査が行われた。結果4,800㎡について発掘調査が必要とされた。一方対岸の「チプニー2遺跡」は、平成13(2001)年5月の範囲確認調査で、発掘調査必要面積は2,500㎡とされた。平成13年度、当センターによるチプニー1遺跡4,800㎡の発掘調査が予定されたが、札幌開発建設部から、チプニー2遺跡400㎡について調査優先の要請があった。これを受け調査計画・面積等の変更を行い、結果、チプニー1遺跡4,360㎡、チプニー2遺跡450㎡が調査された(『千歳市チプニー1遺跡・チプニー2遺跡』北埋調報173)。

調査面積の変更により、これをもってチプニー1遺跡は調査完了となった。一方、チプニー2遺跡は、平成15年度当センターにより2,000㎡が発掘調査され、報告書刊行の予定(『千歳市チプニー2遺跡(2)』北埋調報207)である。さらに10月には北海道教育委員会により約12,000㎡について範囲確認調査が行われ、次年度以降も調査が予定されている。

3. オリイカ1遺跡(A-03-88)・オリイカ2遺跡(A-03-280)

平成13(2001)年10月、オリイカ1遺跡(左岸部分)の範囲確認調査が行われた。遺跡はかつて「キウス13号周堤墓」と呼称されていた(北海道教育委員会平成7年作成 埋蔵文化財包蔵地調査カード『キウス13号周堤墓』)が、範囲確認調査の結果、周堤墓ではないことが判明し、平成13年12月、遺跡名はキウス13号周堤墓から「オリイカ1遺跡」へと変更された。また、この範囲確認調査で、発

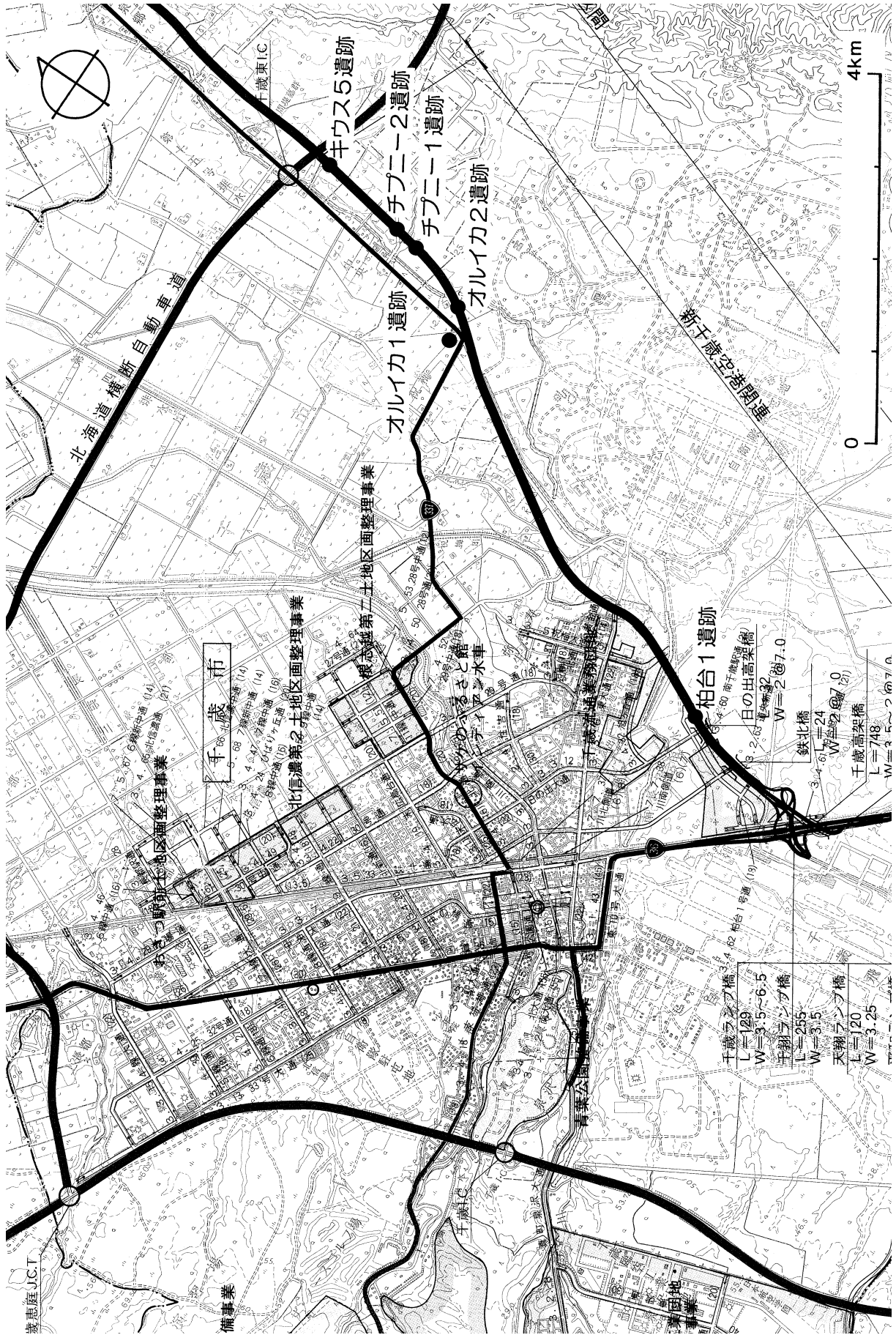


図2 道央圏連絡道路計画路線図（新千歳空港関連）

（この図は札幌開発建設部発行「道央圏連絡道路事業概要」2002掲載の地図を使用したものである。）

掘調査必要範囲は3,900㎡、その周囲の1,640㎡が工事立会必要範囲とされた。同年9・11月にはオリイカ1遺跡の北東約400mにある「オリイカ2遺跡」の範囲確認調査が行われた。オリイカ2遺跡の発掘調査必要部分の面積は約9,000㎡となった。

平成14(2002)年度、当センターの本事業関連の発掘調査は、オリイカ1遺跡3,900㎡とオリイカ2遺跡5,100㎡が予定された。事業委託者である札幌開発建設部から、オリイカ川右岸部分については用地等の問題が解決した段階で、すみやかな調査進展が必要との要請があった。これを受け、オリイカ1遺跡(左岸部分)の発掘調査については、動向を見守り柔軟に対応できる体制で臨むこととした。

また、オリイカ1遺跡左岸部分の発掘調査では、工事立会必要範囲についても先行トレンチによる試掘的な調査を行ったところ、遺構・遺物が認められたのでこの部分も発掘調査の区域とした。一方、オリイカ1遺跡右岸部分の範囲確認調査について、具体的な進展がないために、6月からオリイカ2遺跡予定面積3,000㎡についても発掘調査に着手し、両遺跡の調査を並行して行った。同時期に北海道教育委員会によりオリイカ1遺跡右岸部分の範囲確認調査が行われ、その結果、発掘調査必要範囲が1,600㎡と確定した。この範囲確認調査終了後、この右岸部分の調査に対応できるように体制を整えたが、そこに存在する民家の立ち退きが進まず、最終的には右岸部分の発掘調査は翌年度に延期となった。また、オリイカ川の左岸、現国道の東側にも、範囲確認調査が未了の部分(図6)があったが、これについては北海道教育委員会により試掘調査不要と判断された。理由は、面積が小さいこと、平成14年度調査区の東側部分は土層が著しく削平されていたこと等である。

最終的には面積変更等により、オリイカ1遺跡5,460㎡、オリイカ2遺跡3,230㎡が調査完了となり、報告された(『千歳市オリイカ1遺跡』北埋調報188 『千歳市オリイカ2遺跡』北埋調報189)。

以上の経緯により、平成15年度にオリイカ1遺跡右岸部分1,600㎡について、発掘調査を行うこととなった。

4 遺跡の立地と環境 (図1・3・4)

(1) 立地

オリイカ1遺跡は、JR千歳駅からおよそ北東方向へ直線距離で約5.8km、中央地区、現国道337号の沿線に位置する。馬追丘陵の西側の麓、千歳川水系の河川により形成されたと考えられる標高約12～15mの中位～下位段丘上に立地する。遺跡のほぼ中心の地理座標は、北緯42°51'34" 東経141°42'31" (世界測地系)である。

遺跡名の由来となった「オリイカ」とは、アイヌ語の「o-ruika」、川尻(川口あるいは川下)・橋の意味であると考えられている。現在の河川改修されたオリイカ川は、陸上自衛隊東千歳駐屯地内の南長沼用水から分岐し、オリイカ1遺跡のある段丘を直線的に区切るように流れている。この結果、オリイカ1遺跡は左岸、右岸に分けられているが、本来的には一連の段丘であったと考えられる。遺跡から先の部分も河川改修され、第十四号排水川に注ぎ千歳川に流れ込んでいる。『増補千歳市史』(1983年)によると、オリイカ川の改修工事は昭和52(1977)年度に「防衛施設周辺農業用施設整備事業」費、昭和54(1979)年度には「河川費」での予算で実施されており、予算名目に違いがある。オリイカ1遺跡は陸上自衛隊東千歳駐屯地のそばにあるので、遺跡周辺は昭和52(1977)年度に改修が行われた可能性が高いと推測される。

図3は明治43(1910)年陸地測量部発行の『漁(いざり)』(一部)であるが、これを見るとかつてのオリイカ川の流れを知ることができる。馬追丘陵の裾部から、オリイカ1遺跡のやや北東寄り付近を通り、そこからは、由仁道路(現国道337号)とほぼ平行に、長都沼の東側、低地と段丘の境界を

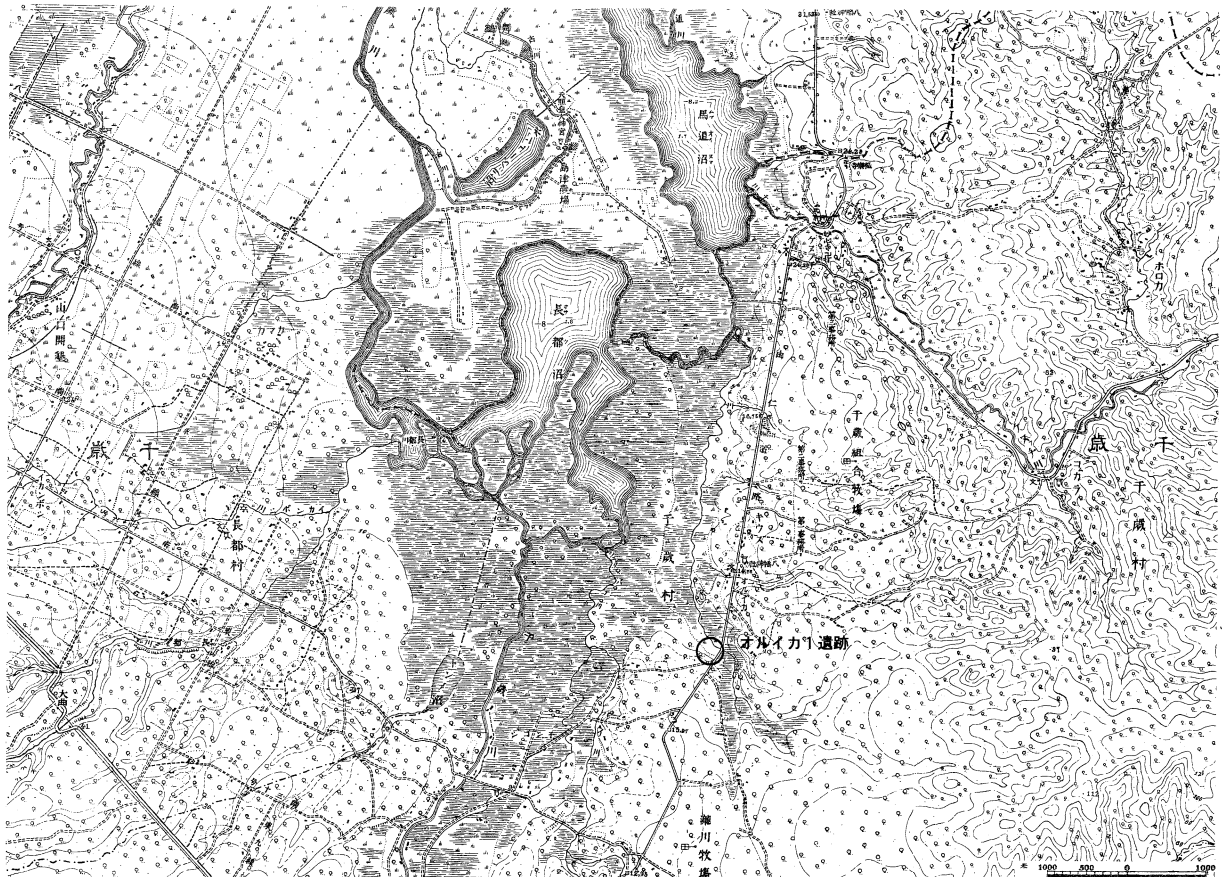


図3 北海道假製五万分の一図「漁（いざり）」（1910年発行）

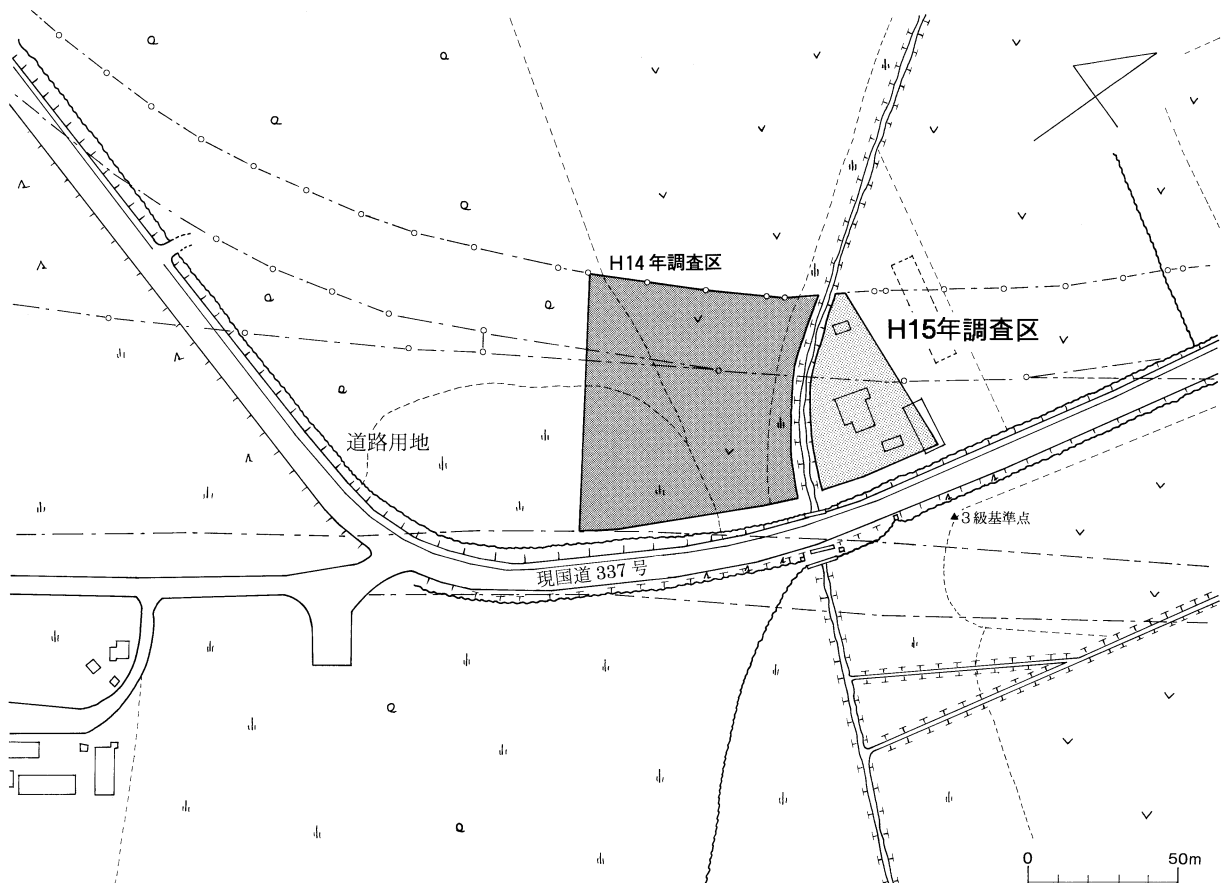


図4 オルイカ1遺跡現況図

沿うように流れ、イカベツ川と合流し長都沼に流れ込んでいた。ちょうど現在の第十五号排水川がその名残であろう。さらに本年度の調査で、調査区北東部分に、このオリカ川の旧河道と考えられる土層の堆積状況が確認された。

(2) 環境

太平洋側の苫小牧から日本海側の石狩までは、「石狩低地帯」と呼称されている。この低地帯の東側には馬追丘陵、夕張山地が南北に走る。馬追丘陵は、断層群（泉郷断層、剣淵断層等）の活動により隆起し形成されたもので、最標高点は馬追山（273m）で、北は栗山町、南は早来町に及び延長約30 kmである。千歳市中央地区はこの馬追丘陵のほぼ中央部から南寄り、丘陵の西側に位置する。丘陵西側一帯に広がる平坦地（千歳市中央・泉郷地区、長沼町、恵庭市漁太付近）は、かつて馬追沼（マオイトー）や長都沼（オサツトー）等の沼があり、その周辺には、低地が広がっていた。多雨期や融雪期には、この付近を流れる主要河川である、千歳川をはじめ夕張川、剣淵川等により水没する地域であった。しかし、昭和26（1951）～昭和44（1969）年に国営灌漑排水事業により、沼や低地の埋め立てや河川改修が行われた結果、地下水位及び表層水位が低下し、現在は主に水田や畑地として利用されている。

千歳市の「中央」という地名は、昭和初期頃にも使用されていたようであるが、昭和26（1951）年に大字廃止字名改正で確定されたと考えられる。それ以前は、キウス、チプニー、オリカという三字により中央地区が構成されていた。『千歳市農業協同組合史』（1984年）によると、オリカ1遺跡のある千歳市中央地区の開拓は、明治24（1892）年の由仁道路（街道）の開削に始まる。当時オリカ、チプニー、キウスの各河川流域は、熊笹と大木の密林であったという。現在でも当時を彷彿とさせる情景が、中央八幡神社周辺に残っている。神社は明治30（1897）年に八幡宮^{オリカ}乎留伊賀神社として建立された。図3においてもオリカ1遺跡周辺は、潤葉樹林の記号がみられる。

千歳市域の土壌は、主に支笏カルデラ、恵庭岳、樽前山等の火山活動の噴出物から構成されるが、中央・泉郷地区付近では、かつて沼や低地であったことを示す泥炭がこれらに含まれることが多い。さらに河川による二次堆積物と判断される火山噴出物等が段丘を形成している部分もみられ、オリカ1遺跡もこのような段丘上に立地している。

周辺の遺跡については、平成14年度刊行の報告書で詳述した（北埋調報 188）。

5 調査結果の概要（図5 表1・2）

確認された遺構は、土坑2基、土器破片集中1ヶ所、礫集中1ヶ所、焼土10ヶ所である。これらはすべて、IV層（樽前c降下軽石層）の下位の黒色土（V層）で確認された。分布する地点は、南側の削平された段丘部と、北西側の低地部の2ヶ所に分かれる。前者には、土器破片集中（LCP-4）や、土坑（LPI-10）、焼土（VFP-1～10）がある。特に、焼土はすべて段丘部でのみ検出された。後者では、土坑（LPI-9）と礫集中（LCS-2）が存在する。

LCP-4からはIV群a類のタブコブ式土器の破片が出土し、接合作業の結果、胴部中位から底部までが復原できた。VFP-5は、焼土のそばからIV群a類のタブコブ式土器の破片が出土しており、土器囲い炉である可能性が考えられる。LPI-9の覆土からは、礫石器や自然礫がまとまって出土した。遺構はすべて縄文時代に属するものと推測される。

遺物もV層から最も多く出土した。III層（黒色土）、VI層（漸移層）からの出土もある。出土地点は大まかには、ほぼ調査区全体から出土が認められるが、概ね南側の段丘部に多く低地部に少ない。

土器は1,913点出土した。縄文時代後期初頭のタブコブ式が最も多く、ついで多いのは晩期後半の

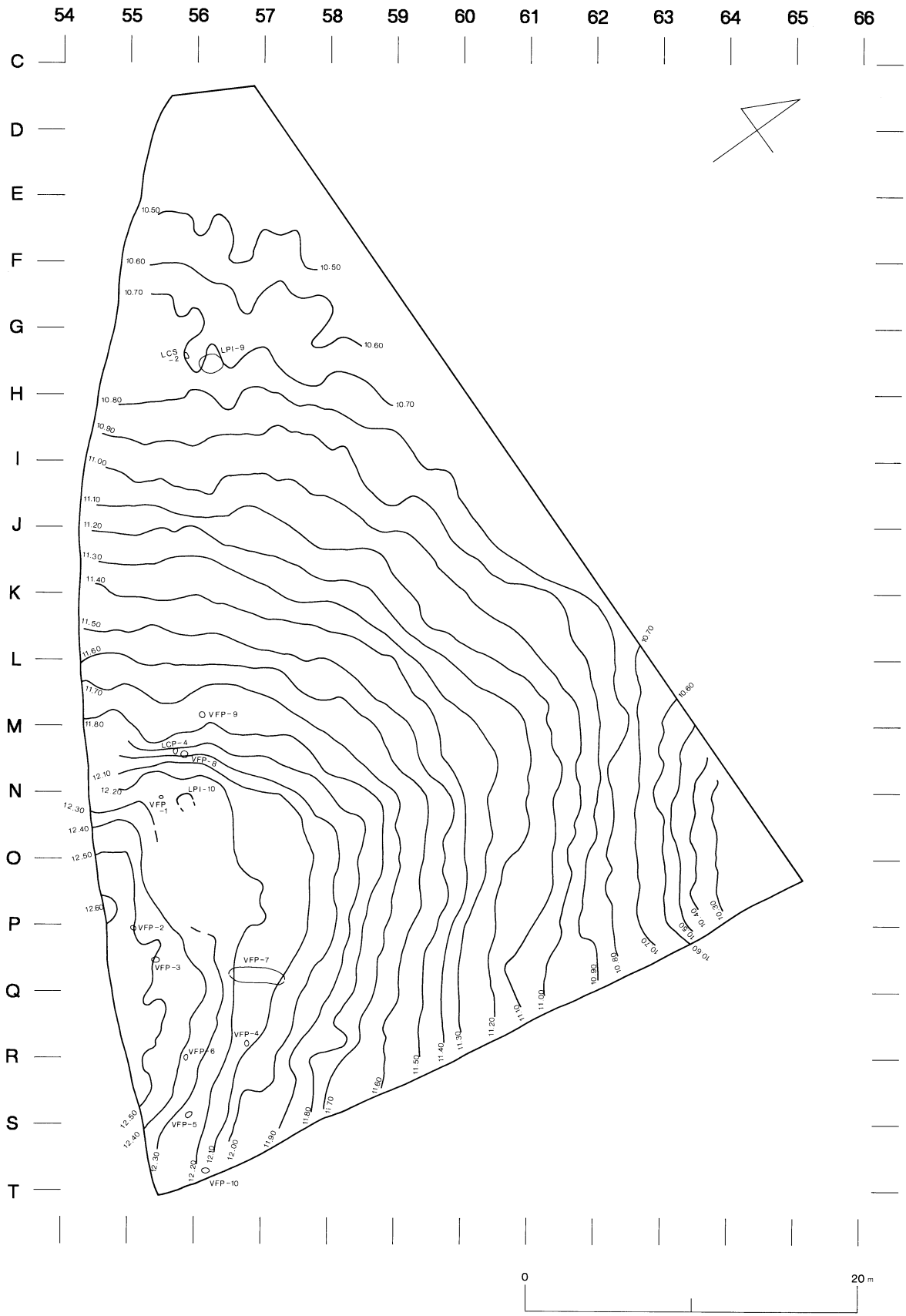


図5 遺構位置図及びⅦ層上面地形測量図

土器で、Ⅲ層から出土した浅鉢の破片が復原された。また、後期中葉と考えられるものも極少量出土している。

石器類は439点出土した。剥片石器としては、石鏃、石槍・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー等が出土している。多くが黒曜石製であるが、つまみ付きナイフは頁岩製のものが多い。磨製石器としては磨製石斧、礫石器ではすり石、たたき石、砥石、台石がある。砥石、台石が多く、さらに、接合された大型の砥石もある。また、石錘と推測されるものも数点認められる。

(末光正卓)

表1 検出遺構一覧表

年度/種別	道 跡	平地式住居跡	竪穴式住居跡	土 坑	焼 土	土器破片集中	フリイク・チップ集中	礫 集 中
平成14年度	1	1	6	8	23	4	1	2
平成15年度	0	0	0	2	10	1	0	1
合 計	1	1	6	10	33	5	1	3

表2 遺物出土点数一覧表

種 別	土 器		石 器 類	
	遺 構 出 土	包 含 層 出 土	遺 構 出 土	包 含 層 出 土
点 数	64	1,849	24	415
合 計	1,913		439	

II章 調査の方法

1 調査の方法

(1) グリッドの設定 (図6・7 表3)

調査区は、本遺跡近辺の工事用地を完全網羅するように昨年度に設定したものを踏襲した。設定の手順は、次の通りである。

はじめに、工事用地幅杭のうち、「L17」と「L22」を結んで「基軸線」を設けた。次に「L17」で、この基軸線と直交する線を設け、この二本の線を基準とした(図6)。「L17」と「L22」を結ぶ基軸線は、直線距離が252.332m、真北に対して $36^{\circ} 40' 12.37''$ 東にずれる。

基軸線を「Iライン」とし、これと平行する線を4mごとに設定し、それぞれをアルファベットで表記した。Iラインより北西側をAからHとし、南東側をJからZとした(アルファベットライン)。さらに、「L17」で基軸線に直交する線を「25ライン」とし、同様に4mごとに平行する線を設け、アラビア数字で表記した。南西側から北東側へと数値が大きくなる(数字ライン)。

以上のように、調査区全体に4m四方のグリッドを割り付けた。各グリッドはそれぞれ、アルファベットラインと数字ラインの交点を四つ有し、各交点の表記は、そのアルファベットと数字をハイフンでつないだ記号とした。この交点のうち、西側の交点の表記をそのグリッドの名称とした。(図7)

標高値は、平成14年度設置の3級水準点「H14-01」(H=13.774m)を基準に算出した。これらの基準杭について表3にまとめた。

(2) 発掘調査の方法 (図5・8・9・12)

はじめにI層(現地表土)とII層(樽前a降下軽石層)を建設機械で除去した。調査区は昨年度まで宅地として利用されていたため、大規模な攪乱が多数みられた。この除去作業後、グリッド杭を調査区に設置し人力による作業を開始した。

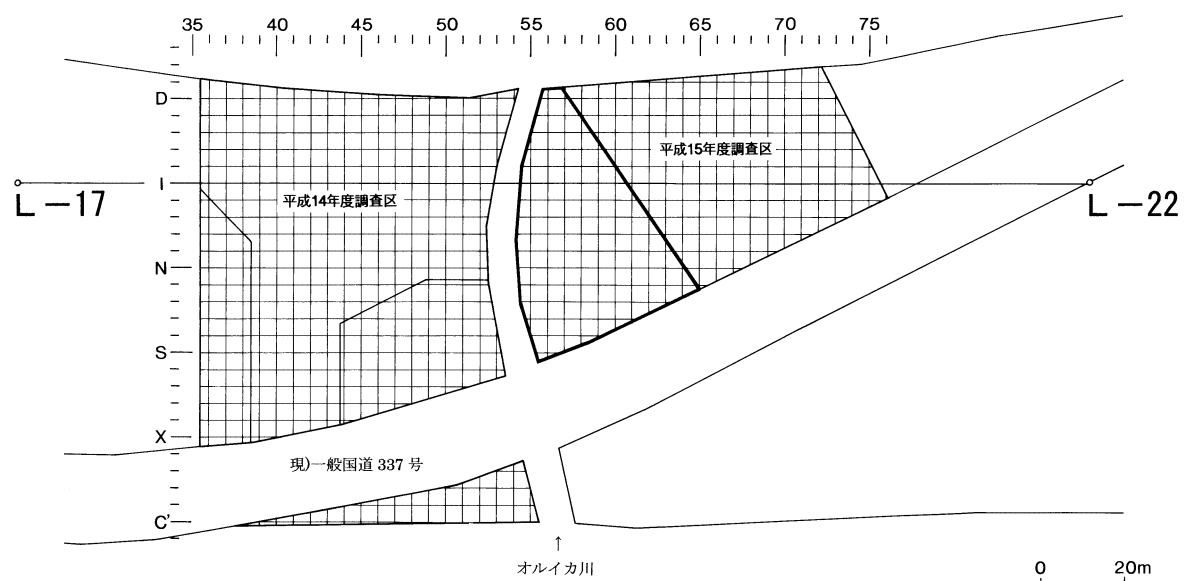


図6 グリッド設定図(1)

表3 測量基準杭一覧表

杭名	種類	世界測地系 (GRS80楕円体)				旧日本測地系 (ベッセル楕円体)			
		平面直角座標(X,Y座標系)		地理座標		平面直角座標(X,Y座標系)		地理座標	
		X (m)	Y (m)	北緯	東経	X (m)	Y (m)	北緯	東経
L17	道路用地幅杭	-126643.797	-44309.031	42° 51' 31.340"	141° 42' 28.049"	-126907.287	-44002.359	42° 51' 22.410"	141° 42' 41.401"
L22	道路用地幅杭	-126441.421	-44158.348	42° 51' 37.930"	141° 42' 34.628"	-126704.910	-43851.676	42° 51' 29.001"	141° 42' 47.983"
H14-01	三級水準点	-126654.239	-44232.438	42° 51' 31.017"	141° 42' 31.425"	-126917.730	-43925.766	42° 51' 22.089"	141° 42' 44.779"

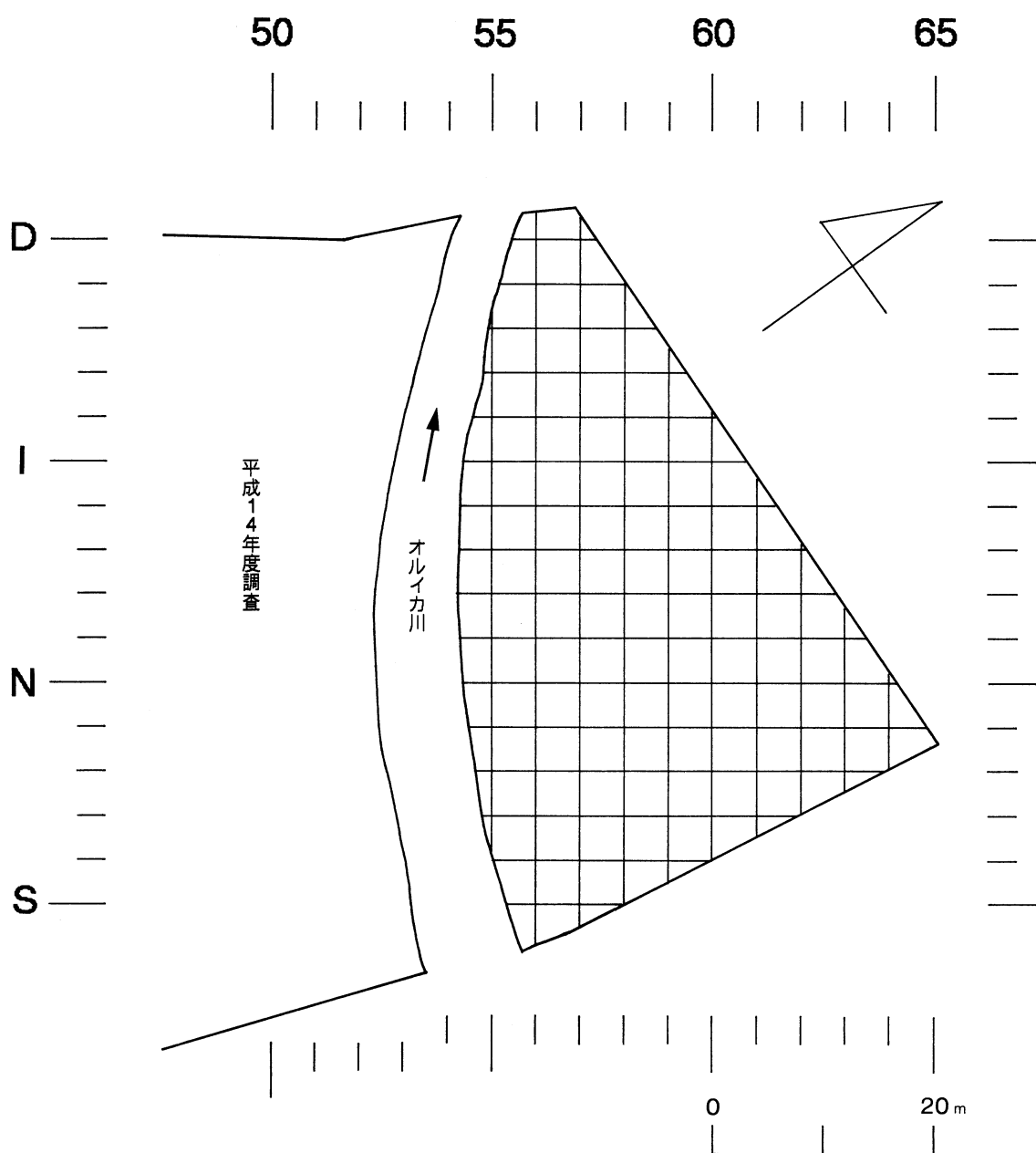


図7 グリッド設定図(2)



図8 皿層上面地形測量図

最初に露出面を清掃し、Ⅲ層（黒色土）の堆積状況を把握した。この時点で地形測量図（図8）を作成し、調査区の北東と北西部分、2ヶ所に低地部が存在することがほぼ明らかとなった。また調査区の南側部分は平坦で、削平を受けている状況が認められた。

次に、遺跡全体の内容を、調査の早い段階で把握することを目的とし、南側の段丘部から両側の低地部にかかるように、さらに排水を考慮し、57ライン沿いに一本（57ライントレンチ）、北東側の低地部への傾斜に合わせたもの（L-55杭～O-64杭を直線で結んだライン・東西トレンチ）一本、合計二本の先行トレンチ（図9）を設定し、Ⅶ層（黄褐色風化ローム層）まで掘り進めた。このトレンチ調査の結果、低地部での湧水の状況、各地点における各層の厚さ、遺物量や遺構の粗密を把握し、これ以降の調査を進める上での基礎的なデータを得た。

湧水対策のため、先行トレンチの低地部の壁際部分を深く掘り下げ、そこに水中ポンプを設置して調査区外へ排水できるようにした。さらに効率よくポンプ設置場所に水を集めるために、両低地部をつなぐように、調査区の北側壁沿いに排水用を兼ねたトレンチを設けた。この排水トレンチにたまった水は、どちらかのポンプ設置場所に流れるようにした。トレンチは、調査が進行するのに合わせて随時掘り下げ、調査面が浸水しないよう努めた。

Ⅲ層包含層調査は、遺構・遺物ともに多いと予想された段丘部から、両側低地部へと展開するように進めていった。これは下位のⅤ層（黒色土）・Ⅵ層（漸移層）を対象とする包含層調査についても同様である。結果、Ⅲ層では遺構は確認されず、遺物の出土もわずかであった。この後、Ⅳ層の樽前c降下軽石層は層厚が薄いため人力で掘り下げ、Ⅴ層を検出した。

Ⅴ層についても堆積状況を把握し、地形測量図（図12）を作成した。その後Ⅴ層・Ⅵ層の包含層調査を行い、必要に応じて遺構確認調査・遺構調査も並行させた。Ⅶ層上面で終了とし、地形測量図を作成した（図5）。

最後に、旧石器確認調査を行ったが、遺物の出土は認められず、調査完了となった。

(3) 一次整理の方法

取り上げた遺物は、次のような流れで作業を行った。

遺物は、「遺跡名、出土地点（遺構名・グリッド）、層位、遺物種別、遺物番号（出土位置記録のもの）、取り上げ日」を記入したビニール袋に入れて取り上げた。この袋ごとに「取り上げ台帳（仮台帳）」に登録し、この台帳で一次整理作業の流れを管理した。遺物は、「水洗」、「乾燥」、「分類」といった作業を日付順に進めた。分類された遺物は、出土場所や層位、遺物名等といった遺物個別の情報を記録した「遺物カード」を作成し、遺物とともにそれぞれビニール袋に収納した。あわせて、その遺物カードの記載事項について一覧表を作成した（「遺物登録台帳（本台帳）」に登録）。

また、接合作業を行う土器や礫（片）等の遺物については、この情報の一部を直接遺物に記入した（「注記」）。注記は遺跡名のオルイカ1遺跡を「オ1」と略記し、出土地点、層位、遺物番号の順に記入した。原則的にはすべてを注記の対象としたが、物理的に記入するスペースが無いもの（特に小破片のもの）については、行っていない。

以上の作業（一次整理）は、現場で行った作業である。報告書作成を目的とする、本格的な整理作業（二次整理）の内容については、本章3節「整理の方法」に記載している。

（末光正卓）

2 基本層序 (図9～11 表4)

土層の観察は、『土壤調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会 1984)及び、『標準土色帖』(小山・竹原 1967)を参考に、必要と思われる観察項目を設け、それをもとに行った。

基本層序について、基本層序柱状図(図10)及び一覧表(表4)にまとめた。低地部では、各層に還元色を帯び泥炭を含む部分が、また、軽石層では鉄やマンガンの集積層が認められた。

* I層：現地表土

耕作土や盛土、いわゆる攪乱といったものである。T a - a、T a - c、E n - aといった下位層の構成物を含むのは、耕作や攪乱の影響であると考えられる。

* II層：樽前 a 降下軽石層 (T a - a)

1739年に噴火した樽前山の火山噴出物から構成される。粒子の違いから、フォールユニットとして大きく三つに分けられ(A～C群)、さらに細かく十単位(Unit 1～10)に分層される。上位部分が削平や耕作の影響を受けている地点が多く、低地部付近では厚く堆積している。また、水の影響を受け、赤色味(鉄分の集積)を帯びている部分も認められた。

* III層：黒色土層(千歳市域における第1黒色土層)

縄文時代晩期の遺物が極少量出土している。下位部分はT a - c 軽石の混入がみられる部分があり、これをIII 2層として区別した。通常III層と表記されているものは、III 1層を示す。低地部では、B - Tm(白頭山苦小牧火山灰)と考えられる火山灰が堆積している部分もある。灰白色の火山灰が薄く断続的に堆積し、最大層厚は5mm程度である。

* IV層：樽前 c 降下軽石層 (T a - c)

約2000年前(縄文時代晩期後半頃)に降下したとされる樽前山の火山噴出物から構成される層である。II層とは異なり、粒径のまとまりはなくランダムにみられ、構成物の相違から分層される。IV 1層は、軽石が砂壤土に混じるもので、III 2・V 1層と類似するが色調で区別される。IV 2層は、低地部ではフォールユニットとして認識できうる状況で認められる。上位は火山砂・灰が主体(T a - c 1)で、下位はスコリア層(T a - c 2)である。

* V層：黒色土層(千歳市域における第2黒色土層)

縄文時代晩期以前の遺物を包含する層である。上位のT a - c 軽石が混入する部分がV 1層で、IV層が残存しない部分では、III 2層と区別が困難な場合もあった。下位部分はV 2層で、この層の下位部分にはE n - a 軽石を含む場合がある。通常V層と表記されているものは、V 2層を示す。

* VI層：漸移層

上位の黒色土と下位のVII層の間に位置し、色調等の漸移的な変化がみられる。

VII層：黄褐色風化ローム層

いわゆる「恵庭のローム層」と呼ばれているもので、かつては恵庭 a 降下軽石層(VIII 2層)が風化し土壌化した結果、形成された層と考えられていた。しかし、近年は大陸起源の広域風塵の堆積物であると考えられている。

VIII層：恵庭 a 降下軽石で主体的に構成される層

堅密度、軽石の形状(円磨度)、混入物等から、二つに分けられる。上位はVIII 1層で、堅密度が「堅め」で、円磨が進行したE n - a 軽石や角のとれた岩石(火山岩等)の混入がみられるので、水成堆積層である可能性がある。下位(VIII 2層)は、堅密度が「しょう」(「堅密度の区分」『土壤調査ハンドブック』より)で、E n - a 軽石も角張っているものが多く、「恵庭 a 降下軽石層」であると考えられる。

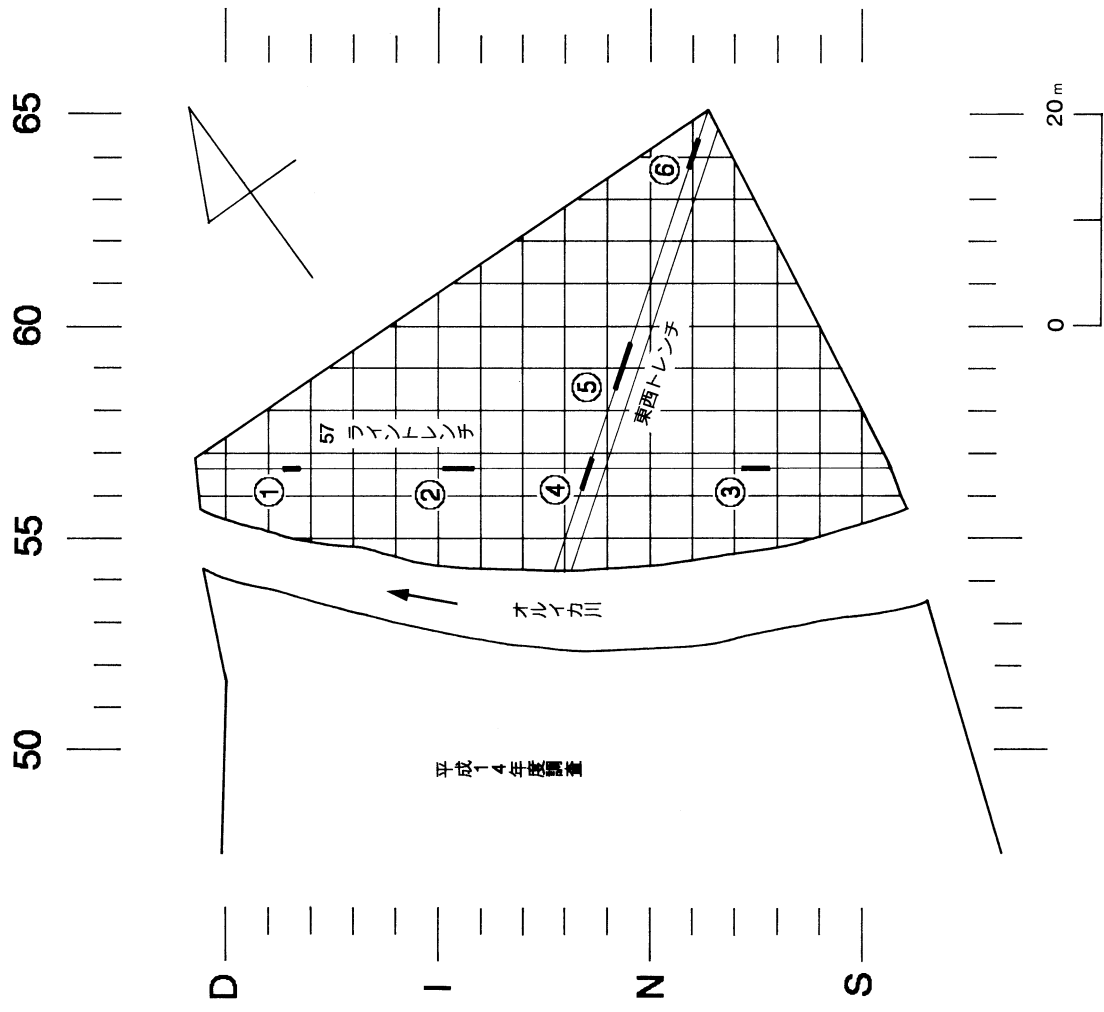


図9 先行トレンチ位置図及び土層断面実測位置図

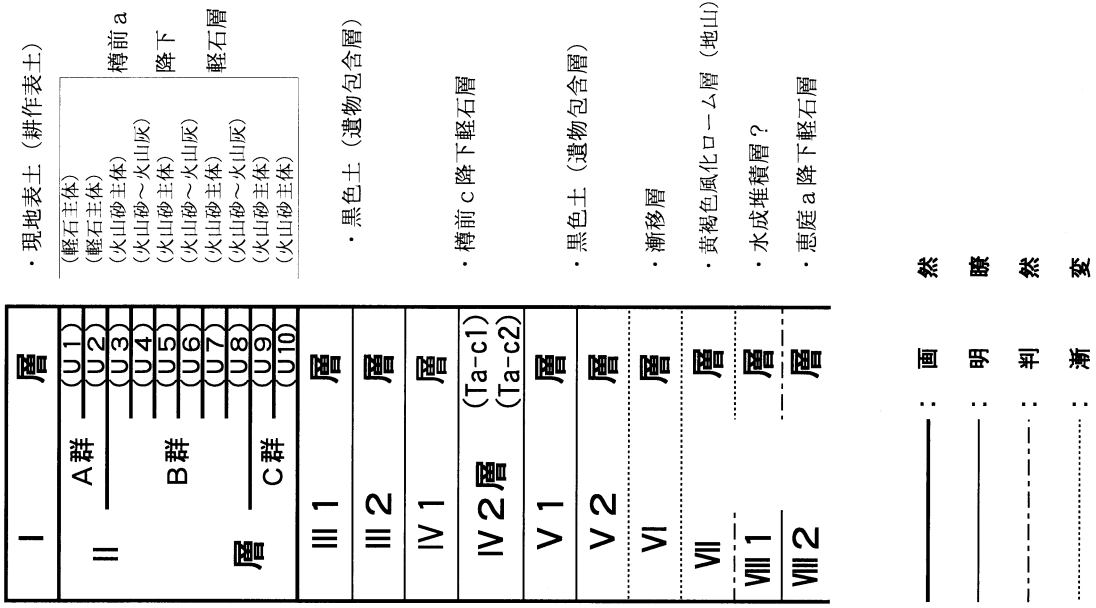
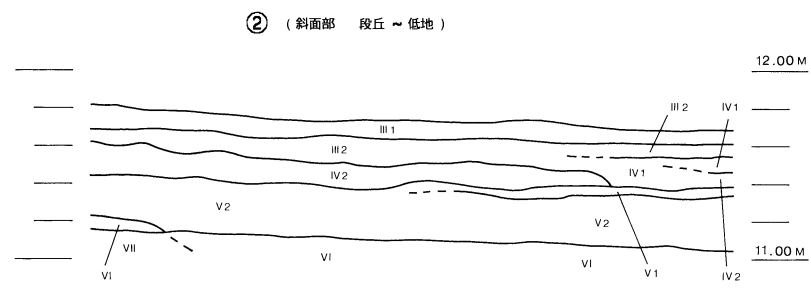
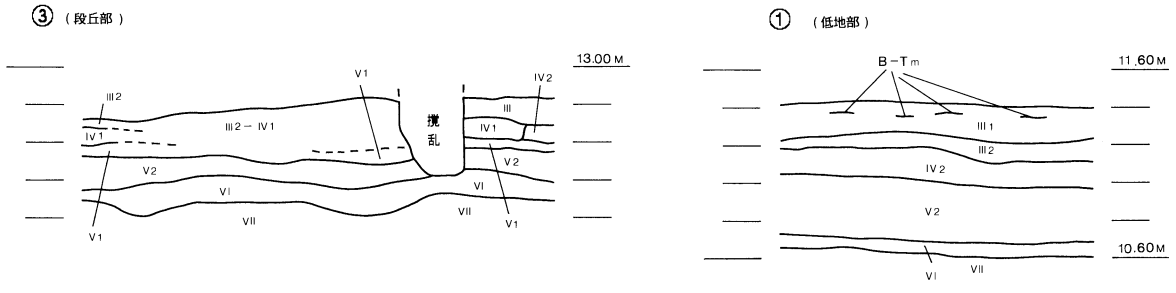


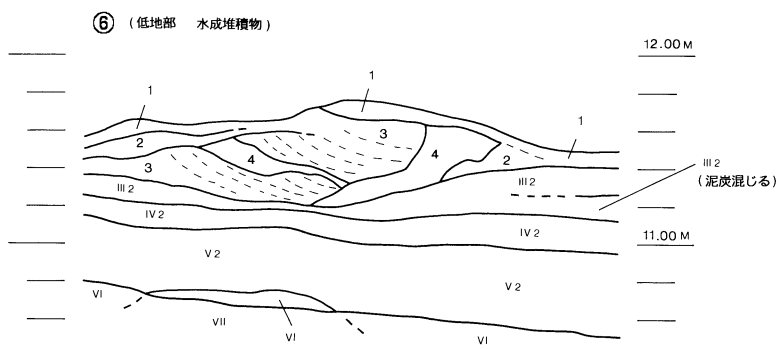
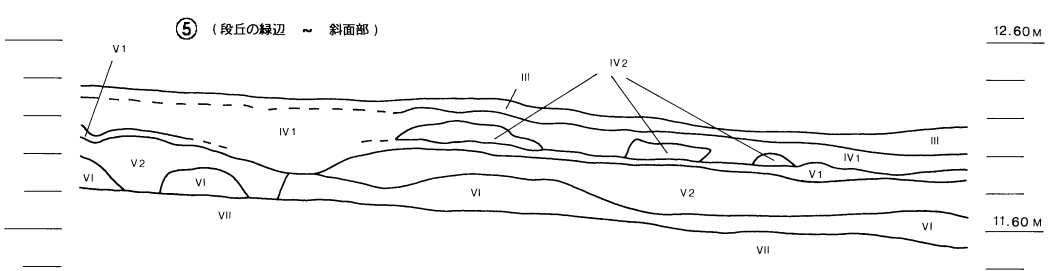
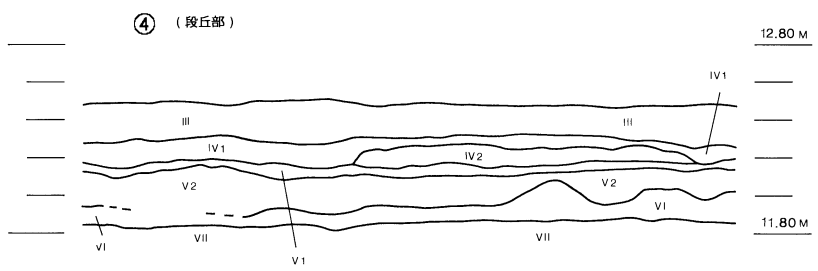
図10 基本層序柱状図

表 4 基本層序一覧表

層名	層名	層厚 (cm)	層界	砂・シルト・粘土				礫 (長径 2mm 以上)				備考
				野外土性	マンセル色系	調整	粘着性	堅密度	種類	混入割合 面積割合	粒径 (mm)	
I 層	現地表土	平均 60	画然	砂壤土～壤土	黒色 (10YR1.7/1)他	弱	すこぶる堅	Ta-a 軽石、Ta-c 軽石・スコリア	(主) 平均 30 角～亜角礫	未風化	耕作土・盛土・攪乱	
		平均 17	画然	火山砂含む	(灰白色) 軽石片 (黒色) 遊離した有色鉱物	*	*	Ta-a 軽石	(主) 平均 10 角～亜角礫	未風化		
		平均 7.5	画然	細粒の火山砂含む					無	無		
		U3	画然	火山砂主体					無	無		
		U4	画然	火山砂～火山灰主体					無	無		
		U5	画然	火山砂主体					無	無		
		U6	画然	火山砂～火山灰主体					無	無		
		U7	画然	火山砂主体 粗粒の軽石含む					無	無		
		U8	画然	火山砂～火山灰主体					無	無		
		U9	画然	火山砂主体 軽石含む					無	無		
U10	画然	火山砂主体	無	無								
III 層	黒色土層	平均 18	明瞭	壤土～シルト質壤土	黒色 (10YR2/1)他	中	軟	無	無			
		平均 8	明瞭	砂 壤 土	弱～中	軟～堅	Ta-c 軽石・スコリア	20%	平均 30 亜角礫		半風化	
IV 層	樺前 c 降下 軽石層	平均 16	明瞭	砂 壤 土	(暗灰色)	中	すこぶる堅	Ta-c 軽石・スコリア	40%	平均 20 亜角～亜円礫	半風化	Ta-c
		平均 4	明瞭	火山砂・灰主体	明褐色 (7.5YR5/6)	*	*	無	無	無	無	
		平均 13	明瞭	砂～砂壤土	暗赤褐色 (5YR3/6)	*	*	Ta-c 軽石・スコリア	(主) 平均 20 亜角～亜円礫	半風化～風化		
V 層	黒色土層	平均 3	明瞭	壤土～砂壤土	黒色 (10YR2/1)他	弱～中	堅	Ta-c 軽石・スコリア	30%	平均 5 亜角～亜円礫	半風化～風化	
		平均 25	明瞭	壤 土	にぶい黄褐色 (10YR4/3)他	弱～中	軟	En-a 軽石	5%	平均 5 亜円礫	風化	
VII 層	漸 移 層	平均 20	漸変	壤土～堆積土	明黄褐色 (10YR6/6)他	中	堅～ すこぶる堅	En-a 軽石	5%	平均 5 亜角～亜円礫	風化	
		平均 20	漸変	壤土～堆積土	明黄褐色 (10YR7/6)他 ～黄褐色 (10YR7/8)	中	すこぶる堅 ～固結	En-a 軽石	5～50%	平均 7 亜角～亜円礫	風化	
VIII 層	恵庭 a 降下 軽石で主体 的に構成さ れる層	平均 23	明瞭～ 判然	砂 壤 土	明黄褐色 (10YR7/6)他 ～黄褐色 (10YR7/8)	中	すこぶる堅 ～固結	En-a 軽石	(主) 平均 12 亜角～円礫	風化～腐朽	水成堆積層	
		*	*	砂 土 (火山礫主体)	明黄褐色 (10YR7/6)他 ～黄褐色 (10YR7/8)	*	*	En-a 軽石	(主) 平均 10 亜角～円礫	風化～腐朽	En-a 恵庭 a 降下軽石層	



① III 1層とII 2層の境界より下位は、泥炭を含み、還元色強い。
 B-T m: 灰白色の火山灰層、最大層厚5mm程度以下。
 V 2層: 泥炭多量に混じる、にぶい褐色 (7.5YR3/4)。
 V層: 黒色 (2.5Y2/1) ~ オリーブ黒色 (5Y3/1)。
 VII層: オリーブ黒色 (5Y3/2)。
 ② 泥炭あまり混じらない、VII層からVI層はやや還元色(黄灰色味)帯びる。



⑥
 1: 礫の混入なし、硬質土〜シルト質硬土、黒色 (2.5Y2/1)、若干還元色帯びる。
 2: 礫の混入なし、1に比べて若干黒色味強く、黄灰色味帯びる。
 3: 水成堆積層 ラミナみられる、砂と細粒の礫(粒径5mm程度以下)主体の層。最大粒径10mm程度の礫5%、及びE n-a 軽石(黄灰色〜灰白色 最大粒径15mm程度 円礫〜極円礫状)10%程度混じる。
 4: 水成堆積層 礫主体の層(IIIの中州等にみられる「砂洲」状の堆積、高まりを形成する)。E n-a 軽石(黄灰色〜灰白色 最大粒径15mm程度 円礫〜極円礫状)15%程度混じる。
 III 2層: 層が厚い部分は、下位に泥炭が多い。
 IV 2層: 赤色味強い 分離される(上位: T a-c 1 下位: T a-c 2)。
 V 2層・VII層・VI層: 還元色を呈する。

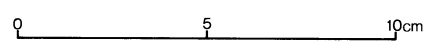


図11 土層断面図

土層断面図の説明 (図11)

土層断面図は、I・II層を除去した後に作成したので、記録したのはIII層より下位の層序である。二本の先行トレンチの壁を、部分的(地点①～⑥)に図示した。

57ライントレンチ(南西面)

・地点①：低地部(E-56区)

III層上位に断続的にB-Tmの堆積が認められる。B-Tmは最大層厚5mm程度で、灰白色を呈する。IV層はみられない。

・地点②：斜面部 段丘～低地(I-56区)

IV層及びV層が低地部側に堆積する。還元色を呈するのは、VI層より下位である。

・地点③：段丘部(P-56区)

III層及びV層、IV層が明確に区別できない部分がある。

東西トレンチ(北西面)

・地点④：段丘部(L-56区)

III層中にはT a - cの混入が認められない。IV層やV層が連続して認められる。

・地点⑤：段丘の縁辺～斜面部(M-58・59区)

III層・V層が、IV層と区別できない部分があり、IV層が大きく落ち込んでいるように見える。IV層はIV層中に断続的に認められる。

・地点⑥：低地部(O-64杭付近)

第1・2層はT a - aの下位で、III層上位に位置する黒色土層である。第3・4層はともに砂礫を主体とする水成堆積物で、円～極円礫状のE n - a軽石の二次堆積が特徴的である。III層の下位部分から下の層は、泥炭を多量に含む。

この部分は急激に落ち込む地形がみられ、また、水成堆積層も認められることから、オリイカ川の旧河道である可能性が考えられる。また、この付近の調査区壁を観察すると、次のような堆積が認められる。すなわち、上から、地表土(I層)、黒色土(埴壤土)、砂礫主体の水成堆積層(川砂)、二次堆積のT a - a、黒色土(埴壤土)、プライマリー堆積のT a - a(II層)、第1・2層、第3・4層、黒色土(III層)である。さらに極めて部分的であるが、噴出起源不明の火山灰と思われる層も認められた。

(末光正卓)

3 整理の方法

(1) 土器

一次整理の完了した遺物は、現場で仮収納された後、江別市にある整理作業所に運搬され、報告書作成のための本格的な整理作業を行った。

土器の接合作業は、遺構出土のものから着手した。同時期（同群）の破片に未分類のものを加え、原則として「磨耗」、「小破片」を除くものを対象とした。遺構内での接合、遺構が位置するグリッド、及びそこに位置する別の遺構の土器との接合を行い、順次、周辺のグリッドへと接合できる破片を探すように作業を進めた。包含層出土のものについても同様に行ったが、点数が少ないので遺構・グリッドを越えて接合することも試みた。

最終的に、接合した破片の集まり具合を把握し、復原可能なものとそれ以外のものに分類し、前者は復原作業を行い立面の実測図を作成した。また、特徴が認識しやすい口縁部や底部の破片を掲載遺物として主に選出し、拓影図と垂直方向の断面図を組み合わせで掲載した。すべての掲載土器については、観察表を作成した。

また、以上の作業と並行して集計作業等も行い、その成果をもとに、出土点数表や出土分布図等を作成した。

(2) 石器類

石器類は、はじめに磨製石器群、礫石器群・自然礫のうち、「片」に分類したものを対象に、接合作業を行った。結果、接合するものはわずかであった。

次に、報告書に掲載する石器の選び出しを行った。選択条件は、残存状態が「完形」、「準完形」のものを中心に、器種や形態の多様性を示しえることを考慮した。これらについては実測図を作成し、観察表とともに掲載した。

また、これらの作業と並行して集計作業等も行い、これをもとに出土点数表や、遺物出土分布図等を作成した。

(3) 遺物と記録類の保管

遺物は、北海道教育委員会の管轄の元、北海道立埋蔵文化財センターにおいて保存・活用される。整理作業の完了した遺物は次のように収納した。

はじめに「報告書掲載」と「未掲載」に分け、さらにこれを、それぞれ「遺構出土」、「包含層出土」に分けた。報告書掲載の遺物は、掲載図版・番号等を明記し収納した。一方、未掲載のものについては、遺構出土の土器は遺構ごと、包含層出土のものは、時期、出土グリッドごとにまとめ収納した。遺構出土の石器類も遺構ごとにまとめ、包含層出土のものは石器群、器種、出土グリッドごとに収納した。

現場及び整理作業で作成した各種図面類、写真フィルム、遺物整理台帳については、当面は北海道立埋蔵文化財センターで保管される。図面類は、現場で作成した「原図」及び、版下原稿用に手を加えた「素図」を保管する。図面は通し番号を付し、作成対象、縮尺、作成担当者等を明記し、これらを一覧表にした図面台帳とともに保管する。整理作業で作成した遺物の図面類についても報告書の掲載番号を明記し、図面台帳を作成した。写真は、被写体等を記録したフィルム台帳を作成し、アルバムに保存する。遺物登録台帳は、パソコンデータで作成したものを保存する。

(末光正卓)

4 遺物の分類

(1) 土器

土器は、次の三つの分類基準を用いて分類した。

* 「時期分類基準」

「I 群」：縄文時代早期

a 類；貝殻文、条痕文、沈線文を有する土器群

b 類；東釧路式系土器群

「II 群」：縄文時代前期

a 類；縄文尖底土器群

b 類；円筒土器下層式、及びそれに伴う土器群

「III 群」：縄文時代中期

a 類；円筒土器上層式、サイベ沢Ⅶ式、萩ヶ岡 1・2 式に相当する土器群

b 類；萩ヶ岡 3 式（天神山式）、柏木川式、北筒式に相当する土器群

「IV 群」：縄文時代後期

a 類；余市式（伊達山式・タブコブ式）、入江式に相当する土器群

b 類；ウサクマイ C 式、手稲式、ホッケマ式に相当する土器群

c 類；堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当する土器群

「V 群」：縄文時代晩期

a 類；大洞 B・BC 式、及びそれに伴う土器群

b 類；大洞 C 1・C 2 式、及びそれに伴う土器群

c 類；大洞 A・A' 式、及びそれに伴う土器群

「VI 群」：続縄文時代に属するもの

「VII 群」：擦文時代に属するもの

「未分類」：時期が判断できないもの

「土製品」

* 「破片部位の分類基準」

土器破片で部位について次のように分類した。丸括弧内は、台帳等の記入に用いた記号である。

「口縁部」(r i)：口唇部が残存している破片

「底部」(b a)：底面が残存している破片

「胴部」(b o)：口縁部、底部破片以外のもの

「不明・その他」：明確に部位を特定できないもの、あるいは、剥落した貼付部分や、口縁の突起部分の破片等

* 「残存状態に関する分類基準」

土器破片の残存状態を次のように分類した。丸括弧内は、台帳等の記入に用いた記号である。

「良好」：破片の表裏面及び、割れ口ともに良好な状態のもの

「剥離」(ハ)：破片の表裏面のいずれか、あるいは両面が、約 1 / 2 以上剥離・剥落している状態のもの

「磨耗」(マ)：破片が磨耗（特に割れ口）している状態のもの

「小破片」(小)：大きさが長径 2 cm 程度以下の小さな破片

この分類の目的は、報告書作成を目的とする二次整理作業を、効率よく進めることに主たる狙いを

おいたものである。整理作業は、「良好」・「剥離」のものを中心として行った。

「磨耗」のものは、表裏面に文様や器面調整の痕跡等が明瞭に残存しておらず、時期等を判断する上で制約が大きい。しかも磨耗した割れ口は、接合作業に耐えられないと考えた。また、「小破片」は、その小ささのため、時期を判断することが困難であり、さらに器形復原を目的とする接合作業に与える影響が少ないと考えた。

(2) 石器類

石器は、次の二つの分類基準を用いて分類した。

* 「器種分類基準」

I 剥片石器群（石材：黒曜石、頁岩等）

「石鏃」

「石槍・ナイフ」

「石錐」

「つまみ付きナイフ（石匙）」

「スクレイパー」

「石製品」

「U・Rフレイク」

* 「U・Rフレイク」は、定形的な形態は有さないが、加工あるいは使用と考えられる痕跡を有するもので、両者を一括したのは、認められる痕跡が加工痕か使用痕か厳密には区別できないためである。

Uは「utilized」、Rは「retouch」の意味である。

「石核（残核）」

「フレイク（剥片）」

「チップ（碎片）」

「原石」

II 磨製石器群（石材：泥岩、片岩、蛇紋岩等）

「磨製石斧」

「石製品」

「擦切残片」

「研磨石材」

「原石」

III 礫石器群

「石錘」

「たたき石」

「すり石」

「砥石」

「台石・石皿」

IV 「自然礫」

* 「残存状態に関する分類基準」

石器類の残存状態を次の基準を用いて分類した。

剥片・磨製石器群

「完形」：残存表面積が90%程度以上のもの

「準完形」：「完形」と「半形」の間～やや完形に近いもの

「半形」：残存表面積が50%程度のもの

「片」：残存表面積が50%程度以下のもの

礫石器群・自然礫

「完形」：大きな割れ口がないもの、またあっても機能部が損なわれていないもの

「準完形」：割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存表面積が75%程度のもの

「半形」：割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存表面積が50%程度のもの

「片」：割れ口があり、完形の状態を想定しにくいもの、残存表面積が50%程度以下のもの

- ・自然礫に関しては、割れ口のないものを「完形」、あるものを「片」とし、二区分とした。

(末光正卓)

Ⅲ章 遺構と出土遺物

1 概要 (図12 表5)

本年度の調査で、確認された遺構は、土坑2基(L P I - 9・10)、土器破片集中1ヶ所(L C P - 4)、礫集中1ヶ所(L C S - 2)、焼土10ヶ所(V F P - 1~10)である。これらの遺構が分布する地点は、南側の段丘部と北西側の低地部の二ヶ所が認められる。前者にはL C P - 4、L P I - 10、V F P - 1~10があり、後者にはL P I - 9とL C S - 2がある。57ラインよりも北東側の斜面部から、オリイカ川旧河道の低地部では遺構が全く認められない。

L P I - 9では、覆土中から台石と自然礫等がまとまって出土し、L P I - 10は浅いものである。L C P - 4からは、胴部中位から底部にかけての破片がまとまって出土し、L C S - 2からは自然礫がまとまって出土した。焼土は昨年度の調査方法に従い、炉跡と考えられるものについてのみ報告の対象とした(北埋調報188)。10ヶ所を数える焼土のうち、V F P - 5・7以外は、ほぼ同じ様相を示す。V F P - 5は、他のものとは比べ明瞭な色調を呈し、近くからIV群a類土器の破片が出土しており、土器囲い炉である可能性が考えられる。V F P - 7は長楕円形を呈する焼土がみられ、下位にも覆土と判断される土層が認められたものである。これは、覆土最上位に焼土が堆積する、掘り込みを有する遺構であると判断される。

すべての遺構はIV層より下位、V層を中心とする層位的な位置で確認されており、そのことからIV層が堆積する以前の時期、すなわち、縄文時代晩期後半以前であると判断できる。次に出土遺物から考えると、本遺跡出土の遺物は、縄文時代後期初頭のもものが最も多く、ついで晩期後半であり、遺構は概ねこれらの時期に属すると推測される。ただし、上位層が削平されていた段丘部に位置する焼土については、この時期に該当しないものも含まれる可能性がある。

(末光正卓)

2 土坑(L P I)

L P I - 9 (図13 表6 図版2)

位 置 G-56区

規 模 1.48×1.12/0.88×0.74/0.96 m

平面形態 楕円形

確認・調査 V層上面において、IV層が落ち込んでいる状況を確認し、南西側を半截した。10cm程掘り下げたところで石器類が集中して出土し、さらに掘り下げたところ壁の立ち上がりと坑底を確認した。

覆 土 V層を起源とする還元した黒色土であり、E n - a軽石が混じる。

遺物出土状況 覆土から石鏃1点、台石3点、自然礫6点がまとまって出土した。

時 期 時期を決定する遺物の出土はないが、包含層の遺物等から縄文時代後期初頭か晩期後半と考えられる。

(菊池慈人)

L P I - 10 (図13 表6)

位 置 N-55区

規 模 1.04×(0.59)/0.92×(0.56)/0.09 m

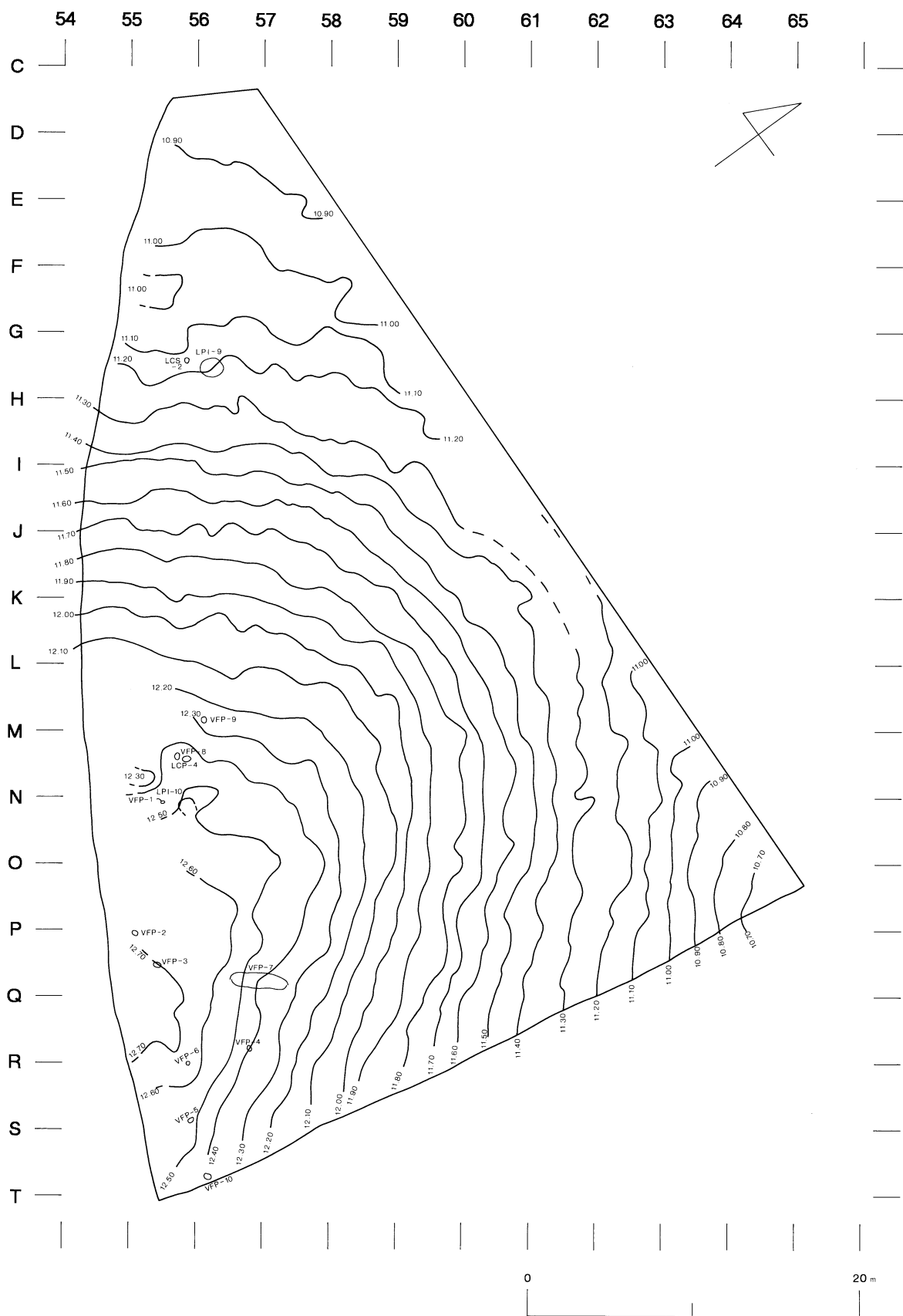
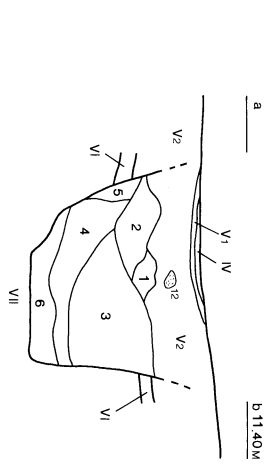
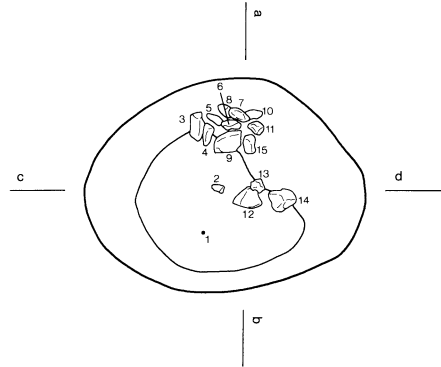
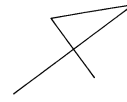


図12 遺構位置図及びV層上面地形測量図

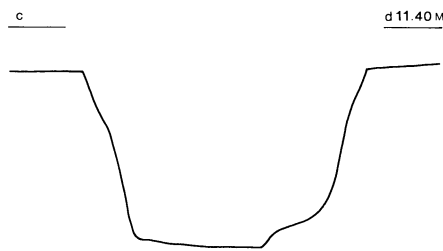
LPI-9 (G-56区)



G-56
H-56

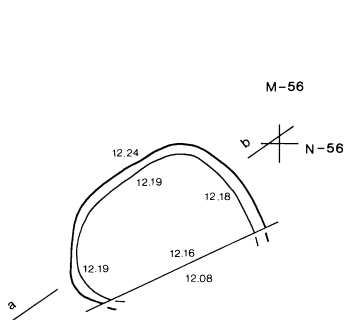


- LPI-9
- 1: 覆土第1層・10.96・(石鉄)
 - 2: 覆土第1層・11.00
 - 3: 覆土第1層・10.90
 - 4: 覆土第1層・10.93
 - 5: 覆土第1層・10.91
 - 6: 覆土第1層・10.93
 - 7: 覆土第1層・10.94
 - 8: 覆土第1層・10.92
 - 9: 覆土第1層・10.93
 - 10: 覆土第1層・10.94
 - 11: 覆土第1層・10.94
 - 12: 覆土第1層・10.92
 - 13: 覆土第1層・10.93
 - 14: 覆土第1層・10.93
 - 15: 覆土第1層・10.85

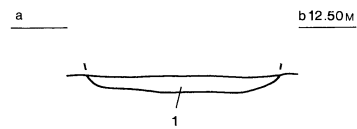


- LPI-9
- 1: V層主体 オリーブ黒色 (SY3/2) 強 堅 En-a 軽石30%程度混じる
 - 2: V層主体 オリーブ黒色 (SY3/2) 強 堅 En-a 軽石2%程度混じる
 - 3: V層主体 灰オリーブ色 (SY4/2) 強 堅 En-a 軽石5%程度混じる
 - 4: V層主体 オリーブ黒色 (SY3/1) 強 堅 En-a 軽石2%程度混じる
 - 5: V層主体 オリーブ色 (SY2/2) 強 堅 En-a 軽石2%程度混じる
 - 6: V層主体 照オリーブ色 (SY4/3) 強 軟 En-a 軽石2%程度混じる
- * 全体的に還元色を呈する

LPI-10 (N-55区)



M-56
N-56



- LPI-10
- 1: V2層主体 中 堅 En-a 軽石5%程度混じる

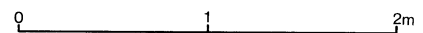
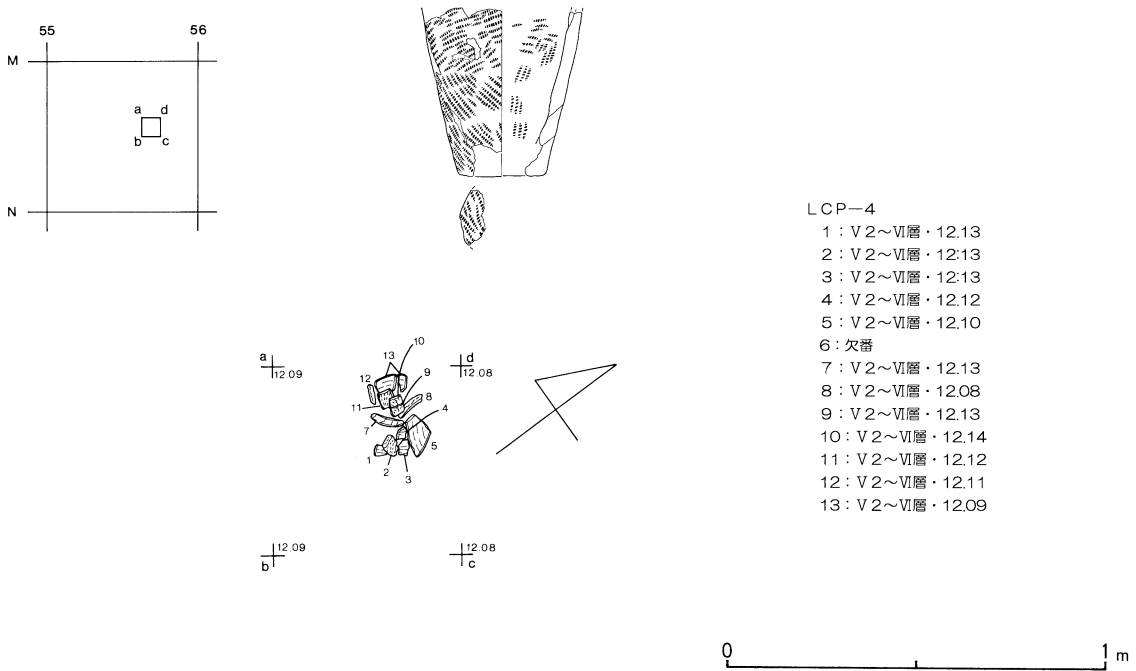


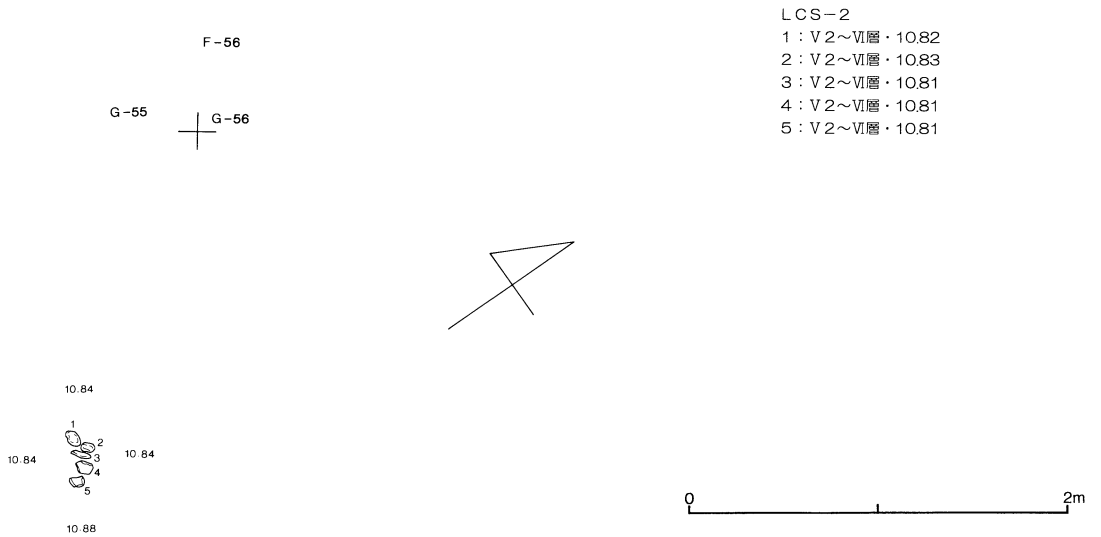
図13 土坑 (LPI-9・10)

LCP-4 (M-55区)



- LCP-4
- 1 : V2~VI層・12.13
 - 2 : V2~VI層・12.13
 - 3 : V2~VI層・12.13
 - 4 : V2~VI層・12.12
 - 5 : V2~VI層・12.10
 - 6 : 欠番
 - 7 : V2~VI層・12.13
 - 8 : V2~VI層・12.08
 - 9 : V2~VI層・12.13
 - 10 : V2~VI層・12.14
 - 11 : V2~VI層・12.12
 - 12 : V2~VI層・12.11
 - 13 : V2~VI層・12.09

LCS-2 (G-55区)



- LCS-2
- 1 : V2~VI層・10.82
 - 2 : V2~VI層・10.83
 - 3 : V2~VI層・10.81
 - 4 : V2~VI層・10.81
 - 5 : V2~VI層・10.81

図14 土器破片集中 (LCP-4)・礫集中 (LCS-2)

平面形態 楕円形

確認・調査 包含層調査終了後、VII層上面で楕円形を呈する黒色土の堆積が認められた。長軸方向に半截し、断面を観察した結果、浅いが、壁の立ち上がりや概ね平坦な坑底を確認したので、遺構と判断した。東側およそ1/5が削平されている。

覆 土 V2層を主体とする層で、En-a軽石が微量に混じる。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 遺物の出土はなかったが、縄文時代後期初頭か晩期後半と推測される。

(末光正卓)

3 土器破片集中 (LCP)

LCP-4 (図14 表6 図版4)

位置 M-55区

規模 (範囲) 0.22×0.16 m

層位 V2～VI層

確認 包含層調査中、V2層下位で、複数の土器破片がまとまって出土した。

調査 はじめに、平面における遺物の出土状況を確認することとし、土器破片を出土位置から動かさないように、周囲の土を丹念に取り除いてから記録した。その後、東側半分の遺物を取り上げ、そこに断面観察のためのトレンチを設け掘り下げたが、人為的な痕跡は認められなかった。

遺物 破片は「小破片」を除いて、すべて平面的な位置と高さ、層位を記録して取り上げた。胴部中位～底部までの深鉢の破片がまとまって出土したもので、IV群a類のタブコブ式1個体が復原された(図19-1)。他の個体の破片はみられなかった。

時期 出土土器から縄文時代後期初頭である。

(末光正卓)

4 礫集中 (LCS)

LCS-2 (図14 表6 図版3)

位置 G-55区

規模 (範囲) 0.30×0.16 m

層位 V2～VI層

確認 包含層調査中、V2層下位で、長径5～7cm程度の自然礫が複数認められた。

調査 はじめに、平面における遺物の出土状況を確認することとし、自然礫を出土位置から動かさないように周囲の土を丹念に取り除いてから記録した。遺物を取り上げてから、断面を把握するために、トレンチを設け掘り下げたが、人為的な痕跡は認められなかった。

遺物 出土した自然礫は、すべて平面的な位置と高さ、層位を記録して取り上げた。

時期 時期を判断できる遺物の出土はなかったが、縄文時代後期初頭か晩期後半と推測される。

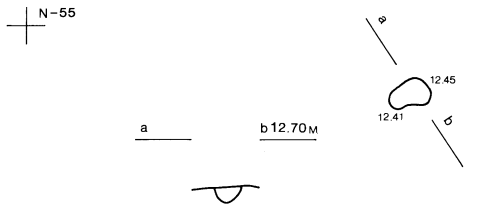
(末光正卓)

5 焼土 (F P)

VFP-1～10 (図15～17 表6・7 図版2・3)

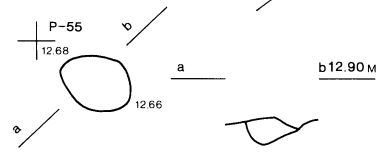
焼土は、昨年度に炉跡と明確に判断できるもののみを調査・報告の対象とすることを目的とし、いくつかの観察項目を設定し、これを基準に選出することを試みた(北埋調報188)。本年度においてもこれを踏襲し、調査・報告の対象とする焼土とそうしないものを区別した。ここに掲載したものは、昨年度に設けた観察項目にならい、観察・検討した結果、「炉跡」であろうと判断したものである。個々の焼土の属性については、表7にまとめて掲載した。ただし、これらのうち、VFP-5は土器囲い炉の可能性があり、さらにVFP-7と付した遺構は掘り込みを有するものであるので、この二つに関しては個別に報告する。

VFP-1 (N-55区)



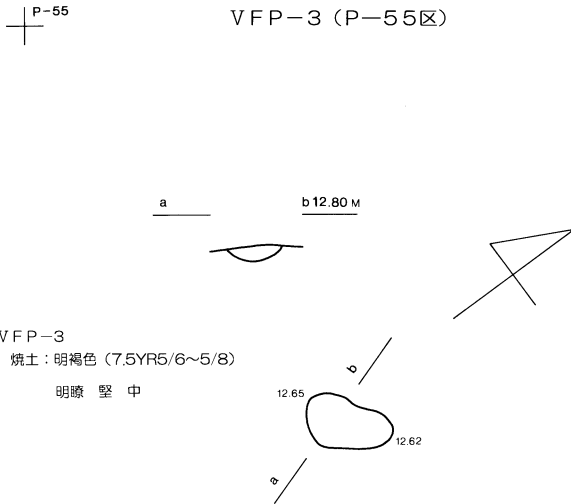
VFP-1
 焼土：明褐色 (7.5YR5/6~5/8) 判然~明瞭 堅~すこぶる堅 中

VFP-2 (P-55区)



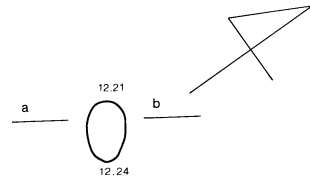
VFP-2
 焼土：明褐色 (7.5YR5/8) 明瞭 堅 中

VFP-3 (P-55区)



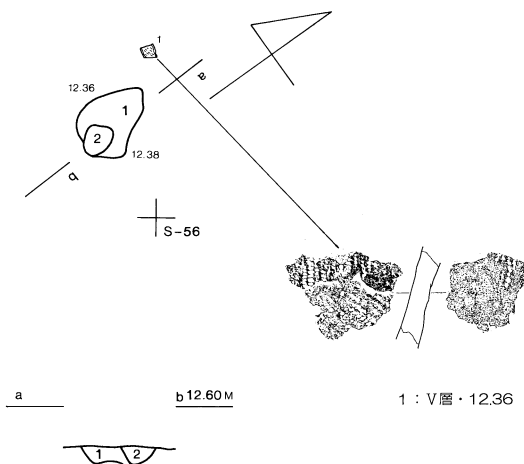
VFP-3
 焼土：明褐色 (7.5YR5/6~5/8)
 明瞭 堅 中

VFP-4 (Q-56区)



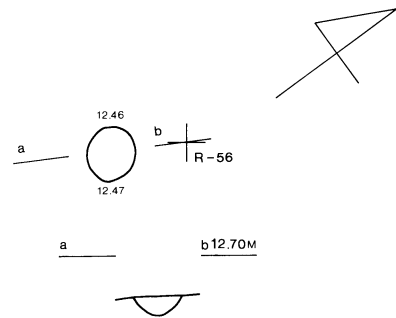
VFP-4
 焼土：明褐色 (7.5YR5/6~5/8) 判然~明瞭 堅 中

VFP-5 (R-55区)



VFP-5
 1：焼土にV層 40%程度、En-a 軽石 5%程度混じる 判然~漸変 堅~すこぶる堅 中
 2：焼土 明赤褐色 (5YR5/8) 明瞭 堅 中

VFP-6 (Q・R-55区)



VFP-6
 焼土：明褐色 (7.5YR5/6) 判然~漸変 堅~すこぶる堅 中

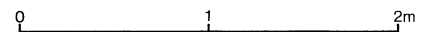


図15 焼土(1)・VFP-1~6

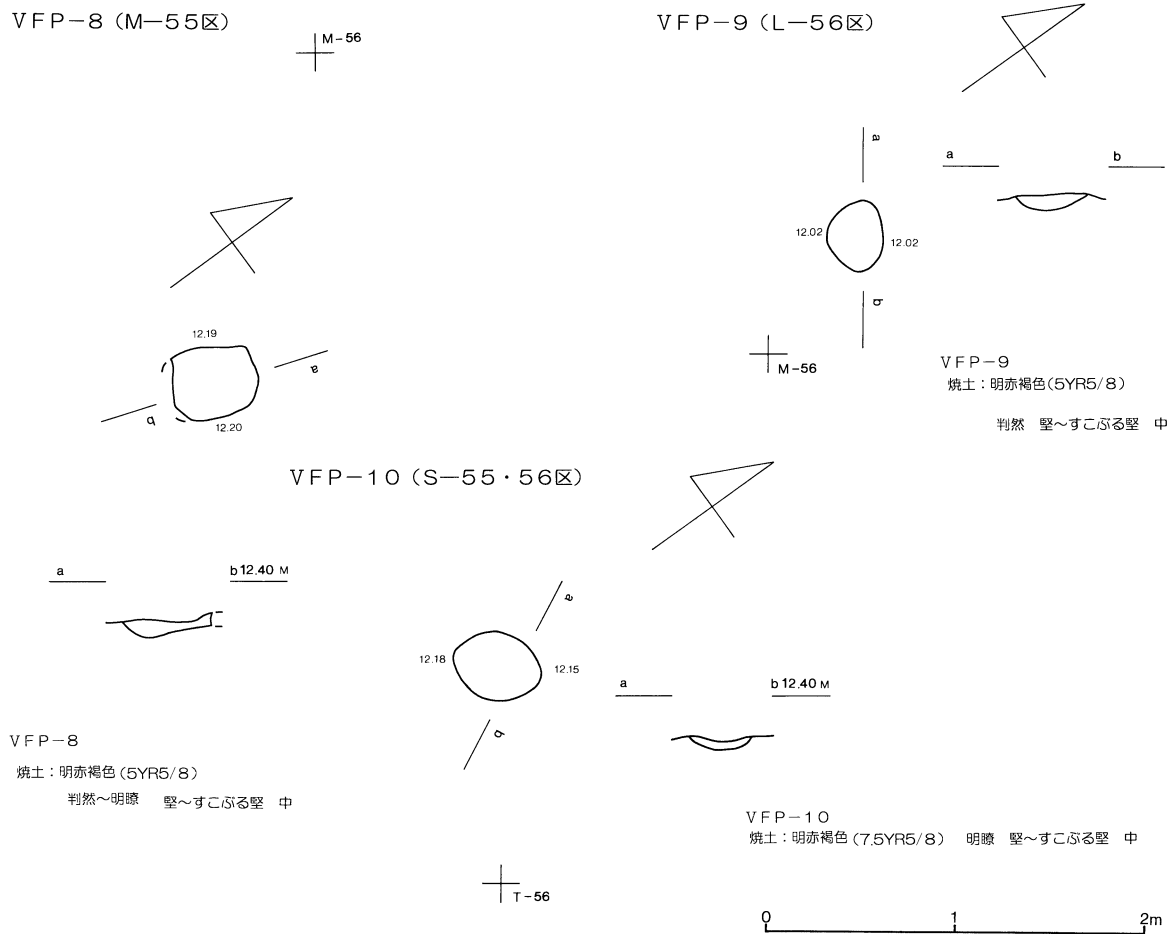


図16 焼土(2)・VFP-8～10

VFP-5 (図15 表7 図版3)

位置 R-55区

規模 0.18×0.14/0.10 (0.44)×(0.32)/(0.10) m

平面形態 楕円形

被熱層 V層

色調 明赤褐色(5YR5/8)

確認・調査 包含層調査中、V層で楕円形を呈する赤褐色土の堆積が認められた。遺構の中心を通るようにトレンチを設け、平面と断面を観察した結果、炉跡であると判断した。付近のほぼ同じ高さ(V層)から、IV群a類土器の破片が出土し、土器囲い炉である可能性が考えられる。

土層断面 第1層は、焼土とV層がほぼ同量混ざるもので、第2層は他の土の混ざらない焼土である。本遺跡で確認された焼土のうち、最も赤色味が強い。

遺物出土状況 近くからIV群a類タプコプ式の土器破片が出土した。

時期 縄文時代後期初頭と推測される。

VFP-7 (図17 表6 図版2)

位置 P-56・57区

規模 3.54×0.91/3.07×0.62/0.68 m

VFP-7 (P-56・57区)

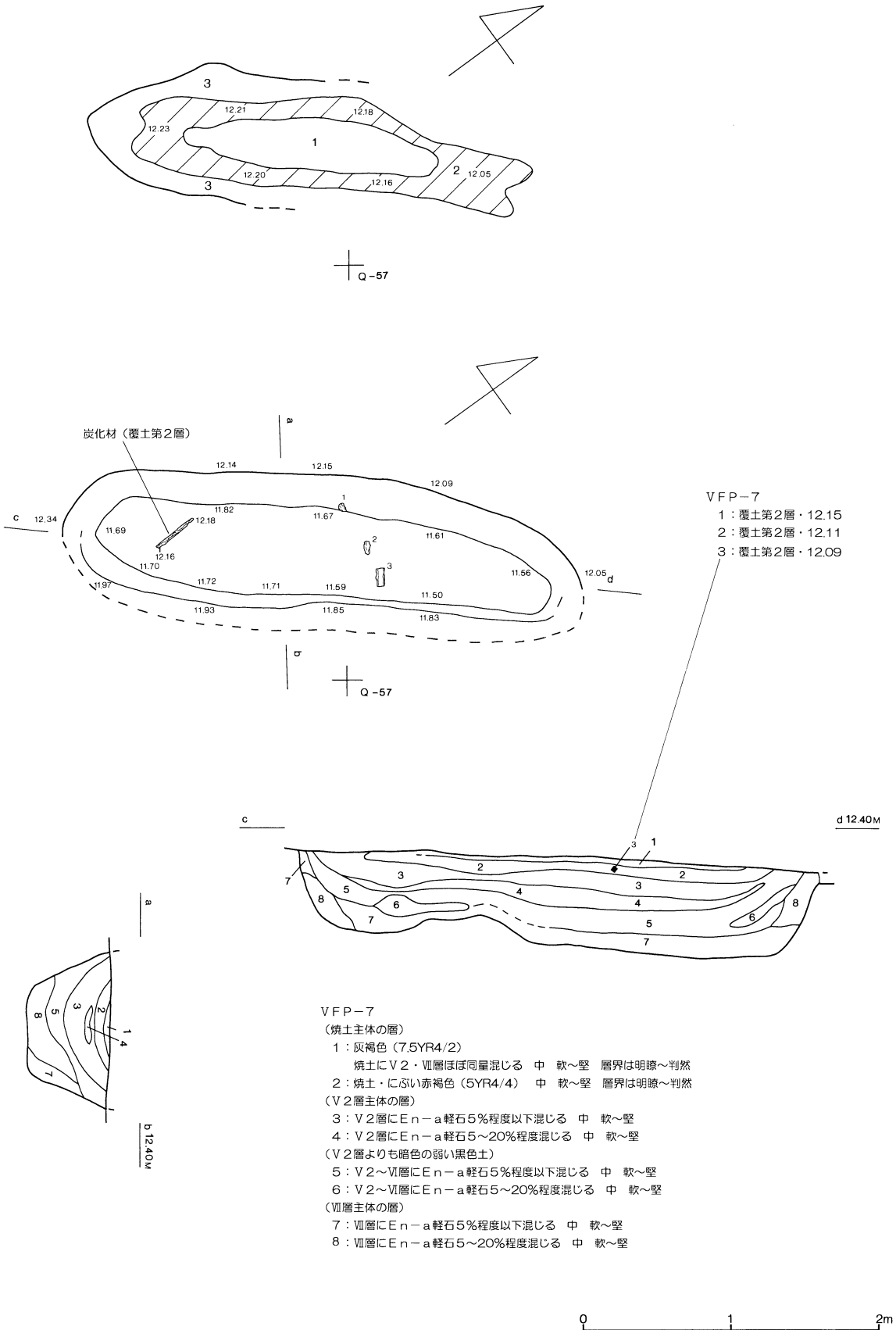


図17 焼土(3)・VFP-7

平面形態 長楕円形

確認・調査 包含層調査後、Ⅶ層上面で長楕円形を呈する落ち込みが認められた。中央部に灰褐色土、その周囲を赤色土とⅤ2層主体の土が囲むように堆積していた。はじめにこの確認状況を記録した。大きさから炉跡とは考えがたかったが、調査の手續き上「FP」の略号を与えた。遺構の中心で交わるように長短軸両方向にトレンチを設け、深いためそのトレンチを拡張しながら掘り下げた。両軸の断面を観察した結果、中央部がゆるやかにくぼむ、自然堆積の状況が確認された。

断面形態 短軸方向は、壁がゆるやかに立ち上がり、坑底は中央部が若干高い。長軸方向でも、両壁はゆるやかに立ち上がるが、中央部分よりやや南西側に高い部分が認められる。

覆土 おおまかに四つに分けられ、さらに分層される。第1・2層は焼土主体の層で、第2層はにぶい赤褐色を呈する。第3・4層はⅤ2層主体、第5・6層はやや暗色の弱いⅤ2層主体の土で、漸移層が混在しているのかもしれない。第7・8層はⅦ層主体である。

遺物出土状況 覆土第2層（焼土）のみから遺物が出土した。中央よりやや北東よりの部分から砥石、自然礫が出土し、南西部分では炭化材が確認された。

時期 時期を判断できる遺物の出土はなかったが、縄文時代後期初頭か晩期後半と推測される。
(末光正卓)

6 出土遺物

(1) 土器 (図18 表8～10 図版5)

遺構出土の土器をまとめて報告する。遺構から出土した土器の総点数は64点で、復原土器となった破片が37点、破片の状態で掲載するものが1点、報告の対象としたものは合計38点で、掲載率は59%となる。

復原土器 (図18 表9 図版5)

「LCP-4・Ⅴ2～Ⅵ層出土」

1はまとめて破片が出土したもので、胴部中位～底部までが復原できた。外反する胴部中位から直線的に底部へとすぼまる器形を呈する深鉢である。外面にはRL原体による斜行縄文が施されるが、胴部中位付近はやや横走気味の部分がある。内面にも縦走、横走する縄文が施され、この地文施文後、器面がナデ調整される。底部外面にも縄文が認められる。胎土には細粒の砂礫が多くみられ、黒雲母等の有色鉱物が目立つ。繊維の混入はなく、IV群a類のタブコブ式であると判断される。

破片土器 (図18 表10 図版5)

「VFP-5・周辺包含層Ⅴ層出土」

2は胴部の破片である。外面にはRL原体による斜行、縦走縄文が施され、さらに器面には粘土がかぶさったような「段」がある。また内面にも縄文が施される。胎土にはやや粗粒(5mm程度以上)の堆積岩の混入が多く認められる。繊維の混入はなく、IV群a類のタブコブ式であると判断される。

(2) 石器類 (図19・20 表11～14 図版5・6)

遺構出土の石器類をまとめて報告する。遺構から出土した石器類の総点数は24点である。このうち報告の対象としたものは17点となり、掲載率は71%である。

「LPI-9・覆土第1層出土」

剥片石器群 (図19 表12 図版5)

1は石鏃で、背腹両面に剥離面を残す。背面の基部側は丹念に二次調整が行われるが、先端部は周縁にのみ施される。石材は、細粒の小球果を含む黒曜石である。

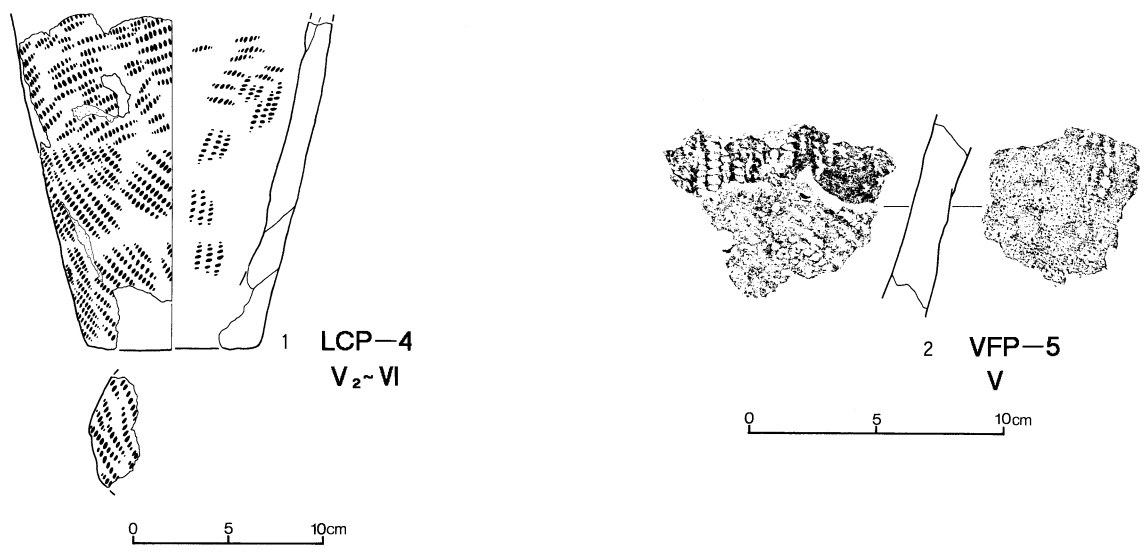


図18 遺構出土の土器

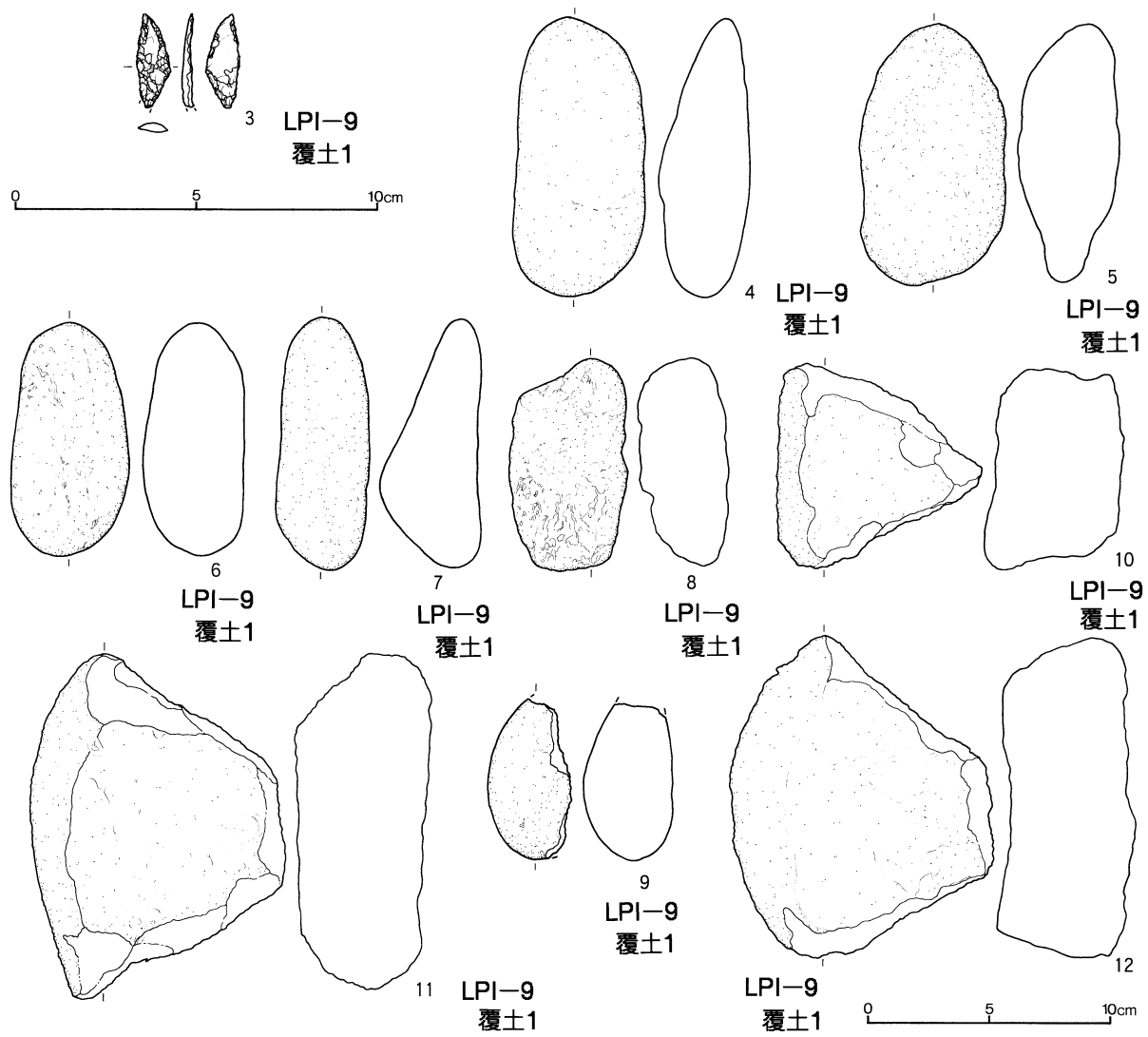


図19 LPI-9 出土の石器

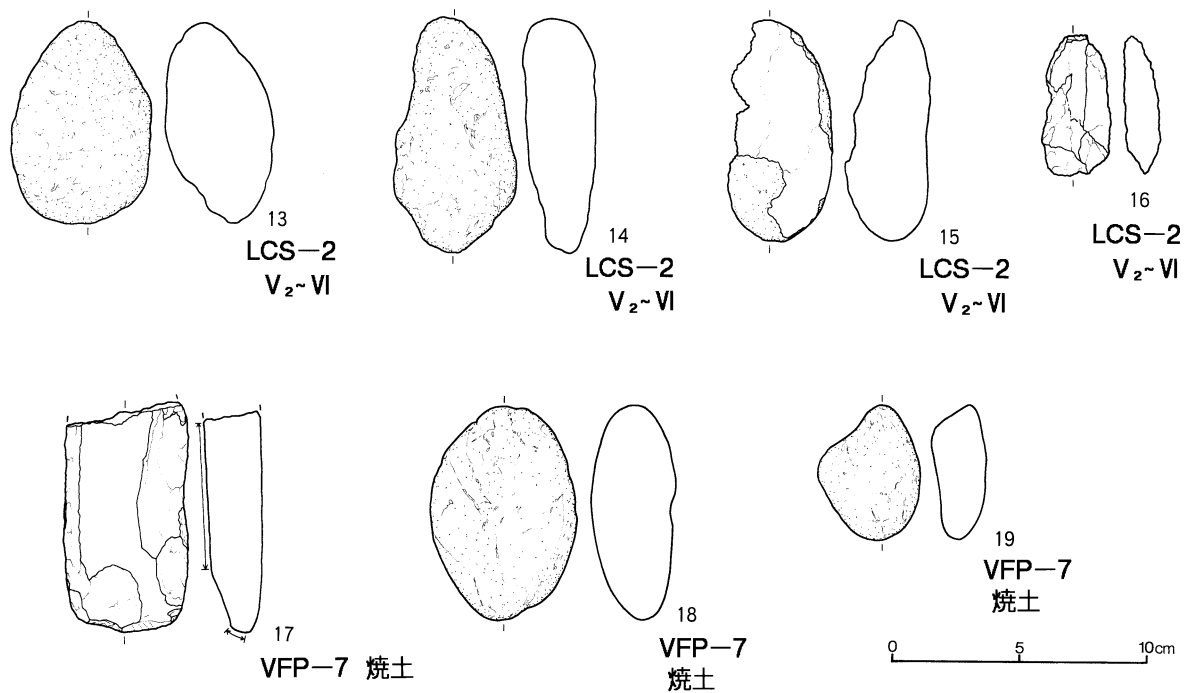


図20 LCS-2・VFP-7出土の石器

礫石器群 (図19 表13 図版6)

10~12は、台石と考えられるものである。脆弱な遺物であるために、パラロイドB72による強化処理を行った。ゆるやかな曲線状にくぼむ部分が表裏両面、あるいは片面に認められ、使用によるものと考えられる。現時点では割れ口が合わないが、出土状況から同一個体である可能性は極めて高い。石材は凝灰岩である。

自然礫 (図19 表14 図版5)

4~9は自然礫で、4~8は完形、9は半形である。いずれも未風化の堆積岩で、大礫、棒状、円または亜円礫であるという特徴が共通する。

「LCS-2・V2~VI層出土」

自然礫 (図20 表14 図版6)

13~16は自然礫である。いずれも堆積岩であるが、16は脆弱な凝灰岩である。粒度区分や形状、円磨度等の特徴には共通性がみられない。

「VFP-7・焼土 (覆土第2層) 出土」

礫石器群 (図20 表13 図版6)

17は砥石と考えられるもので、周縁には打ち欠かれたと推測される痕跡がみられる。

自然礫 (図20 表14 図版6)

18・19は自然礫である。未風化の泥岩で、前者は大礫、後者は中礫に区分される。形状はともに円盤状である。
(末光正卓)

表5 遺構一覧表

種別	土坑		焼土		土器破片集中		礫集中(集石)	
	P I	(基)	F P	(ヶ所)	C P	(ヶ所)	C S	(ヶ所)
	Ⅲ層(U)	V層(L)	Ⅲ層	V・VI層	Ⅲ層(U)	V層(L)	Ⅲ層(U)	V層(L)
数	0	2	0	10	0	1	0	1
合計	2		10		1		1	

表6 遺構属性一覧表

遺構名	図	図版	グリッド	平面形態	規模 (m)	主な出土遺物	備考
L P I - 9	13	2	G-56区	楕円形	1.48×1.12/0.88×0.74/0.96	石鎌・台石・自然礫	覆土からまとめて出土
L P I - 10	"	*	N-55区	楕円形	1.04×(0.59)/0.92×(0.56)/0.09	*	東側約1/5削平される
L C P - 4	14	4	M-55区	*	(範囲) 0.22×0.16 V2~VI層	IV群a類タプコブ式土器	
L C S - 2	"	3	G-55区	*	(範囲) 0.30×0.16 V2~VI層	自然礫	
V F P - 7	17	2	P-56・57区	長楕円形	3.54×0.91/3.07×0.62/0.68	砥石・自然礫	炭化材

表7 焼土属性一覧表

遺構名	図	図版	グリッド	確認層位 (被熱層)	平面形態	規模 (m)			色調	層界	堅密度	粘着性	出土遺物	備考
						長径	短径	最大厚						
V F P - 1	15	*	N-55区	V層	楕円形	0.23	0.15	0.08	明褐色 (7.5YR5/6~5/8)	判然~明瞭	堅~すこぶる堅	中	*	
V F P - 2	"	3	P-55区	V~VI層	楕円形	0.39	0.30	0.15	明褐色 (7.5YR5/8)	明瞭	堅	中	*	
V F P - 3	"	*	P-55区	V~VI層	楕円形	0.47	0.28	0.08	明褐色 (7.5YR5/6~5/8)	明瞭	堅	中	*	
V F P - 4	"	*	Q-56区	V層	楕円形	0.32	0.20	0.07	明褐色 (7.5YR5/6~5/8)	判然~明瞭	堅	中	*	
V F P - 5	"	3	R-55区	V層	楕円形	(0.44) 0.18	(0.32) 0.14	(0.10) 0.10	明赤褐色 (5YR5/8)	明瞭	堅	中	IV群a類土器破片 フレイク・チップ	土器囲い炉?
V F P - 6	"	*	Q・R-55区	V~VI層	楕円形	0.29	0.25	0.11	明褐色 (7.5YR5/6)	判然~明瞭	堅~すこぶる堅	中	*	
V F P - 8	16	3	M-55区	V~VI層	楕円形	0.45	0.39	0.10	明赤褐色 (5YR5/8)	判然~明瞭	堅~すこぶる堅	中	*	
V F P - 9	"	3	L-56区	V~VI層	楕円形	0.38	0.31	0.08	明赤褐色 (5YR5/8)	判然	堅~すこぶる堅	中	*	
V F P - 10	"	*	S-55・56区	VII層	楕円形	0.43	0.37	0.07	明赤褐色 (7.5YR5/8)	明瞭	堅~すこぶる堅	中	*	

表8 遺構出土土器点数表

遺構名			LCP-4		VFP-5			合計	
遺物種別 / 層位			V2~VI層	小計	焼土	V	小計		
時期	部位	残存状態							
IV群	口縁部 (ri)	良好		0		2	2	2	小計
		剥離							
		磨耗							
		小破片							
	底部 (ba)	良好	3	3			0	3	小計
		剥離							
		磨耗							
		小破片							
	胴部 (bo)	良好	19	19		1	1	20	小計
		剥離							
		磨耗							
		小破片							
不明その他	良好	3	39			0	3	小計	
	剥離								
	磨耗								
	小破片	36							36
小計			61			3	64		
合計			61			3	64		

表9 遺構出土復原土器観察表

図番号	図版	出土遺構 (層位)	遺物番号	部位	破片点数	法量 (cm)			胎土		備考 (分類)
						器高	口径	底径			
18 1	5	LCP-4 (V2~VI層)	8	胴部中位~底部	5	(17.8)	*	8.5	鈎物主体 粒径は細	黒雲母?他 繊維無し	IV群a類タブコブ式 深鉢
接合破片総点数		接合・同一個体破片			LCP-4・V2~VI・1(1)・2(2)・3(2)・4(1)・5(2)・7(1)・9(1)・10(1)・11(1)・12(1)・13(2)						
37		出土地点・層位・遺物番号 (点数)			LCP-4・V2~VI(6)・未注記(2)						
外	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	部位	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内	
	R L斜行・ 縦走縄文	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	黒色化・ 炭化物付着	上位部分との 粘土のつなぎ 目「凹状」に くぼむ	胴部中位	R L横走・縦走縄文 タテ・ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/4) 明黄褐色 (10YR6/6)	無	無		
	R L斜行縄文	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	無	無	胴部下位	R L縦走縄文	(灰黄褐色) (10YR4/2)	黒色化	指頭圧痕		
	R L斜行縄文 ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	若干黒色化	無	底部	*	*	*	*		
面	R L縄文	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	若干黒色化	無	底面	*	*	*	*	面	

表10 遺構出土破片土器観察表

図	掲載番号	図版	出土遺構 (層位)	遺物番号	破片数		破片部位	分類	胎土	文様・調整		色調		使用の痕跡		備考
					小計	合計				外面	内面	外面	内面	外面	内面	
18	2	5	E-18区 (V層)	1	1	1	胴部	IV群a類	岩石主体 円~亜円礫 状の堆積岩 粒径は粗 繊維無し	R L斜行 ~ 縦走縄文 (指頭圧痕)	R L縦走縄文	にぶい 黄褐色	浅黄色	赤色化? にぶい褐色 (7.5YR5/3)	*	外面の器面に段 内面やや磨耗

表11 遺構出土石器類点数表

遺構名			LPI-9			LCS-2		VFP-5			VFP-7			合計		
遺物種別 / 層位			坑底	覆土	小計	V2~VI層	小計	焼土	V	小計	焼土	V	小計	合計	小計	
群	器種	残存状態														
剥片石器群	石 鍬	完形		1										1	小計 1	
		準完形					0						0			
		半形			1											
		片														
	石 槍 ナイフ	完形														小計 0
		準完形			0		0							0		
		半形														
		片														
	石 錐	完形														小計 0
		準完形			0		0							0		
		半形														
		片														
	つまみ付き ナイフ	完形														小計 0
		準完形			0		0							0		
半形																
片																
スクレイパー	完形														小計 0	
	準完形			0		0							0			
	半形															
	片															
石製品	完形														小計 0	
	準完形			0		0							0			
	半形															
	片															
U・Rフレイク					0		0			0			0	0		
石核					0		0			0			0	0		
フレイク・チップ					0		0		1	1			0	1		
原石					0		0			0			0	0		
剥片石器群合計			0	1	1		0		0	1	1	0	0	0	2	
礫石器群	すり石	完形													小計 0	
		準完形			0		0							0		
		半形														
		片														
	たたき石	完形													小計 0	
		準完形			0		0							0		
		半形														
		片														
	石製品	完形													小計 0	
		準完形			0		0							0		
		半形														
		片														
	石 錘	完形													小計 0	
		準完形			0		0							0		
半形																
片																
砥石	完形													小計 1		
	準完形			0		0							1			
	半形															
	片															
台石・石皿	完形													小計 2		
	準完形			2		0							0			
	半形															
	片												2			
礫石器群(石器)合計			0	2	2		0		0	0	0	1	0	1	3	
自然礫	完形		7	12		5				0		2		2	14	
	片		5											2	5	
合計				15		5		1			3			24		

表12 遺構出土剥片石器群観察表

図	掲載番号	図版	出土遺構	層位	遺物番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	残存形態	使用痕	備考
							最大長	最大幅	最大厚					
19	3	5	LPI-9	覆土1層	1	石鏃	2.6	1.9	0.3	0.6	黒曜石 (小球果含む)	完形	破損 微細剥落痕	

表13 遺構出土礫石器群観察表

図	掲載番号	図版	出土遺構	層位	遺物番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	残存形態	接合総点数	使用痕	備考
							最大長	最大幅	最大厚						
19	10	6	LPI-9	覆土1	13	台石	(8.4)	(8.6)	4.8	305.2	凝灰岩 (灰~褐灰色)	片	1	凹状の窪み(すり痕) 破損	同一個体
"	11	"	LPI-9	覆土1	12	台石	(14.3)	(10.6)	(5.7)	640.0	凝灰岩 (灰~褐灰色)	片	1	凹状の窪み(すり痕) 破損	
"	12	"	LPI-9	覆土1	14	台石	(13.3)	(11.0)	(5.0)	651.0	凝灰岩 (灰~褐灰色)	片	1	凹状の窪み(すり痕) 破損	
20	17	"	VFP-7	焼土	3	砥石	(9.1)	4.9	2.3	186.9	片岩 (灰色)	半形?	1	すり痕 (破損)	(加工痕)打ち欠き?

表14 遺構出土自然礫観察表

図	掲載番号	図版	出土遺構	層位	遺物番号	法量 (cm)			重量 (g)	石材	残存形態	風化の程度	粒度区分	b/a	c/b	形状	円磨度	備考 (使用の痕跡)
						長軸; a 最大長	中軸; b 最大幅	短軸; c 最大厚										
19	4	5	LPI-9	覆土1層	7	11.5	5.5	3.8	407.2	泥岩 (緑灰色)	完形	未風化	大礫	0.48	0.69	棒状	円礫	
"	5	"	LPI-9	覆土1層	4	10.9	6.1	4.2	370.6	泥岩 (オリブ灰色)	完形	未風化	大礫	0.56	0.69	棒状	亜円礫	
"	6	"	LPI-9	覆土1層	5	9.7	4.9	4.2	289.7	泥岩 (暗青灰色)	完形	未風化	大礫	0.51	0.86	棒状	円礫	
"	7	"	LPI-9	覆土1層	6	10.4	4.1	3.9	249.4	泥岩 (オリブ灰色)	完形	未風化	大礫	0.39	0.95	棒状	円礫	
"	8	"	LPI-9	覆土1層	10	8.8	4.9	3.7	222.8	チャート (暗灰色)	完形	未風化	大礫	0.56	0.76	棒状	亜円礫	
"	9	"	LPI-9	覆土1層	2	(6.7)	(3.5)	3.7	289.7	砂岩 (灰色)	片	未風化	大礫	(0.52)	(1.06)	棒状	円礫	一部破損
20	13	6	LCS-2	V2~VI層	5	8.0	5.6	4.3	263.5	泥岩 (緑灰色)	完形	未風化	大礫	0.70	0.77	球状	亜円礫	一部黒色化 (被熱?)
"	14	"	LCS-2	V2~VI層	3	9.3	4.9	2.9	176.2	チャート (暗灰色)	完形	未風化	大礫	0.53	0.59	小判状	亜円礫	
"	15	"	LCS-2	V2~VI層	2	(8.7)	(4.2)	(3.3)	121.9	砂岩 (灰色)	片	未風化	大礫	(0.48)	(0.79)	棒状	亜円礫	一部破損
"	16	"	LCS-2	V2~VI層	1	(5.5)	(2.8)	(1.5)	27.4	凝灰岩 (暗灰色)	(完形)	風化	中礫	(0.51)	(0.54)	小判状	角礫	表面剥落? 脆弱
"	18	"	VFP-7	焼土	2	8.4	5.8	3.4	240.4	泥岩 (灰色)	完形	未風化	大礫	0.69	0.59	円盤状	円礫	
"	19	"	VFP-7	焼土	1	5.3	4.0	2.2	54.4	泥岩 (灰色)	完形	未風化	中礫	0.75	0.55	円盤状	亜円礫	

IV章 包含層出土の遺物

1 概要 (図21~25 表15・16)

包含層から出土した遺物は、土器1,849点、石器類415点、合計2,264点である。包含層出土の遺物について、出土点数表とグリッドごとの出土点数を示す図(出土分布図)を作成した。これは、一次整理のデータ(遺物登録台帳)を用いて作成したもので、原則として、分類変更や記入ミス等を考慮していない。しかし、全体的な出土の傾向を示すことを目的とした場合、大きな問題はないと考える。

なお、本文中で各遺物における特定の時期や器種等の出土割合や、層位ごとの出土割合、掲載率を示すのに百分率を用いたが、算出方法上小数第二位を四捨五入したので、合計が必ずしも100にならない場合もある。

出土点数表(表15・16)

土器(表15)

時期の内訳は、IV群1,447点(78.3%)、V群379点(20.5%)、VI群8点(0.4%)、未分類15点(0.8%)であるが、このうちVI群としたものは、IV群の一次整理作業時における表記の間違いであり、これを修正してIV群は1,455点(78.7%)となる。また、未分類としたものを再確認したところ、ほとんどがIV群であると考えられる。従って出土土器は約8割がIV群、約2割がV群であり、他時期の土器の出土は認められないと判断される。

出土層位ごとの内訳は、Ⅲ層出土が364点(19.7%)、V1層出土が53点(2.9%)、V2層出土が1,371点(74.1%)、VI層出土が28点(1.5%)、その他(I層・攪乱層等)が33点(1.9%)で、V層からの出土が約8割を占める。Ⅲ層出土のものは99%がV群で、同様に、V層(V1層を含む)出土のものは99%がIV群である。

各群における部位の内訳は、IV群は口縁部28点(1.9%)、底部が10点(0.7%)、胴部が329点(22.7%)、部位不明・その他が1,080点(74.6%)である。口縁部・底部破片は、残存状態が良好なものが多く、胴部破片は73点(22.2%)が剥離である。その他・不明は、剥離破片が260点(17.9%)、小破片が788点(54.5%)であり、残存状態が不良のものが約7割を占める。時期や部位を判断できないのは、遺物の残存状態に起因することを示している。V群は口縁部が17点(4.5%)、底部が6点(1.6%)、胴部が146点(38.5%)、不明・その他が210点(55.4%)である。口縁部、底部、胴部破片は良好のものが多く、不明・その他は小破片が多い。

包含層とその時期については、おおまかに次のようにまとめられる。Ⅲ層は縄文時代晩期の包含層である。しかし、V層からV群の胴部破片が3点出土しているという事実もある。V層は縄文時代後期を主体とする包含層であり、加えて、VI層もこの時期に該当するといえる。

また、全出土土器のうち「磨耗」のものは35点(1.9%)のみであり、本遺跡において、水の作用により遺物が二次的に移動した頻度は低いと推測される。

石器類(表16)

各石器群の内訳は、剥片石器群が213点(51.3%)、磨製石器群23点(5.5%)、礫石器群49点(11.8%)、自然礫130点(31.3%)である。剥片石器群が過半数を占め、ついで自然礫が多い。

出土層位ごとの内訳は、Ⅲ層出土が3点(0.7%)、V1層出土が31点(7.5%)、V2層出土が335点(80.7%)、VI層出土が37点(8.9%)、その他(I層・攪乱層等)が9点(2.2%)で、V層から

表15 包含層出土土器点数表

遺物種別 / 層位		Ⅲ 層		Ⅴ 1 層		Ⅴ 2 層		Ⅵ 層		その他		合 計	
時 期	部 位	残存状態											
IV群	口縁部 (ri)	良好			14		4		1		19		
		剥離			9						9		
		磨耗									0		
	底部 (ba)	良好				9		1			10		
		剥離									0		
		磨耗					9		1		0		
	胴部 (bo)	良好			1	242		7		2	252		
		剥離			6	61		5		1	73		
		磨耗				2		1			3		
	不明 その他	良好				2		2			4		
		剥離			11	241		7		1	260		
		磨耗			1	27	1,022		9		28		
小破片	2	2	34	46	752				1	788		1,080	
小 計		2		53		1,360		27		5		1,447	
V群	口縁部 (ri)	良好	15						2		17		
		剥離									0		
		磨耗									0		
	底部 (ba)	良好	6								6		
		剥離									0		
		磨耗									0		
	胴部 (bo)	良好	102			3				6	111		
		剥離								1	1		
		磨耗									0		
	不明 その他	良好	4							2	6		
		剥離	51							1	52		
		磨耗								2	2		
小破片	150	205		0		0		0	5	150		210	
小 計		362		0		3		0		14		379	
VI群	口縁部 (ri)	良好									0		
		剥離									0		
		磨耗									0		
	底部 (ba)	良好									0		
		剥離									0		
		磨耗									0		
	胴部 (bo)	良好								1	1		
		剥離									0		
		磨耗								1	1		
	不明 その他	良好									0		
		剥離									4		
		磨耗									0		
小破片	0	0		0		0		2	6	2		6	
小 計		0		0		0		0		8		8	
未分類	口縁部 (ri)	良好									0		
		剥離									0		
		磨耗									0		
	底部 (ba)	良好									0		
		剥離									0		
		磨耗									0		
	胴部 (bo)	良好				3		1			4		
		剥離									0		
		磨耗									0		
	不明 その他	良好				1					1		
		剥離									1		
		磨耗								1	1		
小破片				4		5		0	5	9		11	
小 計		0		0		8		1		6		15	
土 製 品		0		0		0		0		0		0	
合 計		364		53		1,371		28		33		1,849	

表16 包含層出土石器類点数表

遺物種別 / 層位			Ⅲ層		V1層		V・V2層		VI層		その他		合計	
群	器種	残存状態												
剥片石器群	石 鎌	完形	1		4		16		2				23	
		準完形		小計		小計	5		1			小計	6	小計
		半形			1		2		1		4		4	
		片		1		5					1	1	1	34
	石 槍 ナイフ	完形	1				1						2	
		準完形		小計		小計						小計	0	小計
		半形			1		1				0		2	
		片		1		1		2			0	0	0	4
	つまみ付き ナイフ	完形					4						4	
		準完形		小計		小計						小計	1	小計
		半形			1								2	
		片		0		1		2		7		0	1	8
	スクレイパー	完形					3						3	
		準完形		小計		小計	1					小計	1	小計
半形						1				0		1		
片			0		0		2		7		0	2	7	
U・Rフレイク			0		1		9		1		0		11	
石 核			0		0		3		0		0		3	
フレイク・チップ			1		8		109		21		5		144	
原 石			0		0		0		0		2		2	
剥片石器群合計			3		16		160		26		8		213	
磨製石器群	磨製石斧	完形				5		1				6		
		準完形		小計		小計	2		1			3		
		半形					2				2		2	
		片		0		0		19		2		0	10	21
	磨製石斧未製品			0		0		1		0		0		1
	擦切残片			0		0		0		0		0		0
	研磨石材			0		0		0		0		0		0
原 石			0		0		1		0		0		1	
磨製石器群合計			0		0		21		2		0		23	
礫石器群	すり石	完形				2						2		
		準完形		小計		小計						0	小計	
		半形						2		0		0		
		片		0		0					0	0	2	
	たたき石	完形					3						3	
		準完形		小計		小計						小計	0	小計
		半形						5		0		0		
		片		0		0		2			0	0	2	5
	石 錘	完形											0	
		準完形		小計		小計							0	小計
		半形					2		2		0		2	
		片		0		0					0	0	0	2
	砥 石	完形											0	
		準完形		小計		小計							0	小計
半形							18		2		2		0	
片			0		1		1		18		0	21	21	
台石・石皿	完形											0		
	準完形		小計		小計							0	小計	
	半形											0		
	片		0		1		1		17		1	1	19	
礫石器群(石器)合計			0		2		44		3		0		49	
自然礫	完形					5		1				6		
	片				13		105		5		1		124	
自然礫合計			0		13		110		6		1		130	
合 計			3		31		335		37		9		415	

の出土が約9割を占める。Ⅲ層出土の石器類はすべて剥片石器群で、V1層を含むV層出土のものには、各石器群が認められる。剥片石器群が176点(48.1%)で半数近くを占め、石鎌が多く、つまみ付きナイフ、スクレイパーがこれに次ぐ。磨製石器群は21点で5.7%を占める。礫石器群は46点で12.6%を占め、砥石、台石・石皿が多く、すり石、たたき石、石錘がある。また、VI層からも各石器群の出土が認められる。自然礫も約9割がV層からの出土である。

これらの石器類の時期について、土器の出土傾向もふまえて考えると、おおまかに次のようにまとめられる。Ⅲ層出土の石器はすべて縄文時代晩期で、V層出土のものは縄文時代後期と考えられる。また、VI層出土のものも、後期に属すると判断するのが妥当であろう。その他(I層・攪乱層等)から出土した遺物は、本来的に位置する層を特定できず、明確な時期を判断することはできない。

出土分布図(図21~25)

土器(図21・22)

Ⅲ層、V層出土と、各群土器の出土の分布図を作成した。

「Ⅲ層出土土器」では、I-57区、J-57・58区に集中し、その周辺にも若干分布が認められる。「Ⅲ層出土V群土器」も同様なあり方である。また、やや離れたM-56区に2点分布がみられるが、「Ⅲ層出土IV群土器」からIV群であると判断される。

「V層出土土器」では、調査区のほぼ全体から出土がみられるが、M-57区等極端に集中するグリッドがいくつか認められる。O-62区にも分布が多いが、ここはオリイカ川旧河道付近である。「V層出土IV群土器」もほぼ同様の分布を示す。「V層V群土器」はJ-58区に出土が認められ、Ⅲ層出土のV群土器と分布が一致する。

石器類(図22~25)

「Ⅲ層出土石器類」はI-58杭周辺に分布が少量認められ、V群土器と分布が一致する。「V層出土石器類」は、調査区のほぼ全体に分布が認められ、L-60区がやや顕著である。「石鎌」もほぼ調査区全体に認められ、「石槍・ナイフ」はまばらな分布である。「つまみ付きナイフ」、「スクレイパー」は、北西側の低地部に分布が認められない。「フレイク・チップ」もほぼ調査区全体に分布が認められる。「磨製石斧」は、両側の低地部分に比較的多いとみることができる。「すり石」は、N-59杭付近にまとまっている。「たたき石」は、北西側低地部には分布が認められない。「石錘」は、段丘部に少量分布する。「砥石」は斜面部と段丘部に分布するが、L-60区に多くみられるのは、大型の砥石(図33-44)一個体分の破片である。「台石・石皿」は北東側の低地部に多く分布し、「自然礫」は調査区ほぼ全体に分布する。

「V層出土土器」や「フレイク・チップ」、「自然礫」は、ほぼ調査区全体に分布することが共通するが、遺構集中区域と一致する状況はみられない。さらに、特定の時期の土器や石器の器種についても同様である。また、分布が全く認められないグリッドが、南側段丘部から両低地部その斜面部等に認められる。これは、大規模な攪乱が位置するのが原因であり、加えて段丘部に限れば、包含層が削平されていることにも起因する。すなわち、包含層出土遺物の分布は、遺構の分布と明確な相関関係は認められず、概ね調査区全体に分布する。加えて、土層の残存状況にも大きく影響を受けているといえよう。

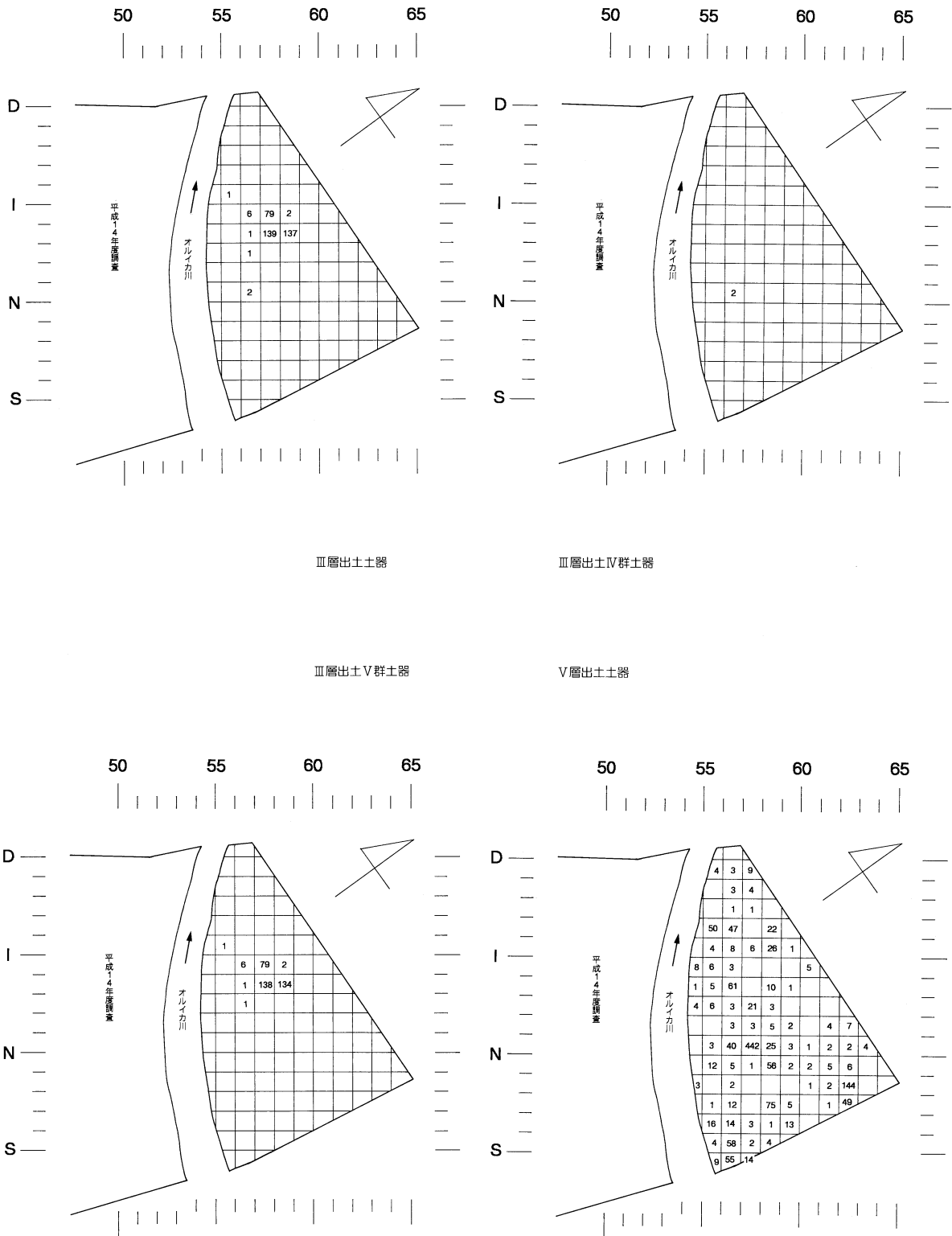
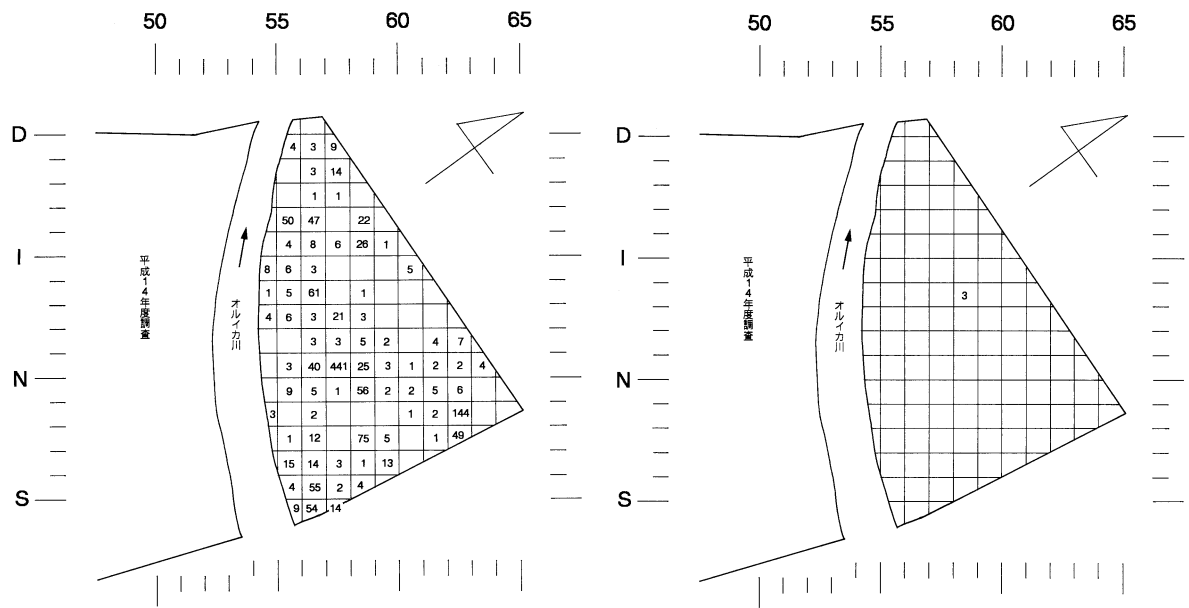


図21 包含層出土遺物分布図(1)



V層出土IV群土器

V層出土V群土器

III層出土石器類

V層出土石器類

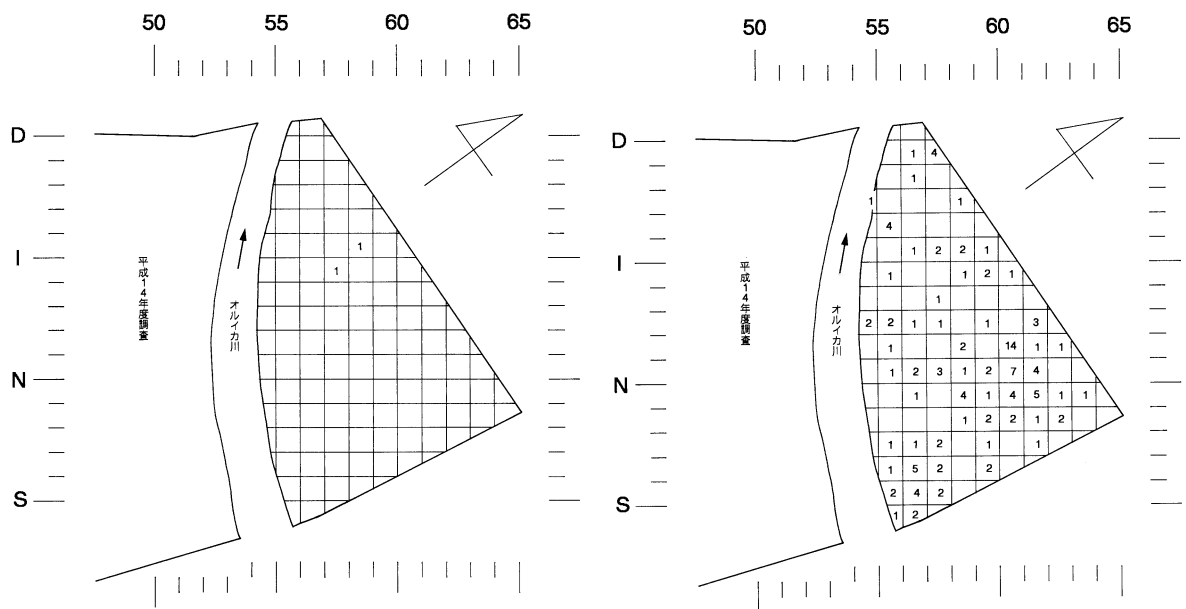


図22 包含層出土遺物分布図(2)

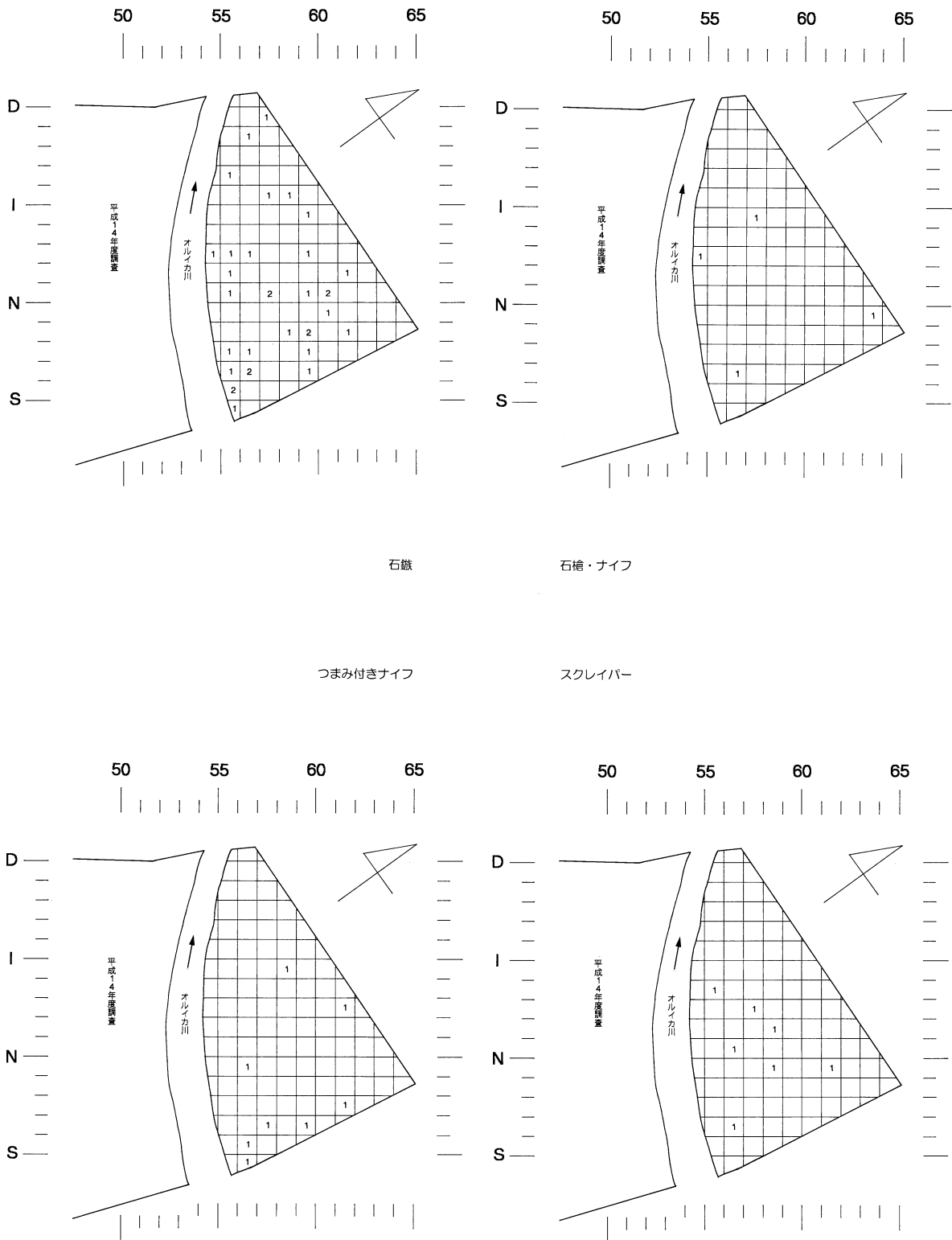
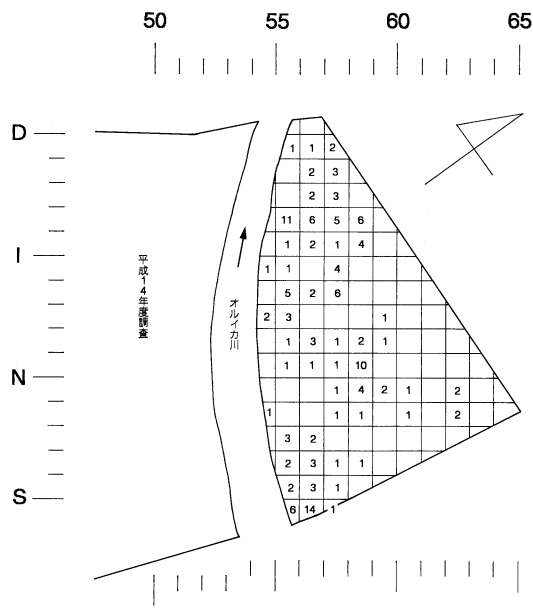
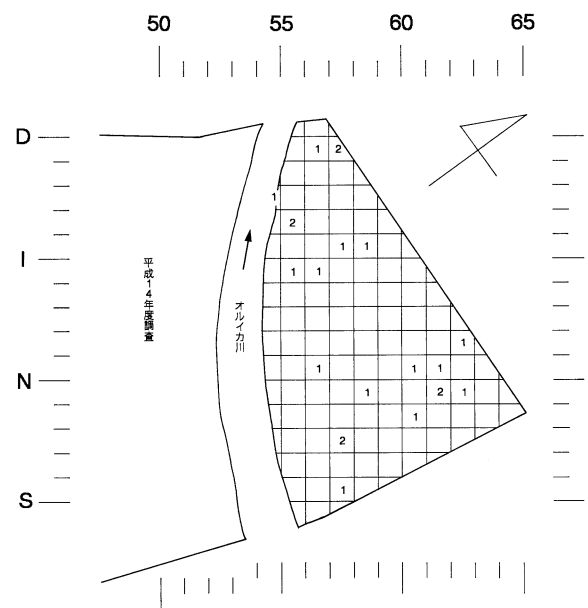


図23 包含層出土遺物分布図(3)



フレイク・チップ

すり石



磨製石斧

たたき石

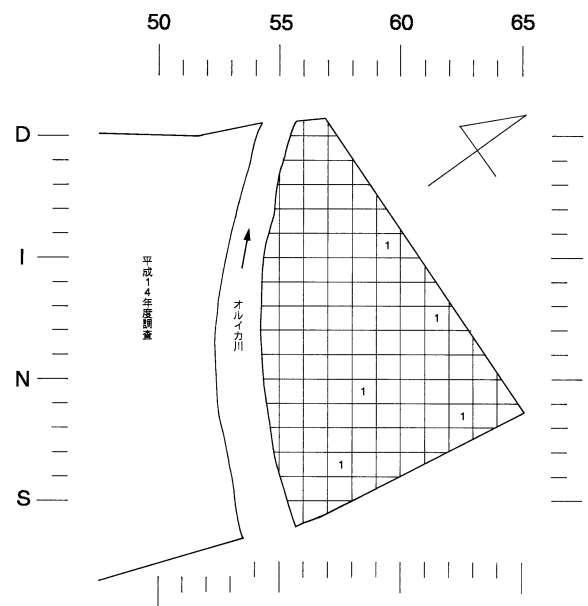
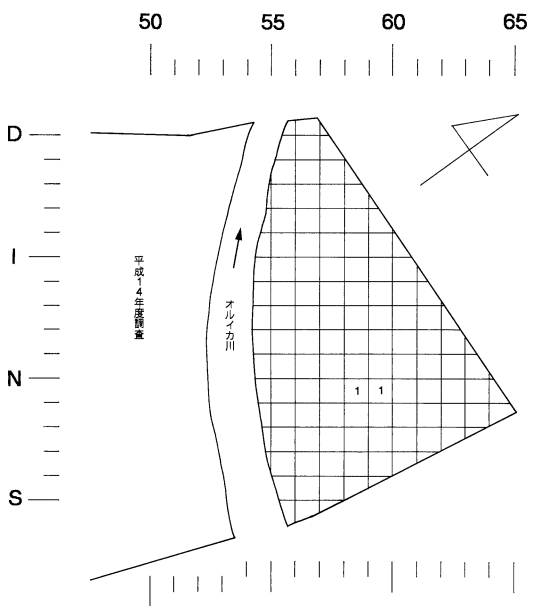


図24 包含層出土遺物分布図(4)

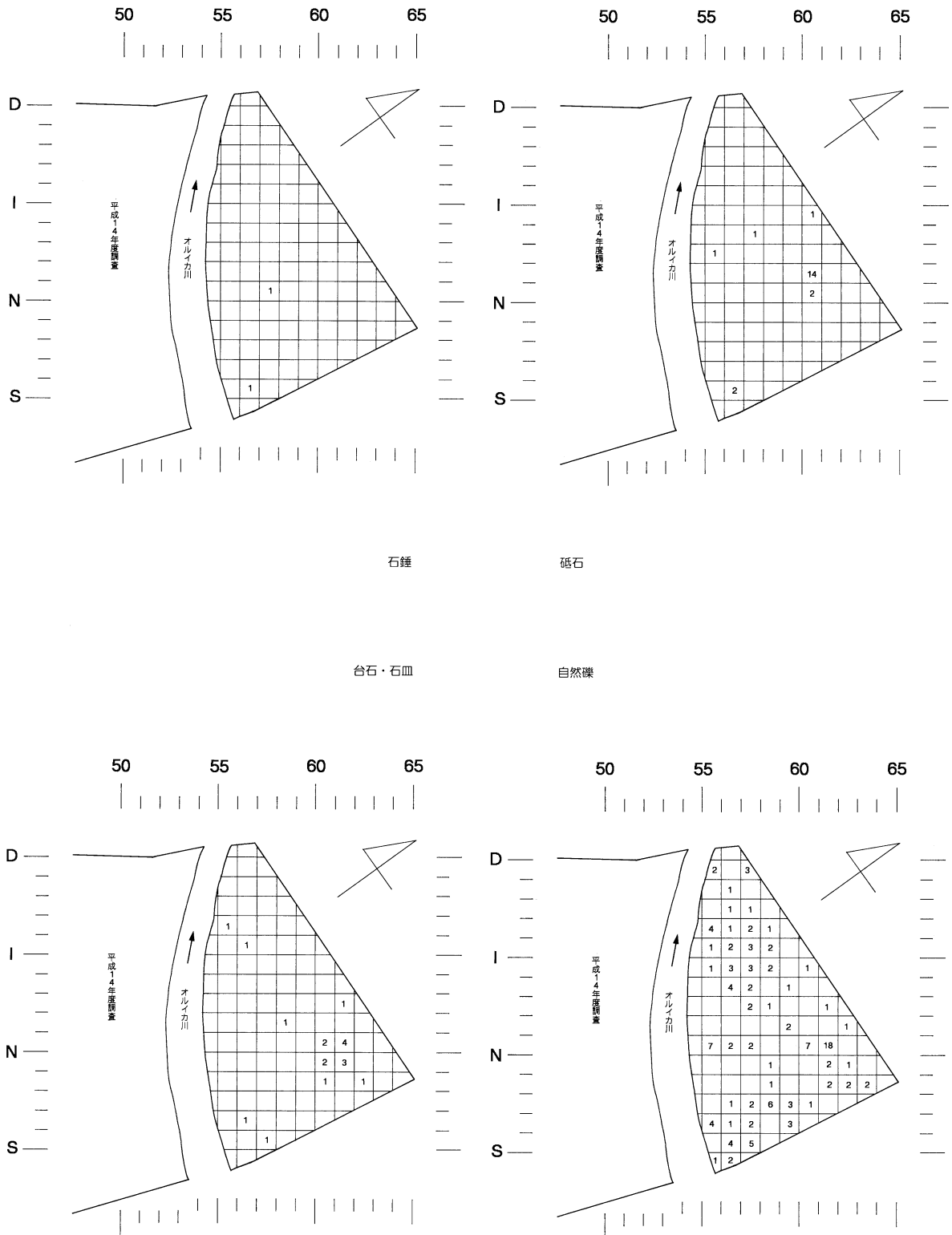


図25 包含層出土遺物分布図(5)

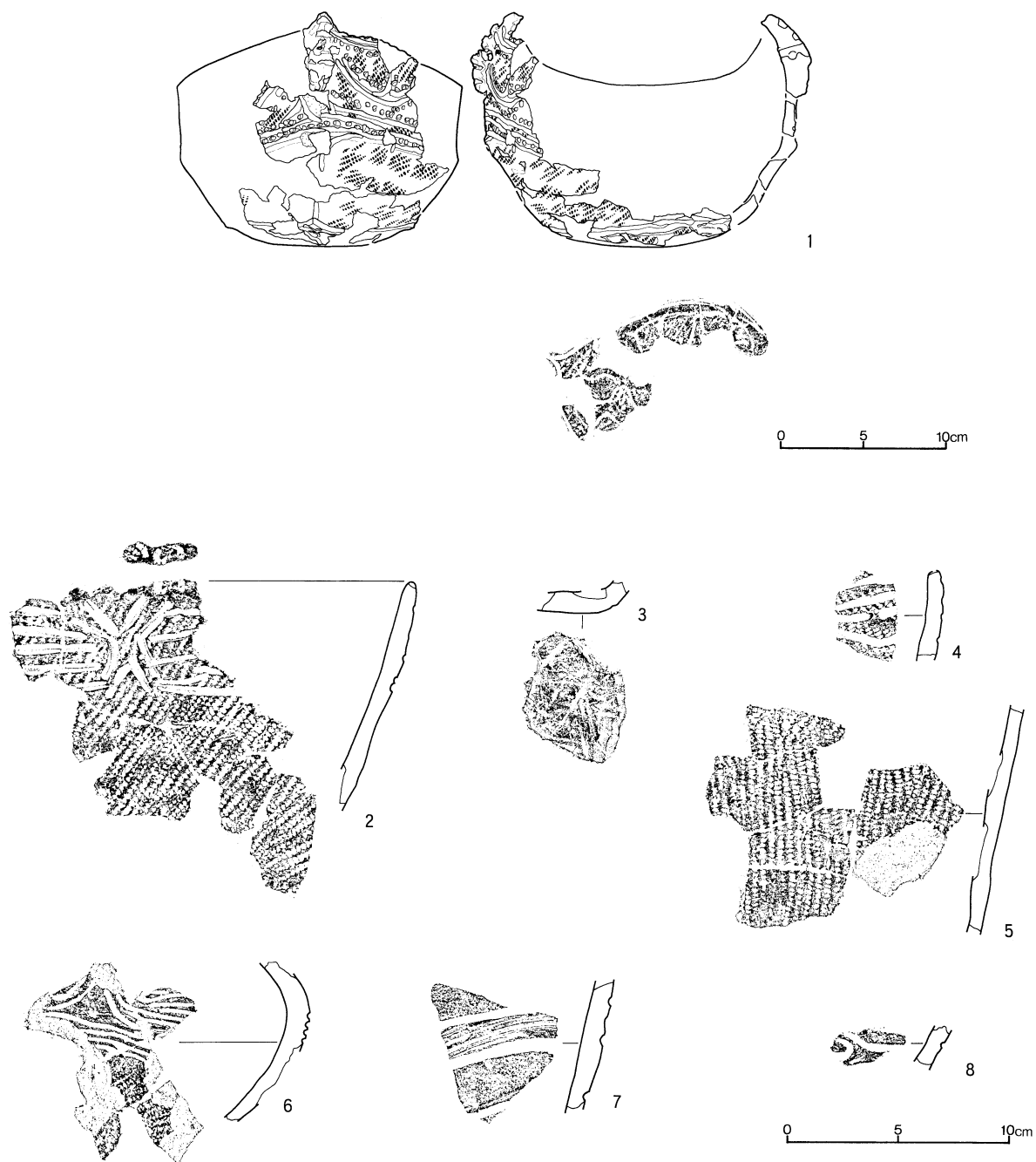


図26 包含層出土の土器(1)

2 土器

包含層出土の土器の総点数は1,849点である。復原個体となった破片が39点であり、破片の状態で掲載したもので、接合破片の総数が33点、単体のものが22点であり、掲載率は5.1%となる。

(1) 復原土器 (図26 表17 図版7)

1は上面観が楕円形を呈する浅鉢である。長軸方向の突起を有する口縁部から底部までの一部分(約1/6)が接合したもので、復原実測図を作成した。器形は、長軸方向で観察すると、強く内湾する口縁部から曲線的に胴部、底部につながる器形を呈し、丸底である。口縁部には粘土の貼り付けにより施された突起部があり、そこに刻みと孔が、口唇部には円形の刺突文がそれぞれ施される。口

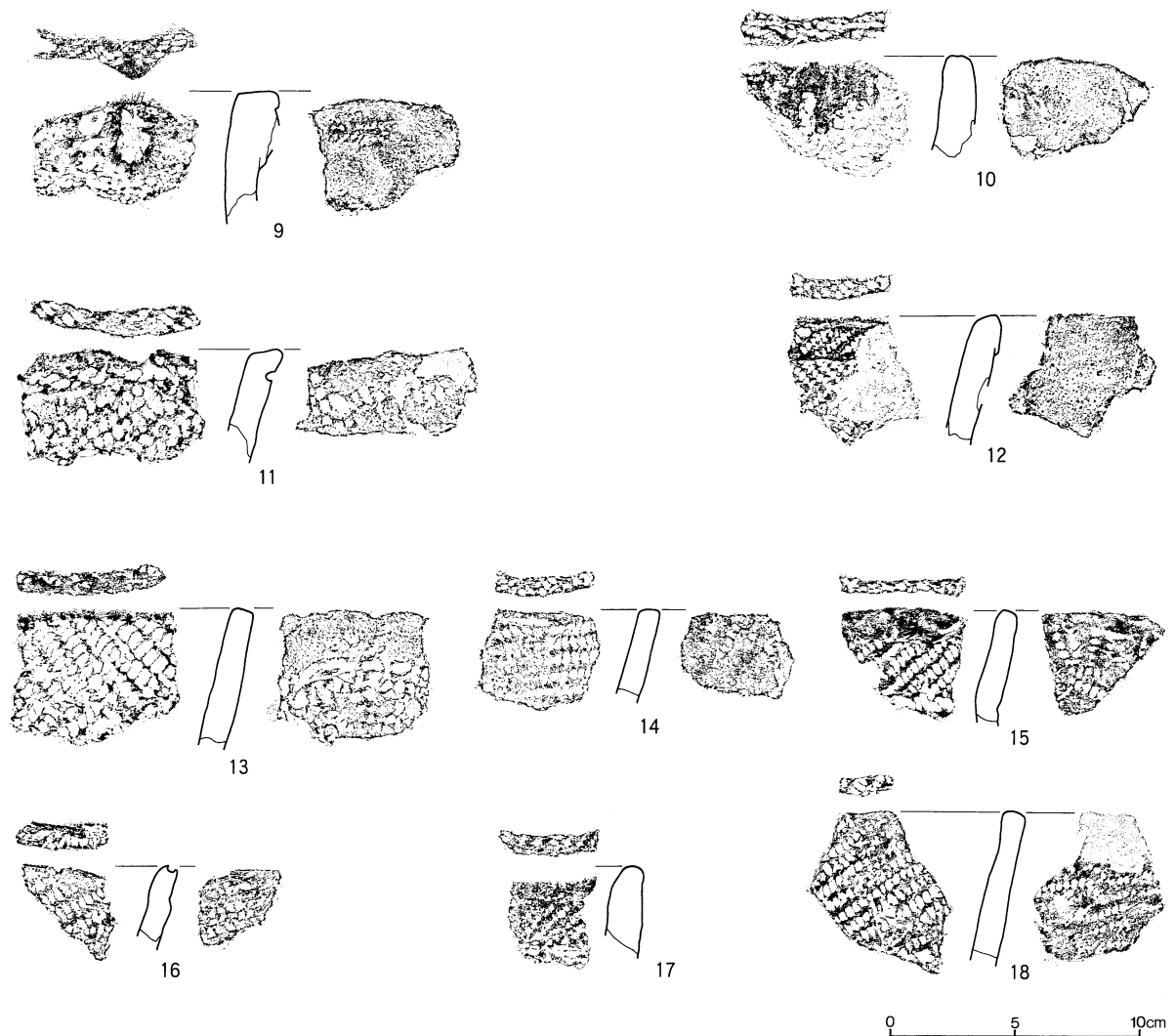


図27 包含層出土の土器(2)

縁部の器面には地文施文後、曲線と直線の沈線文がみられ、これに沿うように刺突文が連続して施される。胴部はLR斜行縄文、底部は縄文と曲線的な沈線文が施される。内面調整は全体的にヨコナデであるが、口唇部直下の器面のみ施されない。胎土の砂礫は中～細粒で、角閃石あるいは輝石等の有色鉱物が目立つ。V群c類と判断される。

(2) 破片土器

V群c類(図26 表18 図版7)

2は接合資料で、深鉢の口縁部と考えられる。尖り気味の口唇部には撚紐の刻みが施され、外面はLR斜行縄文地に沈線文が施される。内面は大きく剥離する。胎土の砂礫は細粒で、部分的に筋状に炭化した繊維が観察される。3は底部で無文のものである。胎土の砂礫は細粒で有色鉱物が多く、筋状の繊維も観察される。4は口縁部近くと考えられ、外面にはRL斜行縄文と沈線文が施される。胎土には有色鉱物が少なく、繊維の混入が認められる。5は胴部で、LR原体による縦走する縄文が観察される。内外面には剥離が目立つ。2と同一個体である可能性がある。6は湾曲が強いもので、壺形土器と考えられる。破片の上位半分は無文地に沈線文、下位部分にはLR斜行縄文が施される。胎土は部分的に繊維を含み、中粒の砂礫である。7は無文地に沈線文が施される。胎土の砂礫は細粒で、

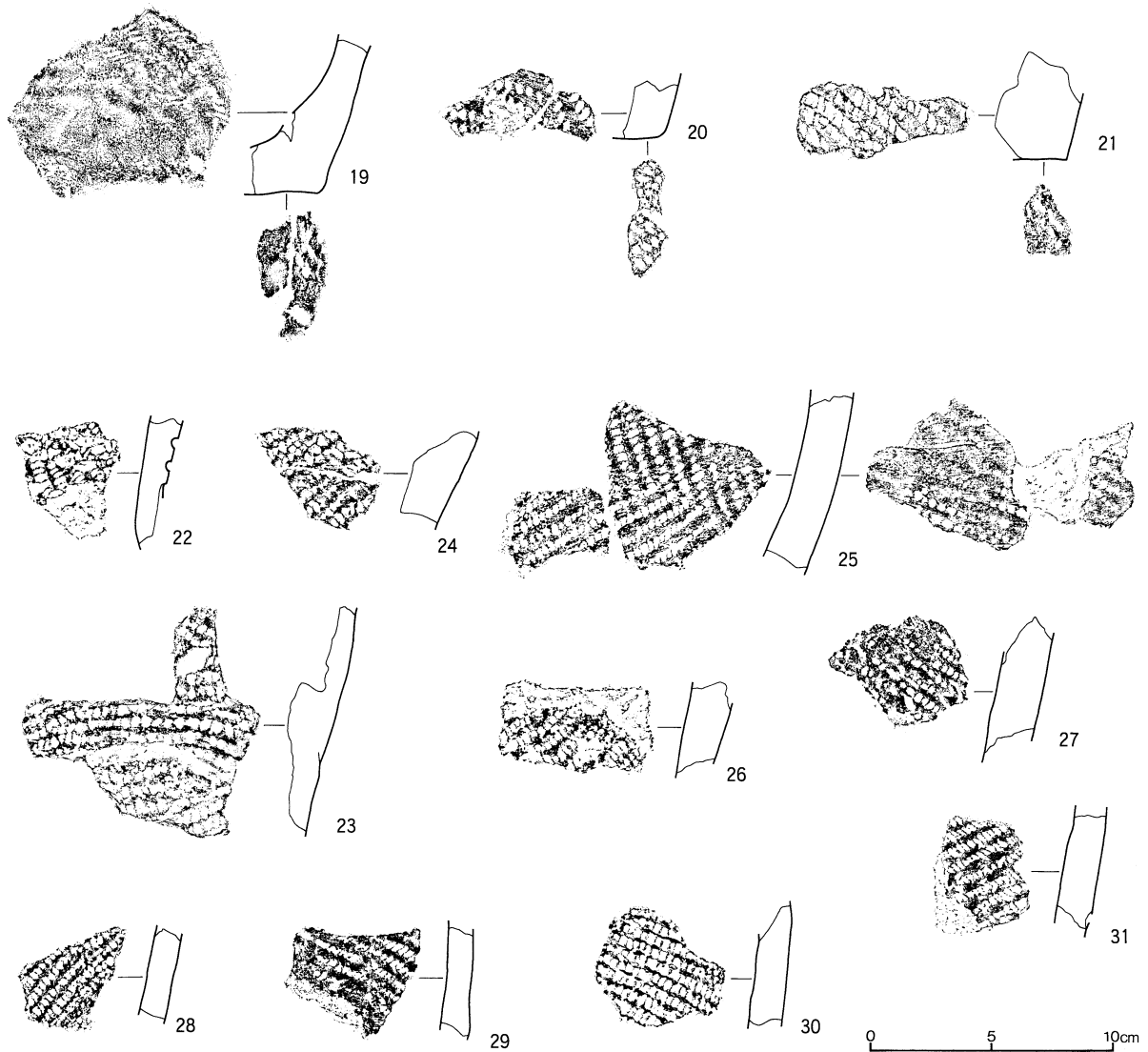


図28 包含層出土の土器(3)

均質である。

IV群b類 (図26 表18 図版7)

8は無文地に曲線的な沈線文が観察される。胎土の砂礫は、円～垂円礫状の堆積岩が多くみられる。手稲式と考えられるが、IV群a類である可能性も否定できない。

IV群a類・口縁部 (図27 表18 図版8)

9は、平成14年度に北海道教育委員会により行われた範囲確認調査で出土したものである。突起部直下の外面には貼付が施され、そのさらに下位部分には、不整な条が観察される。内面は横走る条が観察されるが、施文後に行われた器面調整により条・節が変形し、原体が判別できない。10は、R-55区、VFP-5近くの包含層から出土した。口唇部直下の器面には、RL原体による刺突文(圧痕文)が縦位に施される。口唇部、内外面には不整な条が観察される。胎土の砂礫は粗粒で、角が残る堆積岩が目立つ。11は口唇部直下の器面に縄線文が横位に施される。下位部分の割れ口の断面は丸みを帯び、製作時の輪積みの痕跡と考えられる。12は外面が広く剥離しているもので、別原体による羽状縄文が施される。口唇部～内面は磨耗している。13は外面に羽状縄文が施され、口唇部はRL、

内面には不整な条が観察される。14はLR原体を用いた施文で、外面は横走気味、内面は縦走気味の条が観察される。胎土の砂礫は細粒の岩石である。15は口唇部直下の器面に無文部分を有し、内面には無作為な条が観察される。破片下位部分左側に補修孔が観察される。16の口唇部の施文は縄線文であると推測される。胎土の砂礫は火山岩が目立つ。17は縄文が内面には施文されず、ヨコナデによる調整である。胎土の砂礫は細粒で、粒径が均質である。18は外面に地文が施され、下位近くでは縄線文が観察される。以上、9～18はタブコプ式に相当するものである。

IV群a類・底部(図28 表18 図版8)

19は全体的に磨耗が著しいもので、外面には縦長で細い節を有する曲線的な条が観察される。胎土の砂礫は、中粒の火山岩と細粒の鉱物である。20は内面が剥離しているもので、外面と底面にRL縄文が施される。胎土の砂礫は、角がある中粒の火山岩が目立つ。21は器壁が厚いもので、底面約1/4と内面が剥離する。以上、19～21はタブコプ式に相当する。

IV群a類・胴部(図28 表18 図版9)

22は地文施文後、横位方向に縄線文が施される。23は内面が剥離しているもので、貼付が施される。横走る条がみられ、器面と貼付部分とは別施文である。24は底部近くの破片で、LR斜行縄文が施される。25は別原体による羽状縄文がみられる。内面は施文後にナデ調整が施されたため、節が変形している。26は外面が約2/5剥離するもので、胎土には砂礫が多い。27は外面にRL斜行縄文が施される。28も外面に地文が施され、内面はナデ調整である。29の地文は縦位回転施文と判断され、胎土の砂礫は中粒で白色の岩石が目立つ。30はRL斜行縄文が施され、胎土の砂礫はやや粗粒である。31の地文は縦位施文であると判断される。

以上、22～31はタブコプ式と判断される。また29・31は、縦位回転による施文と判断したが、土器破片について上下を判断する場合、文様等に特徴がなく、かつ湾曲が少ない資料については判断が困難な場合がある。31がこれに相当する。わずかな湾曲を手がかりに上下を判断したが、指頭圧痕など内側の器面にみられる不規則な凹凸により判断を誤った可能性もある。

3 石器類

(1) 剥片石器群(図29・30 表19 図版10)

剥片石器群の各器種の出土割合は、石鏃16% (34点)、石槍・ナイフ1.9% (4点)、つまみ付きナイフ3.8% (8点)、スクレイパー3.3% (7点)、U・Rフレイク5.2% (11点)、石核1.4% (3点)、原石0.9% (2点)で、石鏃が圧倒的に多い。また本石器群の67.6%をフレイク・チップが占める。本群全体での掲載率は11.3%である。

「石鏃」

Ⅲ層から1点、Ⅴ・Ⅵ層から32点、その他から1点出土した。残存状態の割合は、完形67.6%、準完形17.6%、半形11.8%、片2.9%で、掲載率は35.3%である。

1はⅢ層出土で、長身で二等辺三角形、基部が内湾するものである。2は有茎のもので、3は菱形を呈するものである。4は背腹両面に剥離面を残し、背面先端部付近の左側縁は二次調整が施されない。5は腹面に主要剥離面を広く残す。6は小型のもので、茎部の先端を破損する。7は細身・長身のもので、左右非対称である。8も細身・長身で、背腹両面に大きく剥離面を残す。9は先端部を破損する。10は先端部が鋭利に尖らないが、使用による破損であろうか。石材は黒曜石で、筋状をなす多量の小球果が含まれる。11は背腹両面に剥離面を残す。12は有茎のもので、先端部側の両側縁はやや曲線的である。1～12の石材はすべて黒曜石である。

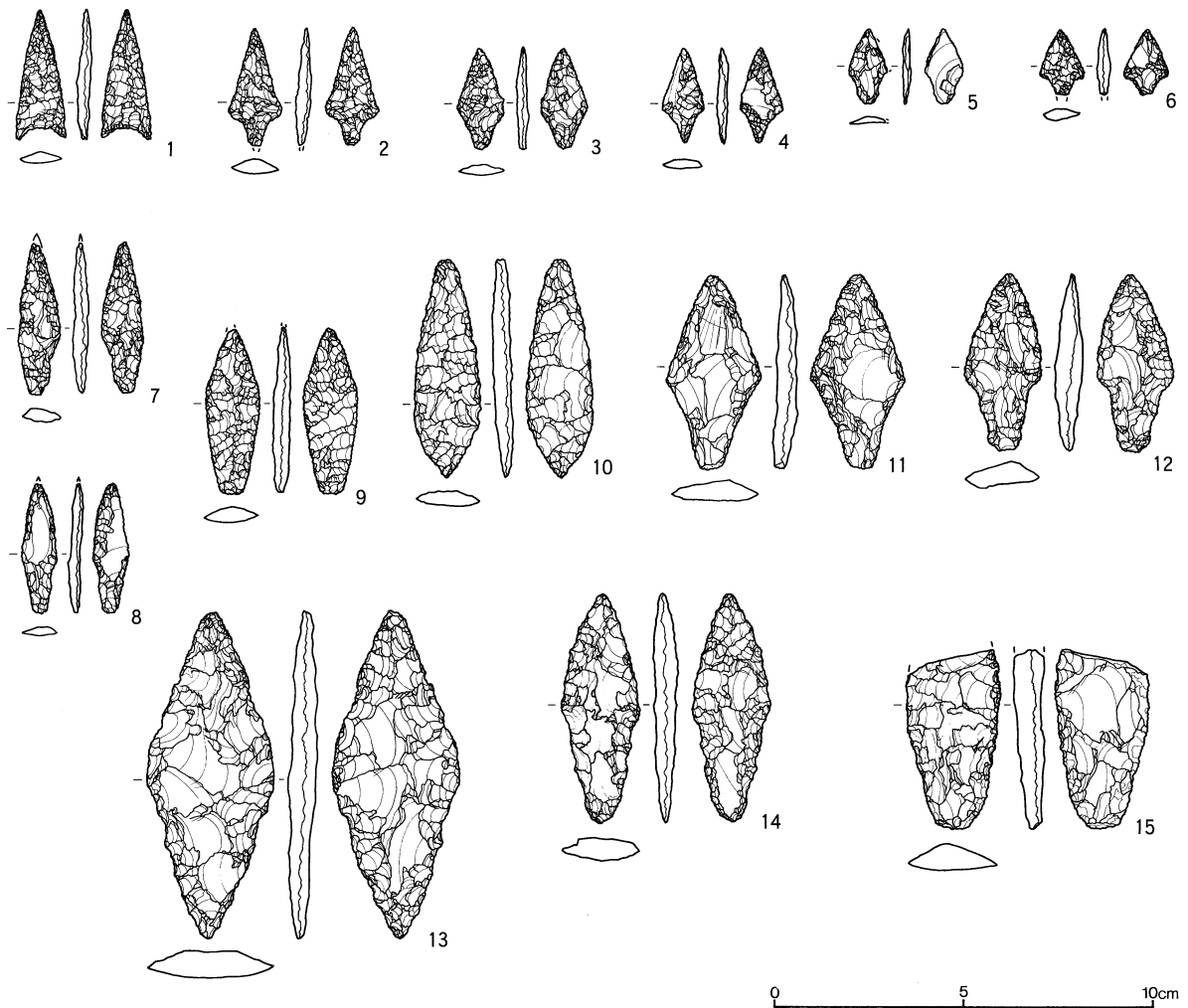


図29 包含層出土の剥片石器(1)

「石槍・ナイフ」

Ⅲ層から1点、Ⅴ層から3点出土した。残存状態の割合は、完形50%、半形50%で、掲載率は75%である。

13は大型のものである。14はⅢ層出土で、基部側腹面に残る主要剥離面から、素材は横長の剥片であったと考えられる。15は先端部側約1/2を破損する半形のものである。石材は、13・14が黒曜石で、15は頁岩である。

「つまみ付きナイフ」

Ⅴ層から8点の出土である。残存状態の割合は、完形50%、半形25%、準完形・片がそれぞれ12.5%で、掲載率は37.5%である。

16は機能部が幅広になるもので、両側縁は曲線的である。17は腹面にも、つまみ部作出のため二次調整が施される。18は背面に先行剥離面を大きく残す。16～18の石材は頁岩である。

「スクレイパー」

Ⅴ層から7点の出土である。残存状態の割合は、完形42.9%、準完形・半形がそれぞれ14.3%、片が28.6%で、掲載率は57.1%である。

19は楕円形を呈し、厚みのあるラウンドスクレイパーである。背面に一部礫表皮面を残す。20は背

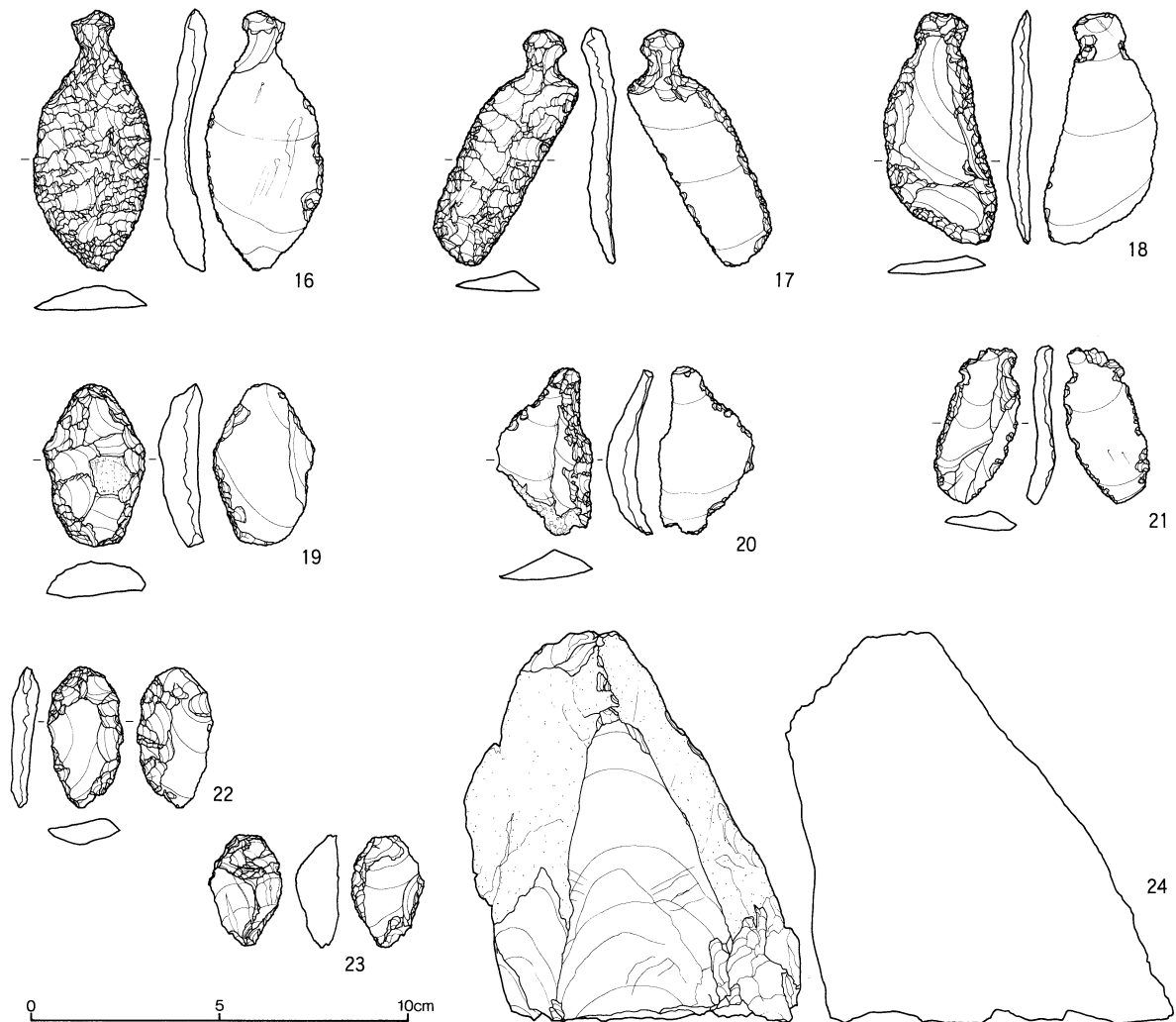


図30 包含層出土の剥片石器(2)

面に二つの先行剥離面を残し、下部には礫表皮面を残す。同面右側縁部には二次調整が施される。21はつまみ部分を作出したようにもみえ、つまみ付きナイフと判断すべきものかもしれない。背面には先行剥離面を複数残す。22はラウンドスクレイパーと判断される。腹面にはステップ状の剥離（落）が顕著である。石材はすべて黒曜石で、19～21が小球果を含み、22は赤色部分を含む。

「石核」

V層から3点の出土で、掲載率は33.3%である。

23は石材が黒曜石で、表面に2面、裏面に広く1面、両側面に2面、合わせて5面のネガティブな剥離面が観察される。表面上部分から右側面にかけては、打面調整のためと推定される剥離がみられる。

「原石」

その他（I層・攪乱）から2点の出土であるが、破片が接合した同一個体のものである。

24は赤色部分を含む黒曜石で、大きいものである。新鮮な剥離面と礫表皮面、及びこれらの面に擦痕が付いた部分が認められる。出土場所が、現代の住宅地跡の攪乱からであり、現代品である可能性も否定できない。

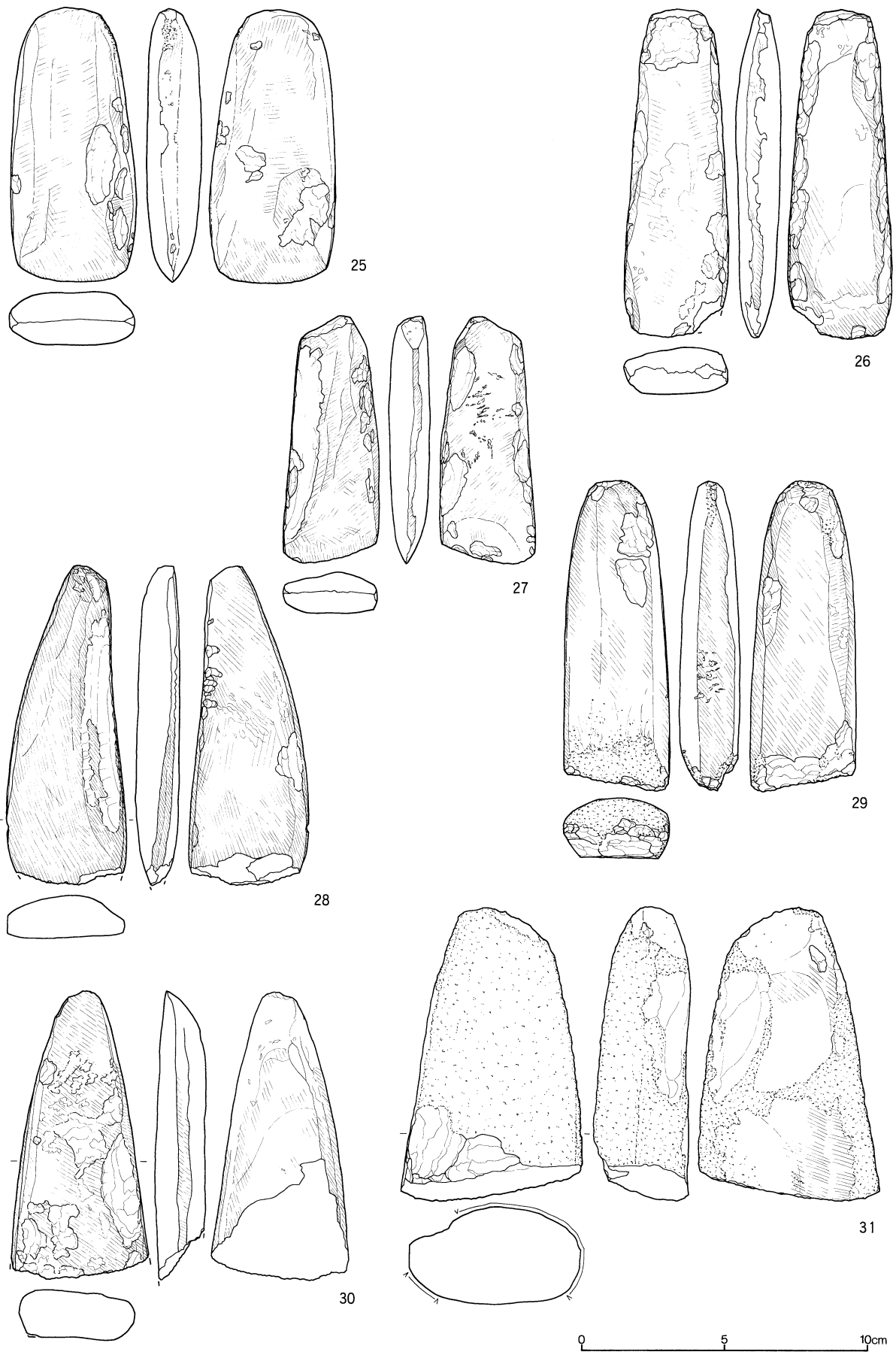


図31 包含層出土の磨製石器

(2) 磨製石器群 (図31 表20 図版11)

磨製石器群の各器種の出土割合は、磨製石斧91.3% (21点)、磨製石斧未製品・原石がそれぞれ4.3% (1点) である。本群全体での掲載率は30.4%である。

「磨製石斧」

V層から19点、VI層から2点出土した。残存状態の割合は、完形28.5%、準完形14.3%、半形9.5%、片47.6%で、片のものが半数近くを占める。掲載率は28.6%である。

25は完形で、側面と基部に敲打痕を残す。また、表面右側縁付近や裏面の刃部寄りにみられる剥落(離)痕は研磨痕が切っており、素材を打ち欠いた時に生じたものと推測される(出土状況 図版4)。26は刃部が一部破損するもので、両側面に敲打痕が観察される。表裏両面の側縁部には、素材を打ち欠いた剥離痕と使用による剥落痕の両者が混在していると考えられる。27は刃部が良好に残存するもので、表面左側縁部にはリング状を呈する大きな剥離痕があり、素材製作時に生じたと考えられる。28は素材が湾曲しているもので、基部幅と刃部幅の差が大きい。刃部は破損し、表面右側縁部にはリング状を呈する大きな剥落痕があり、そこには研磨が施されない。29は刃部を破損するもので、この時生じた剥落痕や製作時の研磨痕を切って、敲打痕が観察される。たたき石に転用したものであると考えられる。30は刃部が大きく破損するもので、基部幅と刃部幅の差が大きい。

石材は26が片岩、それ以外はすべて泥岩である。

「磨製石斧未製品」

V層から1点出土した。

31は厚みのあるもので、全体的に敲打痕が観察される。裏面の剥離して一段低くなった部分には、研磨痕が観察される。石材は泥岩である。

(3) 礫石器群 (図32～33 表21 図版13～14)

礫石器群各器種の出土割合は、すり石4.1% (127点)、たたき石10.2% (5点)、石錘4.1% (2点)、砥石42.9% (21点)、台石・石皿38.8% (19点) であり、砥石が最も多い。本群全体での掲載率は、61.2%で、自然礫も含めた総数に対しては23.1%となる。

自然礫は130点の出土で、完形6点 (4.6%)、片124点 (95.4%) である。掲載したものはない。

「石錘」

石錘と推測したものは2点ある。V層からの出土で、残存状態の割合は片100%である。

32は破損したためか、薄い板状を呈する。上位部分に打ち欠いたような痕跡が認められる。石材は泥岩である。33も上位部分に両面から打ち欠いたような痕跡が観察される。石材は片岩で、表面が風化し脆弱である。

「たたき石」

V層から5点の出土である。残存状態の割合は、完形60%、片40%で、掲載率は40%である。

34の石材は、やや硬質の泥岩で、図示した面の一部に使用痕が観察される。35の石材は砂岩で、図示した面に複数みられる剥落痕は使用によるものと考えられる。

「すり石」

V層から2点の出土で、残存状態の割合は完形100%である。

36・37は、ともに断面が三角形を呈し、その一角(縁)にすり痕が観察されるものである。石材はともに砂岩で、36はすり痕の付近には、使用によると考えられる剥落痕が認められる。

「砥石」

V層から21点の出土である。残存状態の割合は片100%である。石器の周囲が自然面でないものを

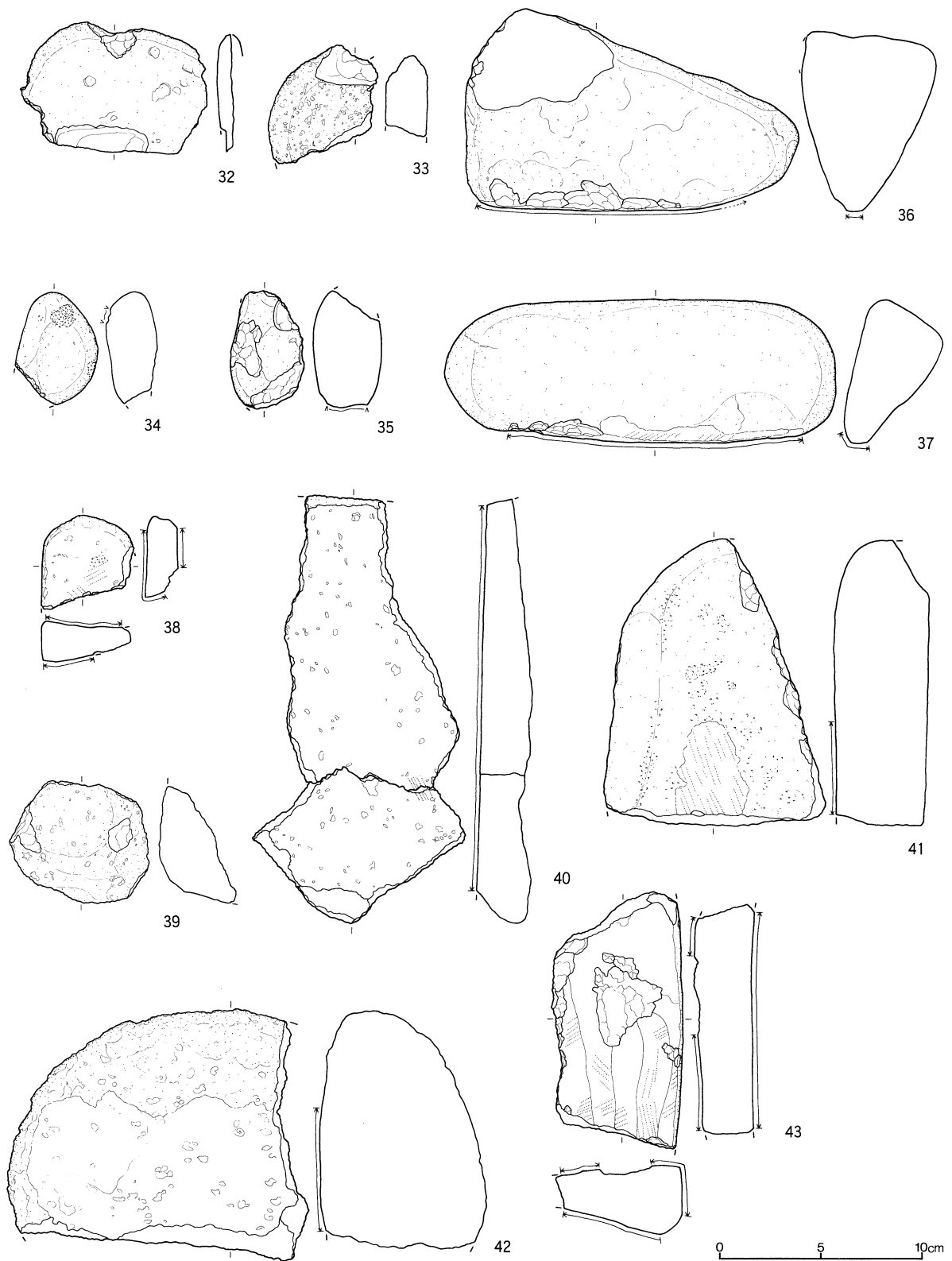


図32 包含層出土の礫石器(1)

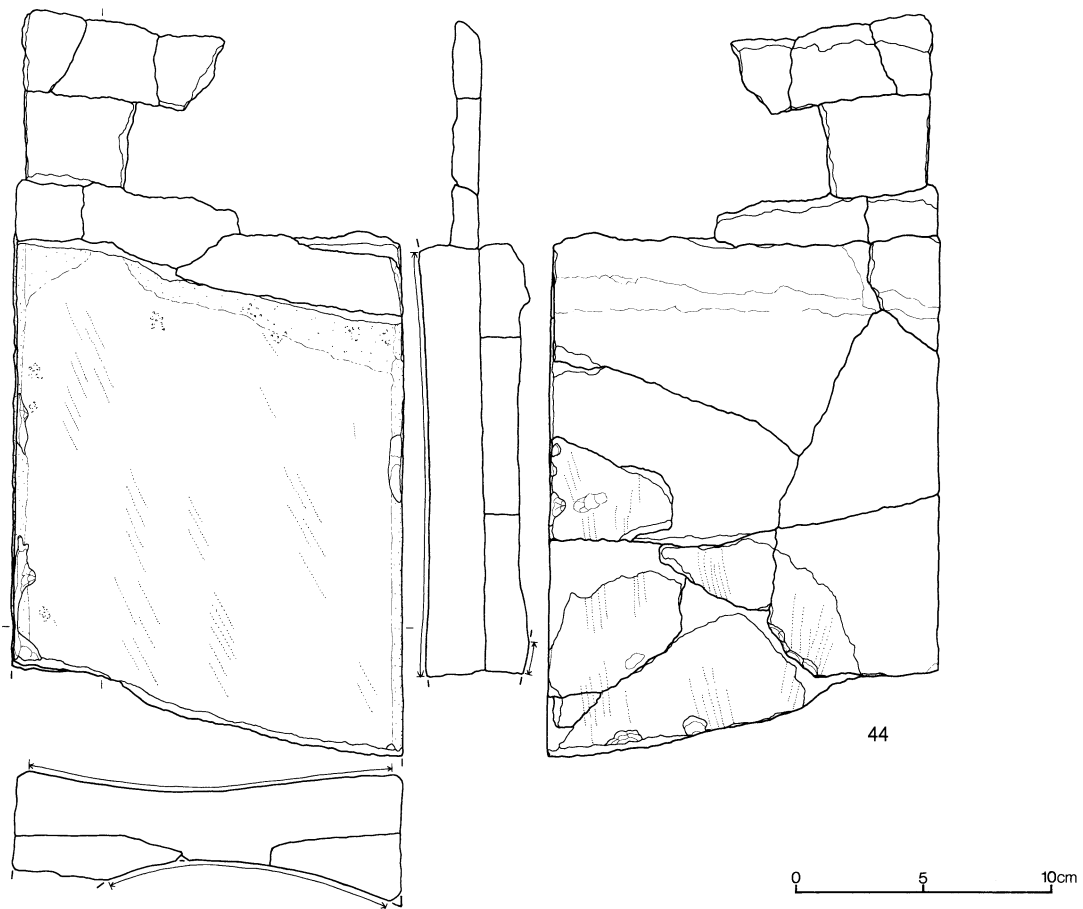


図33 包含層出土の礫石器(2)

片と判断したが、適度な大きさに打ち割って使用した可能性も考えられ、完形とすべきものもあろう。掲載率は90.5%である。

38は両面と側面にすり痕が観察され、表裏面の使用痕は明確にくぼんでいる。石材はやや硬質で、粗粒の砂岩である。43は表裏面に明瞭なくぼみが認められ、すり痕が観察される。石材はやや硬質で、中～細粒の砂岩である。44は数点の破片が接合した大型のものである（出土状況 図版4）。石の層理にそって規則的に割れているような印象を受ける。表裏面に使用痕が観察される。石材は、細粒でやや軟質の砂岩である。

「台石」

V層から19点の出土である。残存状態の割合は片100%である。これも砥石同様、周囲が自然面でないものを片と判断したが、適度な大きさに打ち割って使用した可能性も考えられ、完形とすべきものもあろう。掲載率は21.1%である。

39は破片で、図示した面にすり痕が観察される。40は接合資料で、図示した面にのみすり痕が観察される。石材は安山岩である。41の石材は表面が風化した砂岩あるいは凝灰岩で、砥石に分類すべきものかもしれない。42は厚みのあるもので、図示した面には、表面が平坦化した平滑な使用痕が観察される。石材は多孔質で、やや軟質の安山岩である。

(末光正卓)

表17 包含層出土復原土器観察表

図番号	図版	出土地点 (層位)	遺物 番号	部 位	破片 点数	法 量 (cm)			胎 土	備 考 (分 類)
						器高	口径	底径		
26 1	7	I-57区 (Ⅲ層)	*	口縁部~底部	30	(14.2)	(16.2) (10.0)	(11.5) (11.0)	鉱物主体 角閃石?他 粒径は中 繊維無し	V群c類 浅鉢
接合破片総点数		接合・同一個体破片			I-56区・Ⅲ(3)・I-57区・Ⅲ(3)・I-57区・攪乱(2)・J-56区・Ⅲ(1)					
39		出土地点・層位・遺物番号(点数)								
外 面	文様・調整	色 調	使用の痕跡	その他	部 位	文様・調整	色 調	使用の痕跡	その他	内 面
	刻 孔	み 橙色 (7.5YR7/6)	無	粘土の貼付	突 起 部	孔 非調整面	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	無	無	
	刺 突 文	橙色 (7.5YR7/6)	無	無	口 唇 部	*	*	*	*	
	沈 線 文	橙色 (7.5YR7/6)	無	無	口 上 部	非調整面	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	*	*	
	L R 斜行縄文 刺 突 文	橙色 (7.5YR7/6)	無	無	口 下 部	ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	*	*	
	L R 斜行縄文	橙色 (7.5YR7/6)	黒色化	無	胴 部	ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	*	*	
L R 縄文 沈 線	橙色 (7.5YR7/4)	黒色化	丸底	底 (底 部 面)	ヨコナデ	黄灰色 (2.5Y5/1)	黒色化	*		

表18 包含層出土破片土器観察表

図 掲載 番号	図版	出土地点	層位	破片数		破片部位	分 類	胎 土	文 様 ・ 調 整			色 調		使用の痕跡		備 考	
				小計	合計				外 面	内 面	他	外 面	内 面	外 面	内 面		
26	2	J-57区 J-58区	Ⅲ層 Ⅲ層	10 1	11	口縁~胴部	V群c類	岩石主体 粒径は細 繊維(筋状)少量	L R斜行縄文 沈線文	ヨコナデ (口縁部) 撚糸の刻み	(灰褐色)	にぶい黄橙色	黒色化 炭化物付着	黒色化	内面約2/3剥離		
"	3	J-57区	Ⅲ層	1	1	底部	V群c類	鉱物主体 粒径は細 繊維(筋状)少量	ナデ? 非調整面?	非調整面	*	(褐灰色)	(黒褐色)	黒色化	黒色化		
"	4	K-56区	Ⅲ層	1	1	胴部	V群c類	鉱物主体 粒径は細 繊維?微量	L R斜行縄文 沈線文	ヨコナデ	*	にぶい橙色	にぶい橙色	黒色化	黒色化		
"	5	J-57区	Ⅲ層	9	9	胴部	V群c類	鉱物主体 粒径は細 繊維(筋状)少量	L R縦走縄文	ヨコナデ	*	にぶい橙色	灰黄褐色	黒色化 炭化物付着	黒色化 内面約3/5剥離		
"	6	I-56区 J-57区	Ⅲ層 Ⅲ層	3 2 1	6	胴部	V群c類	岩石鉱物ともにあり 粒径は中 繊維(筋状)少量	L R斜行縄文 沈線文 ナデ	ヨコナデ	*	にぶい橙色	にぶい褐色	黒色化	黒色化	壺形土器? 外面約1/4剥離	
"	7	I-59区	V2層	1	1	胴部	V群c類	岩石鉱物ともにあり 粒径は細 繊維無し	沈線文 ヨコナデ	タテミガキ	*	浅黄褐色	(褐灰色)	黒色化 炭化物付着	黒色化		
"	8	O-56区	V2層	1	1	胴部	IV群b類	岩石鉱物ともにあり 粒径は中 繊維無し	沈線文 ナデ?	ナデ?	*	にぶい黄褐色	(褐灰色)	*	黒色化?		
27	9	8	範囲確認調査 出土遺物	1	1	口縁部	IV群a類	岩石鉱物ともにあり 粒径は中 繊維無し	不整な縄文 ヨコナデ	不整な縄文(口唇部) L R縄文	(黒褐色)	淡黄色	黒色化 炭化物付着	黒色化	貼付上剥離		
"	10	"	(R-55区)	V2層	1	1	口縁部	IV群a類	岩石主体 堆積岩 粒径は粗 繊維無し	不整な縄文 R L刺突文 ヨコナデ	不整な縄文(口唇部) 不整な縄文	(褐灰色)	(黒褐色)	黒色化	黒色化		
"	11	"	Q-56区	攪乱	1	1	口縁部	IV群a類	岩石鉱物ともにあり 粒径は中 繊維無し	L R縄文 L R斜行縄文	不整な縄文(口唇部) L R縄文	浅黄色	浅黄色	*	*	全体的に軽く磨耗	
"	12	"	H-58区	IV1層	1	1	口縁部	IV群a類	鉱物主体 粒径は細 繊維無し	L R・R L 羽状縄文	?(口唇部) L R縄文	(褐灰色)	灰黄色	黒色化	黒色化	口唇部~内面磨耗 外面約1/2剥離	
"	13	"	L-61区	V2層	1	1	口縁部	IV群a類	岩石鉱物ともにあり 粒径は粗 繊維無し	L R・R L 羽状縄文	不整な縄文 ナデ?	淡黄色	浅黄色	*	黒色化		
"	14	"	G-58区	VI層	1	1	口縁部	IV群a類	岩石鉱物ともにあり 粒径は中 繊維無し	L R斜行縄文	L R斜行縄文 ヨコナデ	にぶい黄褐色	(灰色)	*	黒色化		
"	15	"	M-55区	V2層	1	1	口縁部	IV群a類	鉱物主体 粒径は細 繊維無し	L R斜行縄文 L R縄文?	L R縄文(口唇部) 不整な縄文?	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒色化	黒色化	補修孔あり 口縁部下の内面磨耗	
"	16	"	D-57区	V2層	1	1	口縁部	IV群a類	岩石主体 粒径は粗 繊維無し	L R斜行縄文	不整な縄文(口唇部) 縄文?	(褐灰色)	灰黄褐色	黒色化	*		
"	17	"	E-56区	V2層	1	1	口縁部	IV群a類	鉱物主体 粒径は細 繊維無し	L R縄文?	ヨコナデ L R縄文?	(黒褐色)	にぶい黄褐色	黒色化 炭化物付着	黒色化 炭化物付着		
"	18	"	N-55区	V2層	1	1	口縁部	IV群a類	鉱物主体 黒雲母 粒径は細 繊維無し	L R斜行縄文 L R縄文	L R縄文(口唇部) L R縄文	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	*	*	内面に指頭圧痕	
28	19	"	Q-55区	V2層	2	2	底部	IV群a類	岩石鉱物ともにあり 粒径は中 繊維無し	不整な縄文	?(底面) ナデ・指頭痕	浅黄橙 ~橙色	浅黄褐色	*	*	全体的に磨耗	
"	20	"	E-57区	V2層	3	3	底部	IV群a類	岩石鉱物ともにあり 粒径は中 繊維無し	R L斜行縄文	*	(底面) R L縄文	にぶい黄褐色	*	*	*	内面剥離
"	21	"	J-55区	V2層	1	1	底部	IV群a類	鉱物主体 黒雲母 粒径は細 繊維無し	R L斜行縄文	*	*	浅黄褐色	*	*	*	内面剥離後、全体的に磨耗
"	22	9	N-61区	V2層	1	1	胴部	IV群a類	鉱物主体 粒径は細 繊維無し	R L斜行縄文 L R縄文	ナ デ	*	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒色化	炭化物付着	外面約2/5剥離
"	23	"	S-56区	V2層	3	3	胴部	IV群a類	岩石鉱物ともにあり 粒径は細 繊維無し	L R斜行縄文	*	(貼付上) L R横走縄文	黄褐色	*	*	*	内面剥離
"	24	"	G-56区	V2層	2	2	胴部	IV群a類	鉱物主体 有色鉱物 粒径は中 繊維無し	L R斜行縄文	?	*	にぶい黄褐色	(黒褐色)	*	黒色化 炭化物付着	
"	25	"	G-58区	V2層	2	2	胴部	IV群a類	鉱物主体 粒径は細 繊維無し	L R・R L 羽状縄文	不整な縄文 タテナデ	*	灰白~ 浅黄褐色	灰黄褐色	黒色化	黒色化	
"	26	"	I-55区	V2層	1	1	胴部	IV群a類	岩石鉱物ともにあり 粒径は中 繊維無し	L R斜行縄文	ヨコナデ	*	浅黄褐色	浅黄褐色	*	黒色化	外面約2/5剥離
"	27	"	H-56区	VI層	1	1	胴部	IV群a類	鉱物主体 有色鉱物 粒径は細 繊維無し	R L斜行縄文	ナ デ	*	灰白色	(褐灰色)	*	黒色化	
"	28	"	G-55区	V2層	1	1	胴部	IV群a類	岩石主体 粒径は中 繊維無し	L R斜行縄文	ナ デ	*	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	*	*	
"	29	"	N-55区	V2層	1	1	胴部	IV群a類	岩石主体 凝灰岩? 粒径は中 繊維無し	R L斜行縄文 縦位施文	ナ デ	*	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒色化	*	
"	30	"	J-55区	V2層	1	1	胴部	IV群a類	岩石主体 安山岩 粒径は粗 繊維無し	R L斜行縄文	ナ デ	*	浅黄褐色	にぶい黄褐色	*	*	
"	31	"	N-62区	V2層	1	1	胴部	IV群a類	岩石主体 凝灰岩他 粒径は粗 繊維無し	L R斜行縄文 縦位施文	ヨコナデ	*	(褐灰色)	にぶい黄褐色	黒色化 炭化物付着	*	

表19 包含層出土剥片石器群観察表

図	掲載番号	図版	出土地点	層位	器種	法 量 (cm)			重 量 (g)	石 材	残存形態	使 用 痕	備 考
						最大長	最大幅	最大厚					
29	1	10	H-58区	Ⅲ 層	石鏃	3.5	1.3	0.3	1.3	黒曜石	完形	微細剥落痕	
"	2	"	L-61区	V 層	石鏃	3.2	1.5	0.4	1.1	黒曜石	完形	剥落痕 微細剥落痕	
"	3	"	O-59区	V 2層	石鏃	2.8	1.3	0.3	0.8	黒曜石	完形	微細剥落痕	
"	4	"	M-59区	V 層	石鏃	2.6	1.1	0.3	0.6	黒曜石	完形	剥落痕? 微細剥落痕	
"	5	"	Q-56区	V 2層	石鏃	2.0	1.0	0.2	0.4	黒曜石	完形	破損 微細剥落痕	
"	6	"	K-59区	V 2層	石鏃	1.7	1.2	0.3	0.5	黒曜石	完形	破損 微細剥落痕	
"	7	"	M-57区	V 1層	石鏃	(4.0)	1.1	0.4	1.8	黒曜石	完形	微細剥落痕	
"	8	"	G-55区	Ⅵ 層	石鏃	2.5	1.0	0.2	0.9	黒曜石	完形	破損 微細剥落痕	
"	9	"	I-59区	V 2層	石鏃	5.4	1.4	0.5	2.5	黒曜石(小球果含む)	完形	破損 微細剥落痕	
"	10	"	O-59区	V 1層	石鏃	5.9	2.3	0.4	5.0	黒曜石(小球果含む)	完形	破損 微細剥落痕	
"	11	"	K-56区	V 2層	石鏃	5.2	2.5	0.6	6.2	黒曜石	完形	破損? 微細剥落痕	
"	12	"	S-55区	V 2層	石鏃	4.8	2.1	0.6	4.7	黒曜石	完形	微細剥落痕	
"	13	"	N-63区	V 2層	石槍・ナイフ	8.7	3.4	0.7	18.3	黒曜石	完形	剥落痕 微細剥落痕	
"	14	"	I-57区	Ⅲ 層	石槍・ナイフ	6.2	2.1	0.6	6.7	黒曜石	完形	破損? 微細剥落痕	
"	15	"	K-54区	V 2層	石槍・ナイフ	(4.8)	2.5	0.7	9.7	頁岩 (黄灰色)	半形	被熱 破損 微細剥落痕	
30	16	"	Q-59区	V 層	つまみ付きナイフ	7.0	3.0	0.6	13.2	頁岩(軟質) (灰白色)	完形	微細剥落痕	
"	17	"	K-61区	V 層	つまみ付きナイフ	6.3	2.4	0.5	10.3	頁岩 (褐灰~にぶい黄褐色)	完形	微細剥落痕	
"	18	"	I-58区	V 2層	つまみ付きナイフ	6.2	2.7	0.4	8.4	頁岩 (灰白~灰黄褐色)	完形	微細剥落痕	
"	19	"	N-60区	V 2層	スクレイパー	4.3	2.7	0.7	12.4	黒曜石(小球果含む)	完形	微細剥落痕	ラウンドスクレイパー
"	20	"	J-55区	V 2層	スクレイパー	4.5	2.6	0.8	6.1	黒曜石(小球果含む)	完形	微細剥落痕	サイドスクレイパー
"	21	"	S-56区	V 2層	スクレイパー	4.2	2.0	0.5	3.7	黒曜石(小球果含む)	完形	微細剥落痕	サイドスクレイパー
"	22	"	K-57区	V 2層	スクレイパー	3.8	2.0	0.7	4.8	黒曜石(赤色部分含む)	完形	微細剥落痕	
"	23	"	D-57区	V 2層	石核	3.0	1.9	1.2	6.2	黒曜石(小球果含む)	*		
"	24	"	*	攪乱	原石?	10.4	9.0	9.3	720	黒曜石(赤色部分含む)	*		現代品?

表20 包含層出土磨製石器群観察表

図	掲載番号	図版	出土地点	層位	器種	法 量 (cm)			重 量 (g)	石 材	残存形態	使 用 痕	備 考
						最大長	最大幅	最大厚					
31	25	11・4	G-55区	V 2層	磨製石斧	9.7	4.6	1.9	145.8	泥岩 (緑灰色)	完形	*	(加工痕) 打ち欠き 敲打・研磨痕
"	26	11	G-55区	V 2層	磨製石斧	11.6	3.7	1.9	112.3	片岩 (暗青灰色)	完形	破損 剥落痕	(加工痕) 敲打・研磨痕
"	27	"	H-57区	Ⅵ 層	磨製石斧	8.7	3.4	1.5	64.4	泥岩 (暗緑灰色)	完形	剥落痕(刃こぼれ)	(加工痕) 研磨痕
"	28	"	S-56区	V 2層	磨製石斧	(11.3)	4.2	1.5	107.5	泥岩 (緑灰色)	完形	破損(刃部) 剥落痕	(加工痕) 研磨痕
"	29	"	N-62区	V 層	磨製石斧 (たたき石転用品)	10.9	3.7	2.1	156.5	泥岩 (緑灰色)	完形	破損(刃部) 剥落痕	(加工痕) 敲打? 研磨痕? (たたき石使用痕) たたき痕
"	30	"	L-62区	V 2層	磨製石斧	(10.2)	(4.8)	(1.75)	125.9	泥岩 (黒褐色)	準完形	破損(刃部) 剥落痕	(加工痕) 研磨痕
"	31	"	O-60区	V 層	磨製石斧未製品	(10.3)	(6.4)	3.4	310.8	泥岩 (緑灰色)	*	破損?	(加工痕) 打ち欠き 敲打・研磨痕

表21 包含層出土礫石器群観察表

図	掲載番号	図版	出土地点	層位	破片数		器種	法 量 (cm)			重 量 (g)	石 材	残存形態	使 用 痕	備 考
					小計	合計		最大長	最大幅	最大厚					
32	32	12	R-56区	V 2層	1	1	石錘	(9.2)	(6.6)	(0.8)	63.8	泥岩 (黒褐色)	半形	破損 剥落痕	(加工痕) 打ち欠き?
"	33	"	M-57区	V 2層	1	1	石錘	(5.4)	(5.9)	2.0	93.9	片岩 風化 脆弱	片	*	(加工痕) 打ち欠き?
"	34	"	K-61区	V 層	1	1	たたき石	5.5	4.1	2.5	68.1	泥岩 (灰白色)	*	たたき痕 破損	
"	35	"	O-62区	V 2層	1	1	たたき石?	(5.8)	(3.7)	3.4	83.9	砂岩 (灰白色)	*	たたき痕? (剥離部分)	
"	36	"	N-59区	V 2層	1	1	すり石	10.0	16.6	6.8	(1,120)	砂岩 (灰白色)	*	すり痕 剥落痕	
"	37	"	N-58区	V 2層	1	1	すり石	7.1	14.5	4.9	(820)	砂岩 (黄灰~褐灰色)	*	すり痕	
"	38	13	J-57区	Ⅵ 層	1	1	砥石	(4.6)	(4.5)	2.0	41.5	砂岩 (灰白色)	*	すり痕 破損?	(加工痕) 周縁研磨痕?
"	39	"	K-61区	Ⅵ 層	1	1	台石	(6.9)	(6.1)	(3.8)	145.9	安山岩 (灰白色)	片?	すり痕 破損	
"	40	"	M-20区	V 2層	2	2	台石	(21.1)	(10.6)	(2.7)	(680)	安山岩 (灰白色)	片?	すり痕 破損	
"	41	"	N-61区	V 2層	1	1	台石	(14.2)	(11.1)	(4.7)	(805)	砂岩? 凝灰岩? (灰白色)	片?	すり痕 破損	(加工痕) 周縁打ち欠き?
"	42	"	G-55区	V 2層	1	1	台石	(14.9)	(12.5)	(8.2)	(1,184)	安山岩 (灰白色)	片?	たたき痕 破損	(加工痕) 周縁打ち欠き? 敲打痕?
"	43	"	K-55区	V 1層	1	1	砥石	(12.7)	(6.5)	(3.5)	(336)	砂岩 (灰黄褐色)	片?	すり痕 破損	(加工痕) 周縁打ち欠き?
33	44	4・14	L-60区 M-61区 M-60区	V 2層 V 2層 V 2層	10 4 3	17	砥石	(29.3)	(15.5)	(5.0)	(2,200)	砂岩 (灰黄色)	準完形?	すり痕 破損 剥落痕?	

V章 まとめ

オリカ1遺跡は、平成14・15年度にわたって発掘調査が行われた。昨年度に調査された左岸部分については、すでに報告書が刊行されている（北埋調報188）。本章では、二ヶ年にわたって調査した本遺跡の全体を簡略にまとめておく。

1 調査区の地形 (図34)

オリカ1遺跡は千歳川水系により形成されたと考えられる中位～下位段丘上に立地する。河川改修された現在のオリカ川が、調査区を分けるように南東から北西へと流れているが、かつては、本年度調査区（右岸部分）の63ラインよりも北東側付近を流れていたことが発掘調査や古地図等から判明し、本来的には一連の段丘であったと考えられる。また、左岸部分のM-43杭よりも北東側から、右岸部分のM-57杭より南側の範囲は、土層が著しく削平されており、特に左岸ではE n - a 降下軽石層（Ⅷ2層）にまで及んでいる。この面の高さは、M-43杭の南側部分のⅢ層上面とほぼ同じであり、このことから1～2m程度高い段丘であったと推測される。そしてこの段丘部には、遺構・遺物が密に分布していたのではないかと考えられる。

最も高いこの段丘部の北東側には、オリカ川の旧河道へと傾斜する斜面があり、反対の南側は比較的ゆるやかな斜面である。さらに地形は北西側にも傾斜がみられ、北西側調査区界付近では、傾斜が若干ゆるくなり低地部となる。しかし、この低地部は、一般的な河川や旧河道にみられるような水成堆積物は認められず、泥炭を含むこと、層が厚いこと、還元色を呈すること、この三つの点を除けば、段丘部や斜面と同じ土層の堆積状況であるといえる。この種の低地部は、地下水位が高いことが成因であり、旧河川等の作用により形成されたものではないと考えられる。

以上、まとめると本遺跡の地形はおおまかには次のように区分されよう。

- ①：削平された段丘部；W-47杭～M-43杭～M-57杭～T-57杭の範囲
- ②：①の段丘部の南側に広がる、比較的緩やかな斜面部；M-35杭～M-43杭～W-47杭の範囲
- ③：②の段丘部の北東側、オリカ川旧河道への斜面部；T-57杭～M-57杭～M-64杭の範囲
- ④：①・②から北西側に広がる斜面部；Fライン～Mラインの範囲
- ⑤：④の斜面からやや傾斜が緩やかになる北西側の低地部；Fライン～B・Cラインの範囲

2 遺構の概要 (図34 表22)

二年度の調査で、確認された遺構の数を表22にまとめた。主な遺構について簡単に述べる。

(1) Ⅲ層の遺構

段丘部の南側斜面（②）に集中してみられ、他は全く認められない。

「平地式住居跡USD-1」

Ⅲ層上位で、炉跡と判断される焼土とそのそばで灰主体の堆積物及び柱穴が認められた。刀子、釘状及び板状を呈する鉄器や、火打ち石と考えられるチャート（接合礫）、安山岩や火山礫凝灰岩の自然礫が出土した。Ⅱ層のT a - a直下であり、降下年の1739年より以前、アイヌ文化期のものと考えられる。道跡1を切って構築されている。

表22 遺構一覧表 (二年度分)

年度/種別	道 跡		平地式住居跡		竪穴式住居跡		土 坑		焼 土		土器破片集中		フレイク・チップ集中		礫集中 (集石)	
	(条)		SD	(軒)	PD	(軒)	PI	(基)	FP	(ヶ所)	CP	(ヶ所)	FC	(ヶ所)	CS	(ヶ所)
	皿層(U)	V層(L)	皿層(U)	V層(L)	皿層(U)	V層(L)	皿層(U)	V層(L)	皿層	V・VI層	皿層(U)	V層(L)	皿層(U)	V層(L)	皿層(U)	V層(L)
平成14年度	0	1	1	0	0	6	0	8	1	22	1	3	0	1	1	1
平成15年度	0	0	0	0	0	0	0	2	0	10	0	1	0	0	0	1
合 計	1		1		6		10		33		5		1		3	

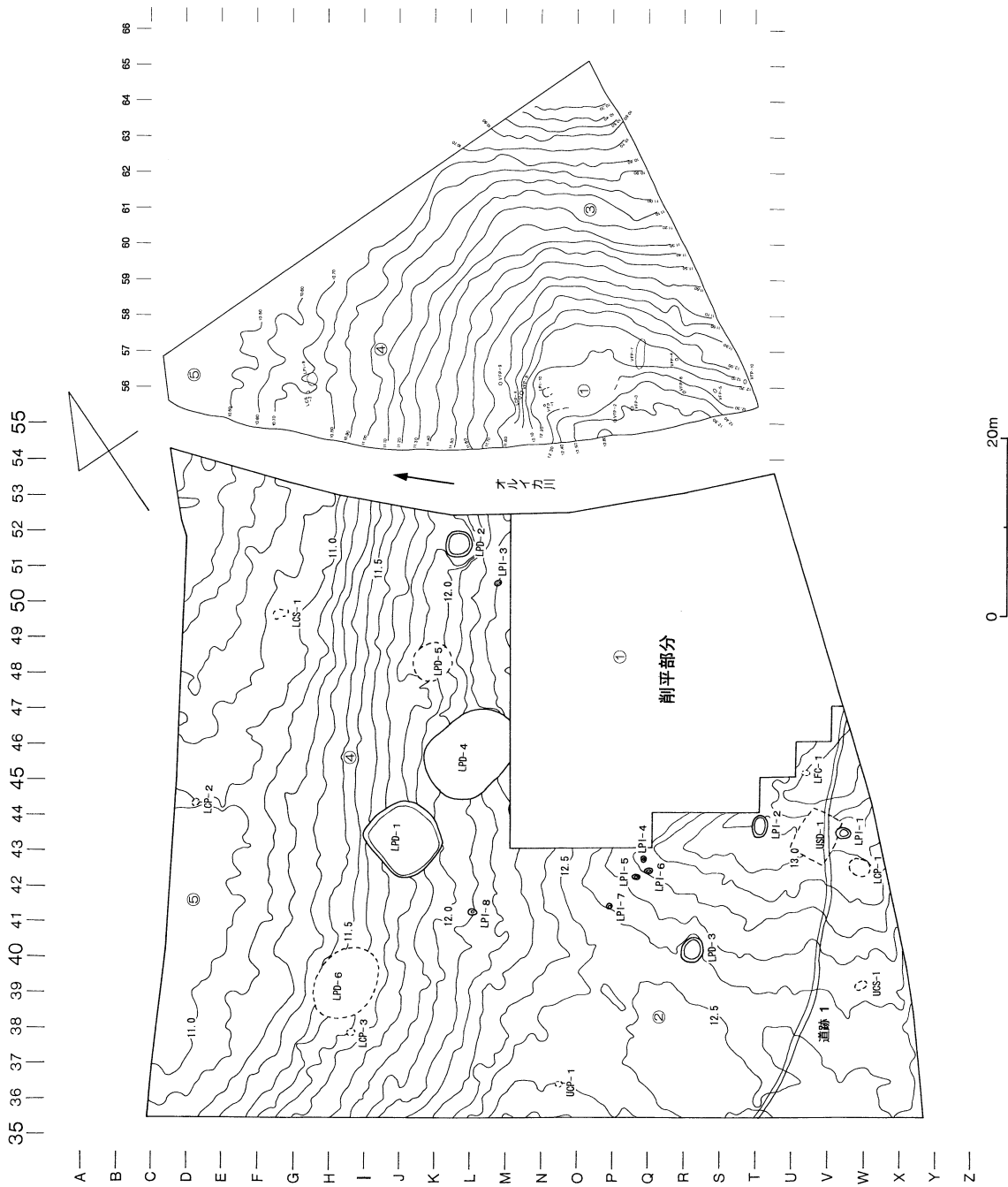


図34 遺構位置図及びⅥ層上面地形測量図 (二年度分)

「礫集中UCS-1」

USD-1よりも南へ約15mの地点で確認された。自然礫の集中が2ヶ所認められた。明確な決め手はないが、アイヌ文化期と推測している。

「土器破片集中UCP-1」

N-36区で浅鉢1個体が出土したもので、縄文時代晩期後半（V群c類）と判断される。

(2) V層の遺構

削平された段丘部(①)の右岸部分や、その南側斜面部(②)、北西側の斜面部(④)、その低地部(⑤)に立地する。

「道跡1」

段丘部の南側斜面(②)で、IV層直下のV層上面で確認された。V層上面の清掃作業中、周囲より黒色味の強い部分が筋状に認められた。土層断面は、V1～V2層にIV層軽石を微量に含む土が、浅い皿状に堆積する。確認状況から、人工的に設けられた痕跡は認められず、継続的に踏み固められた結果により形成されたと推測される。この黒色土からは縄文時代晩期後半（V群c類）の土器が出土し、道跡はこの時期であると推測される。南西から北東方向へ、削平された段丘部(①)をゆるやかに登り、その中腹を迂回するルートであろうか。この道は、両調査区外に続くようである。

「竪穴式住居跡LPD-1～6」

竪穴式住居跡は二つに分けられる。一つは掘り込みが明瞭でなく、土器囲い炉を有するもので、もう一つは小型で明瞭な掘り込み有し、覆土や床面に炭化材がみられるものである。前者はLPD-1・4・5・6で、後者がLPD-2・3である。土器囲い炉を有する住居跡は、北西側へのゆるやかな斜面部に立地する。概して楕円形を呈し、柱穴が比較的多く認められる。LPD-2・3は、地形の区分上異なる場所(④と②)に立地するが、削平された段丘部の裾の斜面に位置するという点では、同じと考えられる。住居跡のほぼ中央の床面に地床炉をもち、覆土や床面には構築材と推測される炭化材が多量に堆積する。また、段丘部(①)の右岸部分にはVFP-5があり、これは土器囲い炉である可能性が考えられる。

出土土器はIV群a類のタブコブ式であり、このことから、住居跡はすべて縄文時代後期初頭であると考えられる。さらに土器を細分すると、小型のLPD-2・3が古く、土器囲い炉を有するLPD-1・4・5・6が新しいと判断される。

「土坑LPI-1～10」

LPI-1・2・4～7は南側斜面(②)に、LPI-3・8・9は北西側斜面部(④)に、LPI-10は段丘部(①)にそれぞれ立地する。LPI-1・2は縄文時代晩期後半と推測され、LPI-2では自然礫がまとまって確認された。LPI-4～7はP-42杭付近に集中する。時期は縄文時代後期初頭であると推測される。LPI-3・8・9はそれぞれ単独で存在する。LPI-9は覆土中から台石や自然礫がまとまって出土した。LPI-10は浅いもので、下位部分が削平を免れて残存していた。

「土器破片集中LCP-1～4」

LCP-1は段丘部南側の斜面部(②)に、LCP-2は北西側低地部(⑤)、LCP-3は北西側の斜面部(④)、LCP-4は段丘部(①)にそれぞれ立地する。LCP-1からは、縄文時代晩期後半（V群c類）の深鉢の復原個体と同時期の破片が出土した。LCP-2～4は縄文時代後期初頭のタブコブ式（IV群a類）で、LCP-2では、口縁部から胴部上位、LCP-4では、胴部中位から底部の破片がそれぞれ出土した。

表23 包含層出土土器点数表（二年度分）

時期	遺物種別 / 層位		III 層	V 層	VI 層	その他		合計	
	部位	残存状態				小計	小計	小計	小計
I 群	口縁部 (r i)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	底部 (b a)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	胴部 (b o)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	不明その他	良好							
		剥離							
		磨耗	1		7		3		11
平成14年度出土			1	7	3	3	0	11	
小計			1	7	3	3	0	11	
II 群	口縁部 (r i)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	底部 (b a)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	胴部 (b o)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	不明その他	良好							
		剥離							
		磨耗	0		6		1		7
平成14年度出土			0	6	1	1	0	7	
小計			0	6	1	1	0	7	
III 群	口縁部 (r i)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	底部 (b a)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	胴部 (b o)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	不明その他	良好							
		剥離							
		磨耗	1		209		2		213
平成14年度出土			1	209	2	1	1	213	
小計			1	209	2	1	1	213	
IV 群	口縁部 (r i)	良好		14		4		1	19
		剥離		9					9
		磨耗	0		23		4		28
	底部 (b a)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		9		1		10
	胴部 (b o)	良好		243		7		3	253
		剥離		67		5		1	73
		磨耗	0	2		1		1	4
	不明その他	良好		1		13		5	17
		剥離		2		2			4
		磨耗		252		7		5	264
平成14年度出土			2	28		716	2	786	
小計			16	4,745	707	716	34	5,502	
V 群	口縁部 (r i)	良好	15					2	17
		剥離							
		磨耗		15		0		2	17
	底部 (b a)	良好	6						6
		剥離							
		磨耗		6		0		0	6
	胴部 (b o)	良好	102		3			6	111
		剥離						1	1
		磨耗		136		3		7	146
	不明その他	良好	4					2	6
		剥離						1	1
		磨耗	51					2	52
平成14年度出土			150	362	23	23	15	1,507	
小計			902	362	23	23	10	1,297	
未分類	口縁部 (r i)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	底部 (b a)	良好							
		剥離							
		磨耗	0		0		0		0
	胴部 (b o)	良好			3				3
		剥離							
		磨耗			3		0		3
	不明その他	良好							
		剥離							
		磨耗			1			1	1
平成14年度出土			0	4	5	0	5	9	
小計			0	8	0	0	6	14	
土製品			0	0	0	0	0	0	
合計			1,284	6,753	763	78	8,878		

「フレイク・チップ集中、礫集中 LFC-1、LCS-1・2」

LFC-1が南側斜面部(②)に、LCS-1・2が北西側の斜面部(④)にそれぞれ位置する。LFC-1は、近くから出土した土器から、縄文時代晩期後半と推測される。LCS-1・2は、ともに自然礫がまとまって出土した。

以上、おおまかに遺構の概要を述べた。遺構の種別、時期とその立地について、ある程度の相関関係が認められよう。

3 遺物の概要 (表23~26)

二年度分の包含層出土遺物について、分類基準や出土層位ごとに点数表にまとめた。これらをもとに、オルイカ1遺跡における、遺物の出土のあり方について、簡単にまとめておく。

(1) 土器

I群は11点、全出土点数の0.1%で、b類の東釧路式系土器群である。II群は7点で全出土点数の0.1%で、b類の静内中野式と推測されるものである。III群は213点、全出土点数の2.4%を占め、b類の天神山式である。これらI~III群は左岸部分からの断片的な出土である。

IV群は6,957点で、全出土点数の74.2%を占める。V層からの出土が9割を越える。b類の手稲式と判断したものが、削平された段丘部(①)の右岸部分から1点のみ出土しているが、それ以外はすべてIV群a類のタブコブ式で、本遺跡の主体を占める。

V群は、1,676点を数え、全出土点数の18.9%を占める。III層から75.4%、V層から21.6%の出土で、縄文時代晩期後半のものである。ここでV群土器について、出土分布図(北埋調報188 図VII-7・9及び本報告書掲載図21・22)をみると、III層出土のV群土器は、段丘部南側斜面から土器破片集中UCP-1が位置する斜面部(④)の調査区南側付近に多い。一方、V層出土のV群土器は、右岸部分からは斜面部(③)から1点のみの出土であるが、左岸部分では段丘部の南側斜面部(②)から斜面部(④)にかけての、調査区の南西側付近と、斜面部(④)から低地部(⑤)にかけての調査区北側付近、この2ヶ所に分布がみられ、III層出土のものとは明確に異なるあり方である。

(2) 石器類

剥片石器群

剥片石器は1,414点の出土で、石鏃10.7%、石槍・ナイフ2.0%、石錐0.1%、つまみ付きナイフ2.0%、スクレイパー4.0%、石製品0.1%、棒状原石0.4%である。III層出土のもので、定形的な石器としては、石鏃が最も多い。つまみ付きナイフはこのIII層からの出土は無く、縄文時代晩期に属さないことが推測できる。V層出土のものが全出土点数の81.4%を占める。

磨製石器群

全出土点数のうち、95.6%を磨製石斧が占める。片のものが多く、V層からの出土が圧倒的である。未製品の出土も認められる。

礫石器群・自然礫

礫石器は152点の出土で、台石・石皿が44.7%、砥石が34.2%と両方で7割以上を占める。V層からの出土が圧倒的に多い。また自然礫もV層出土のものが77.6%を占める。

以上、各石器群の時期については、次のようにまとめられる。石器類も土器と同様にV層からの出土が多く、これらは縄文時代後期初頭のもものがほとんどであると判断されるが、晩期後半のものもわずかに含まれる可能性がある。またIII層出土のものはすべて縄文時代晩期後半と考えられよう。

(末光正卓)

表24 包含層出土剥片石器群点数表（二年度分）

遺物種別 / 層位			Ⅲ 層		Ⅴ 層		Ⅵ 層		攪乱層		その他		合計						
群	器種	残存状態																	
剥片石器群	石 鏃	完 形	7	小計	73	小計	6	小計	1	小計	1	小計	86	小計					
		準完形	1		24		5						31						
		半 形	9		10		2						13						
		片			16		1						14		2	4	1	21	
	石槍・ナイフ	完 形	2	小計	7	小計	3	小計		小計		小計	12	小計					
		準完形			2								2						
		半 形	2		5		22								4		0	0	5
		片			8		1						9						
	石 錐	完 形		小計		小計		小計		小計		小計	1	小計					
		準完形			1								1						
		半 形	0				1								0		0	0	
		片											0		0				
	つまみ付きナイフ	完 形		小計	12	小計	2	小計		小計		小計	14	小計					
		準完形			5		1						6						
		半 形	0		3		24								4		0	0	3
		片			4		1						5						
	スクレイパー	完 形	1	小計	14	小計	3	小計	1	小計	1	小計	18	小計					
		準完形			11								13						
		半 形	1		7		47						2		7		1	1	9
片		15			2		17												
石製品	完 形		小計		小計		小計		小計		小計	2	小計						
	準完形			2								2							
	半 形	0				2								0		0	0		
	片											0		0					
棒状原石	完 形		小計	3	小計		小計		小計		小計	3	小計						
	半 形	0		2		5						0		0	0	2			
U・Rフレイク			4		48		5		2		1	60							
石 核			2		20				1			23							
フレイク・チップ			42		859		109		39		8	1,057							
原 石											2	2							
剥片石器群合計			60		1,151		143		47		13	1,414							

表25 包含層出土磨製石器群点数表（二年度分）

遺物種別 / 層位			Ⅲ 層		Ⅴ 層		Ⅵ 層		攪乱層		その他		合計					
群	器種	残存状態																
磨製石器群	磨製石斧	完 形		小計	9	小計	2	小計	0	小計		小計	11	小計				
		準完形			12		1		13									
		半 形	1		2		15		76		1		8		2	2	19	
		片	1		40		4		8		0		2		0	45		
	石製品	完 形	1	小計		小計		小計		小計		小計	1	小計				
		準完形																
		半 形	1		1		1								0		0	1
		片															0	2
	磨製石斧未製品			0		2		0		1		0	3					
	擦切残片			0		0		0		0		0	0					
研磨石材			0		0		0		0		0	0						
原 石			0		0		0		0		0	0						
磨製石器群合計			3		79		8		3		0	93						

表26 包含層出土礫石器群・自然礫点数表（二年度分）

遺物種別 / 層位			Ⅲ 層	Ⅴ 層		Ⅵ 層		攪乱層		その他		合計		
群	器種	残存状態		小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計		
礫 石 器 群	すり石	完形		2							2			
		準完形												
		半形		0	1	3	0	0	0	0	0	1	3	
		片												
	たたき石	完形			15		1					16		
		準完形												
		半形		0	3	26	1	0	0	0	0	3	27	
		片			8							8		
	石製品	完形												
		準完形												
		半形		0		0	0	0	0	0	0		0	
		片												
	石錘	完形												
		準完形												
		半形		0	2	2	0	0	0	0	0	2	2	
		片												
	砥石	完形			1							1		
		準完形			1							1		
		半形		0		48	4	4	0	0	0		52	
		片			46		4					50		
	台石・石皿	完形			1							1		
準完形				1							1			
半形			0	1	62	6	6	0	0	0	1	68		
片				59		6					65			
礫石器群（石器）合計			0	141	11	0	0	0	0	0	152			
自然礫	完形		31	151	23	7	0	212						
	片		73	703	95	16	1	888						
自然礫合計			104	854	118	23	1	1,100						

写真図版



調査区全景 S→



調査状況 S E→



L P I - 9 遺物出土状況 S →



V F P - 7 土層断面 S →



LCS-2 検出状況 N→



VFP-2 断面 NE→



VFP-5 断面 NW→

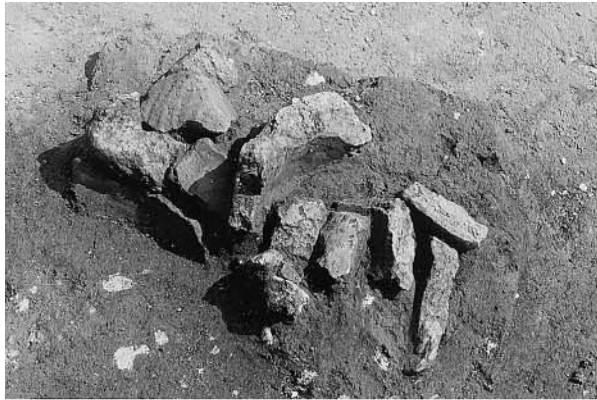


VFP-8 断面 NW→



VFP-9 断面 SW→

図版 4



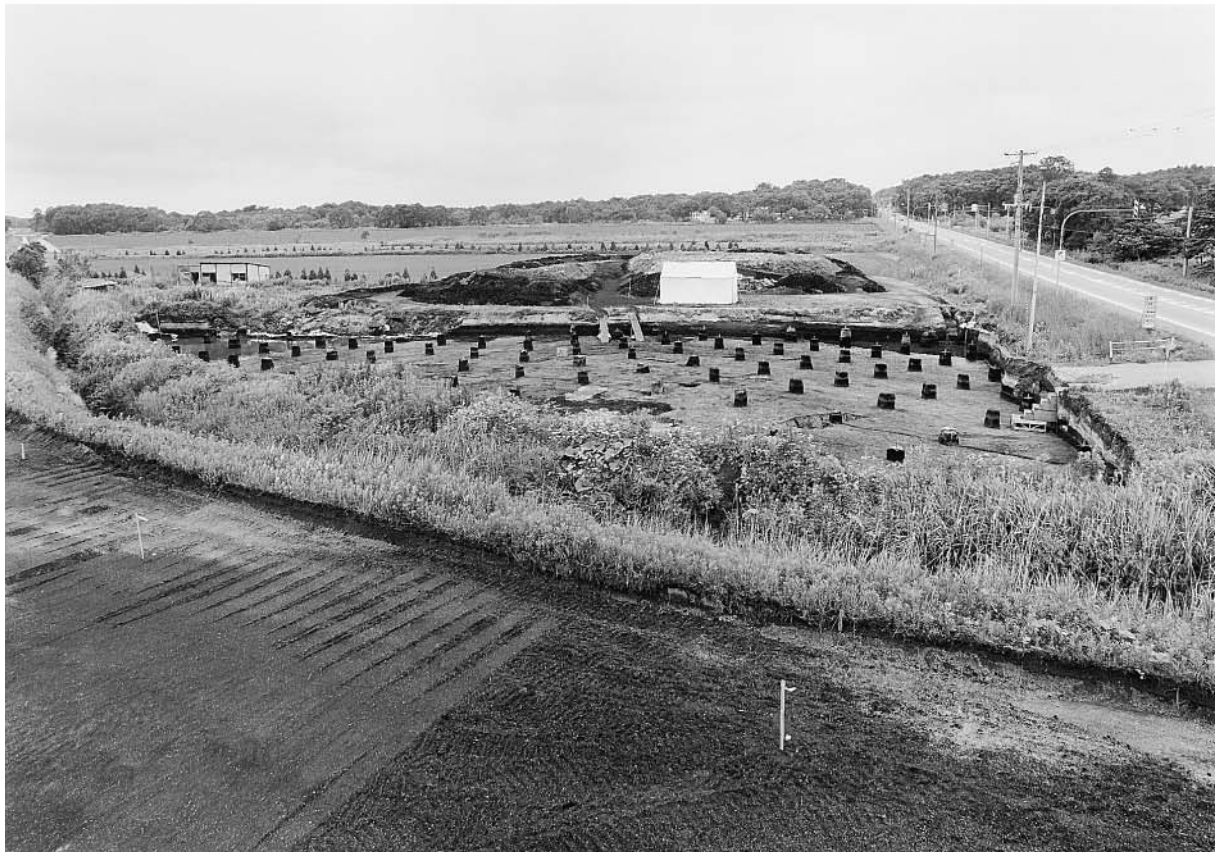
土器出土状況 (L C P - 4) NW→



石斧 (図31-25) 出土状況 SE→



砥石 (図33-44) 出土状況 SW→



調査区完掘状況 S→



1

LCP-4 出土の土器

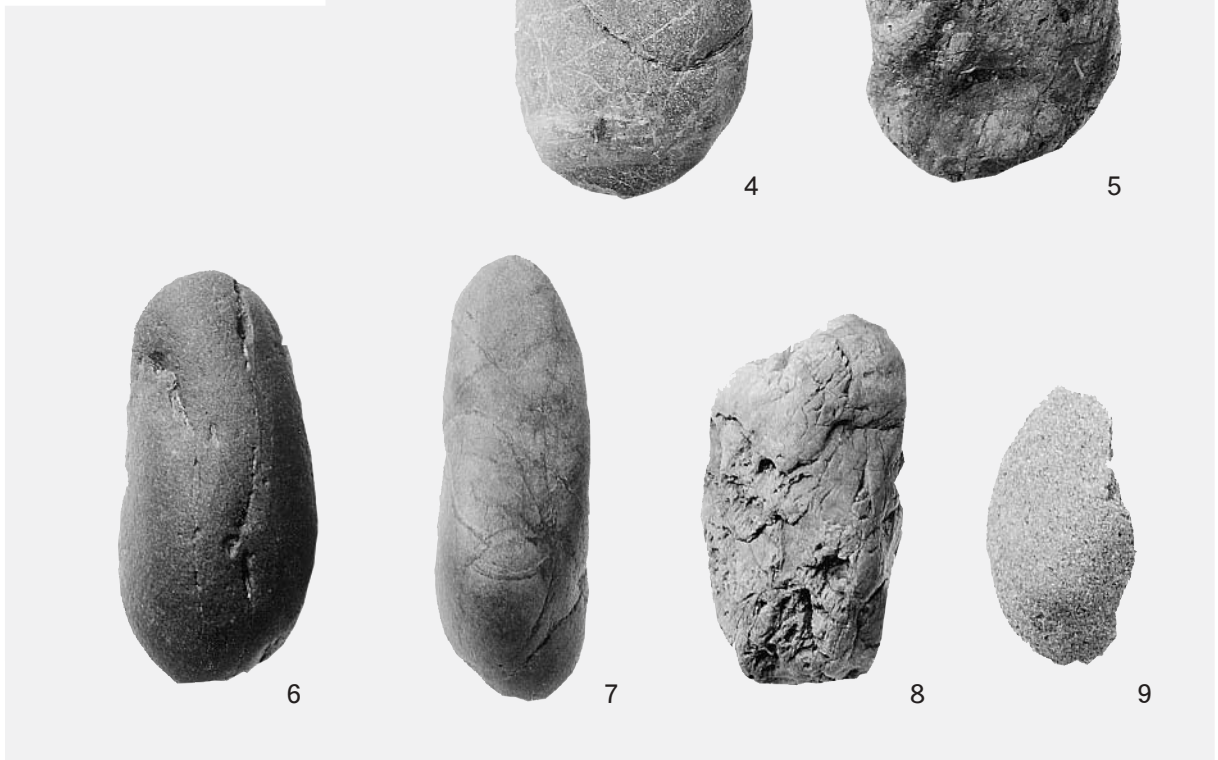


2

VFP-5 出土の土器



3



4

5

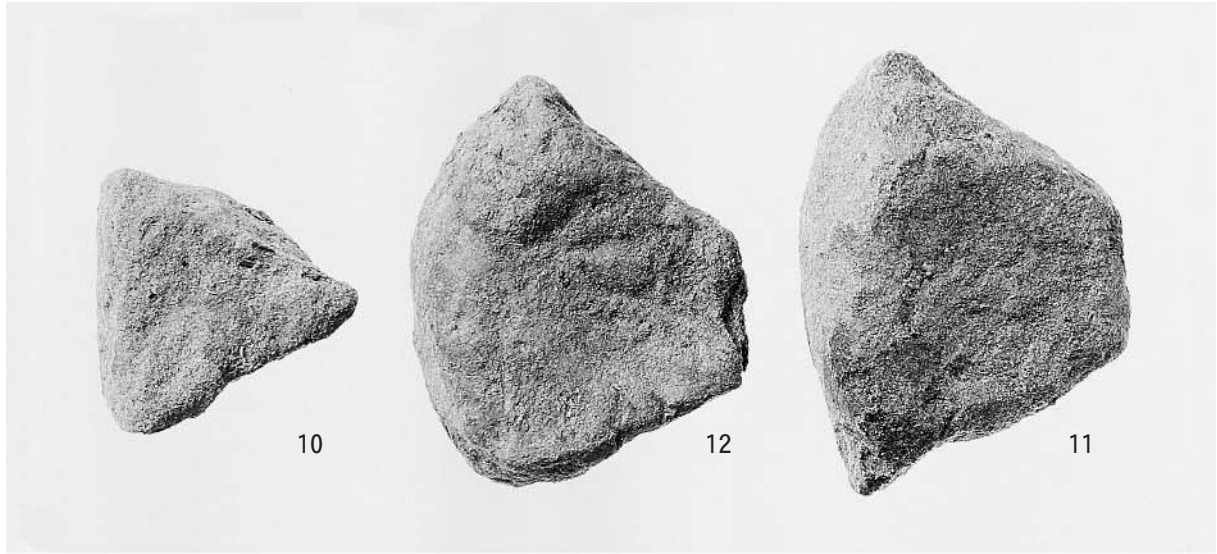
6

7

8

9

LPI-9 出土の石器類



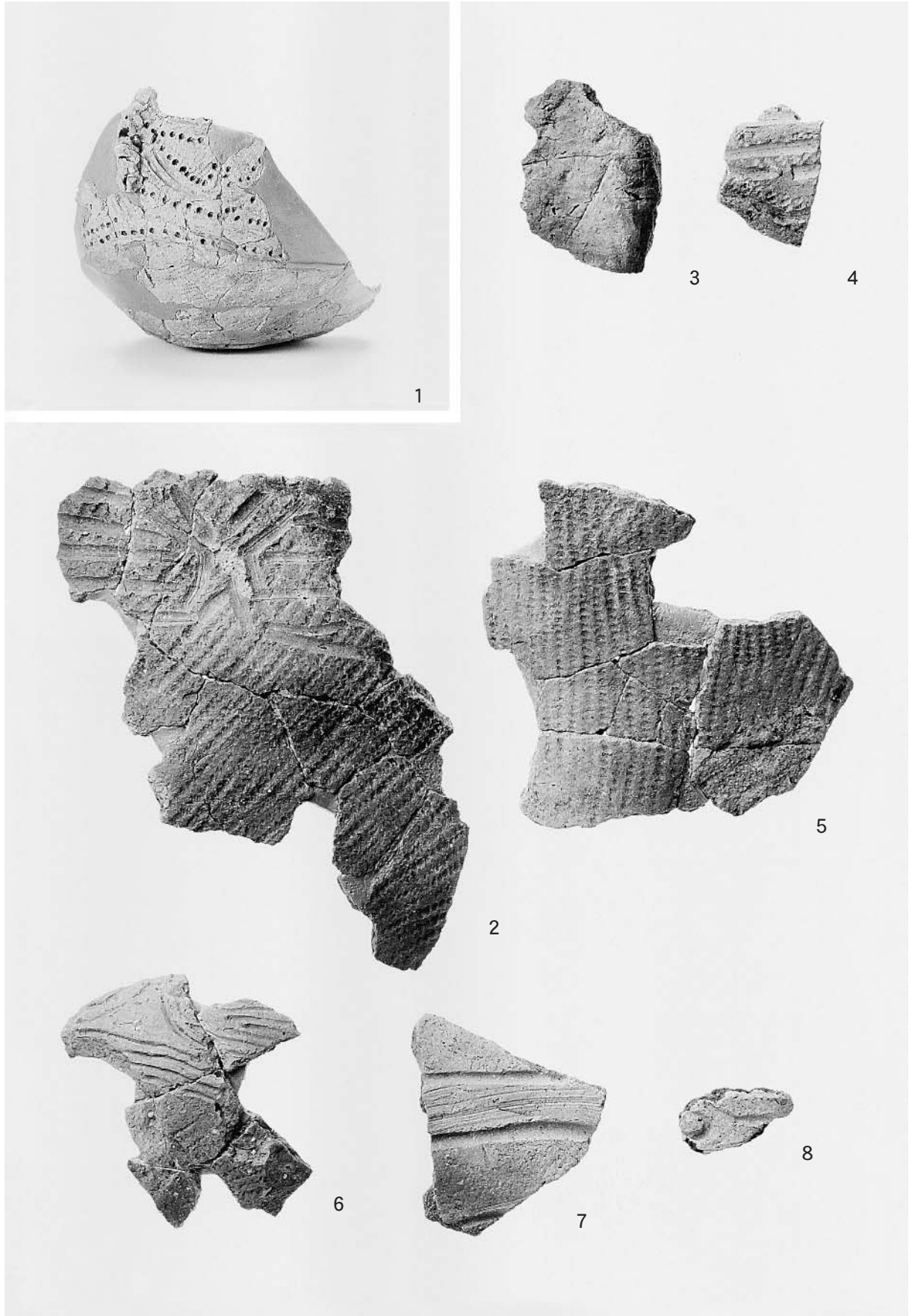
L P I - 9 出土の礫石器



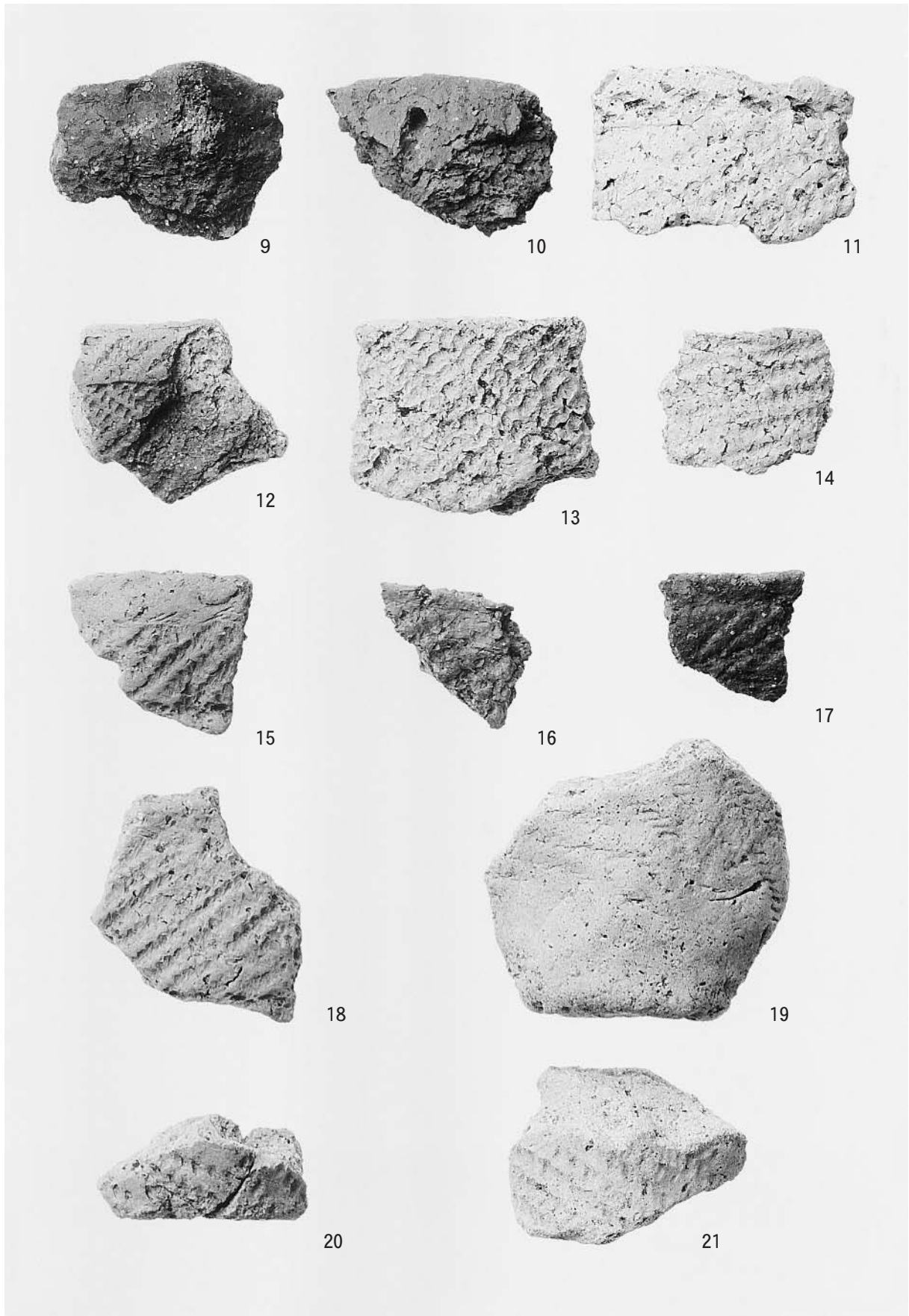
L C S - 2 出土の自然礫



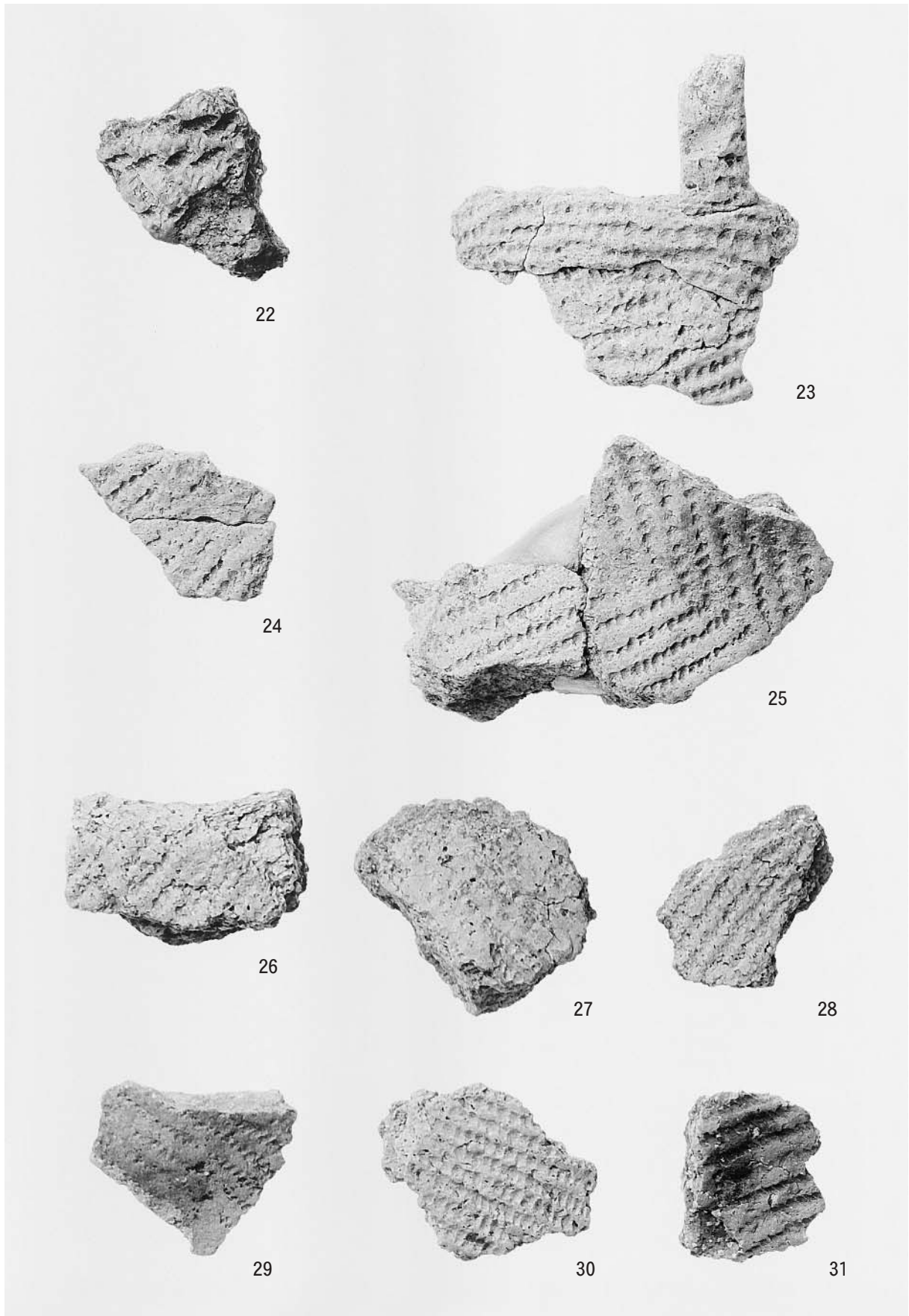
V F P - 7 出土の石器類



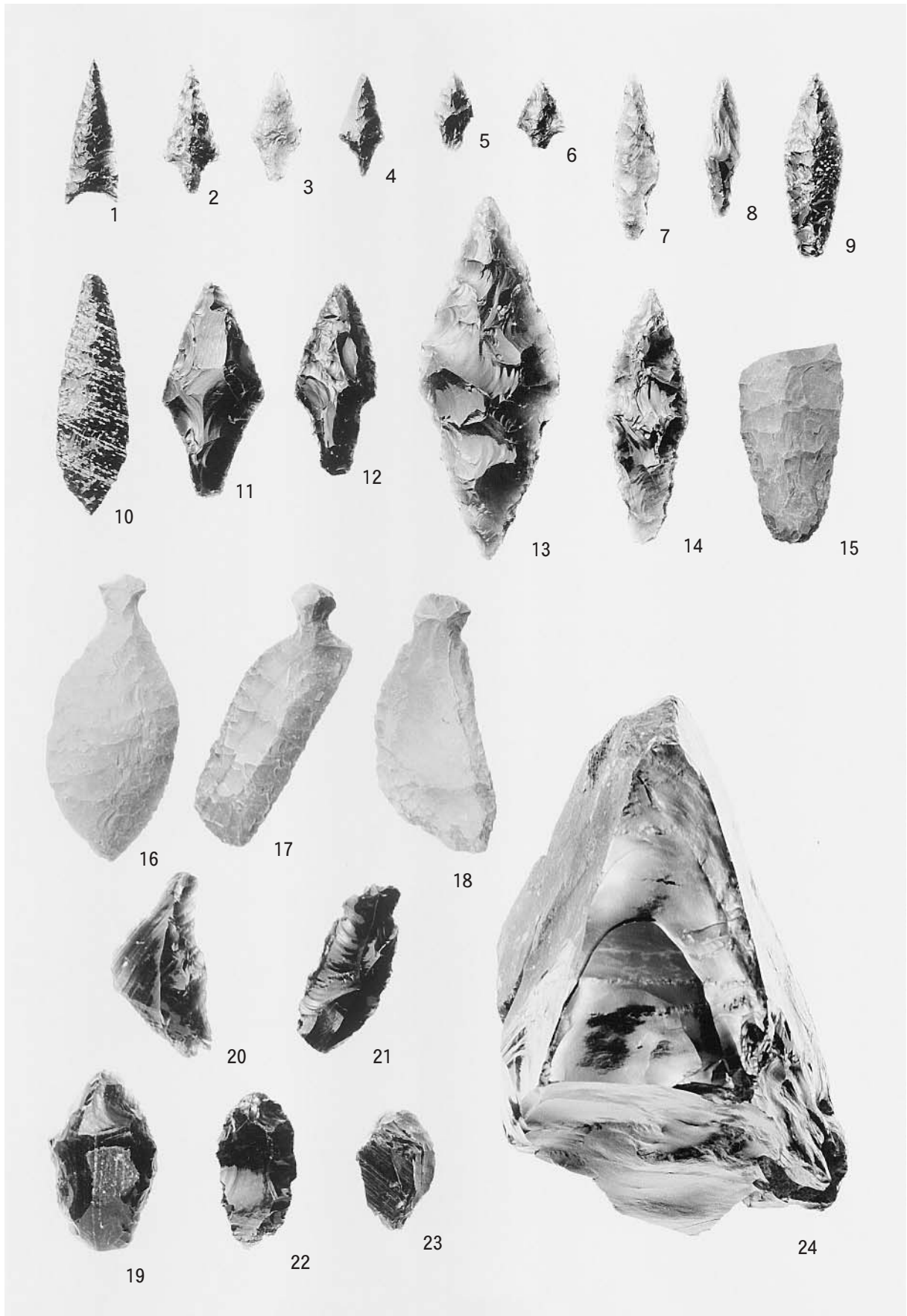
包含層出土の土器(1)



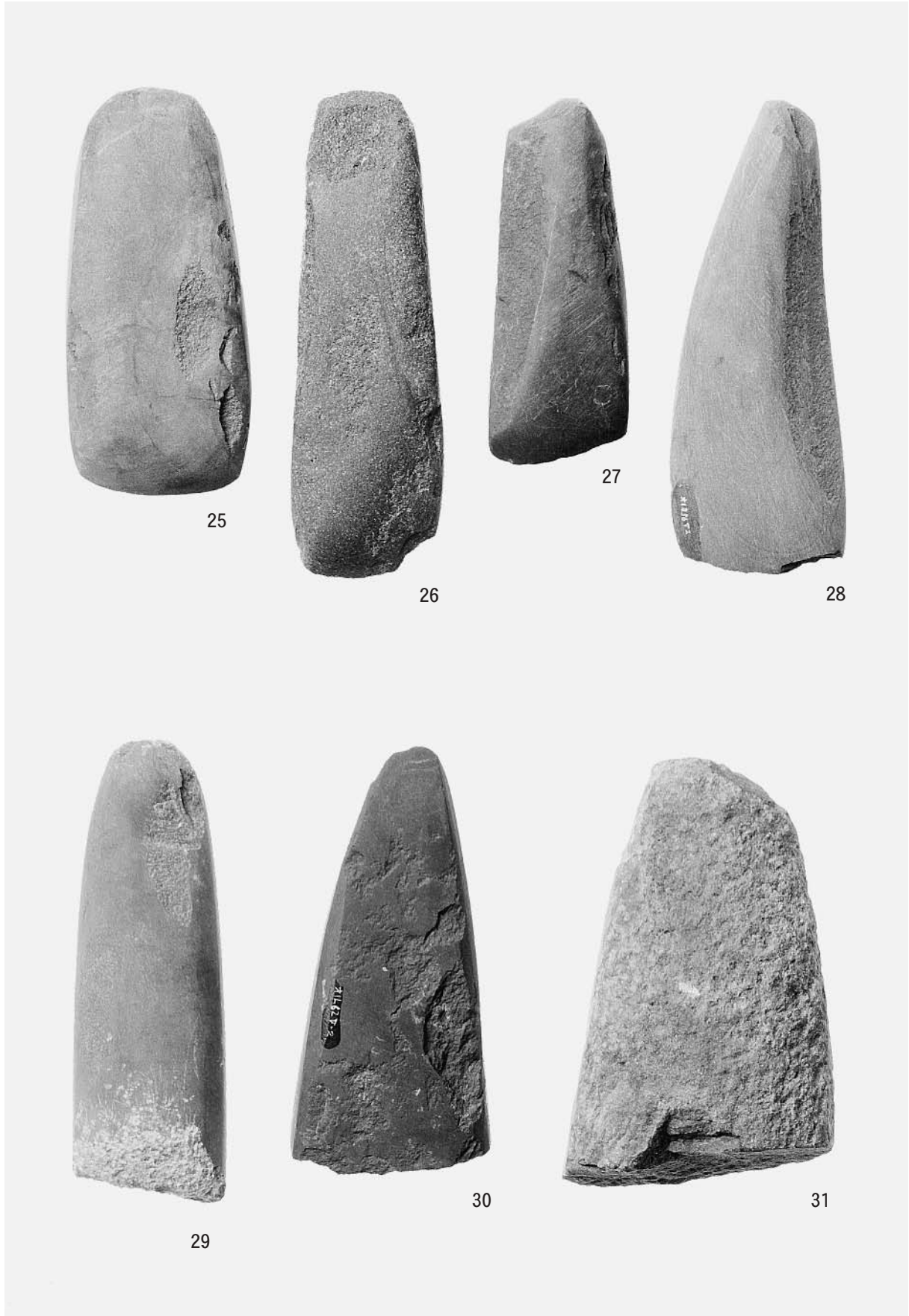
包含層出土の土器(2)



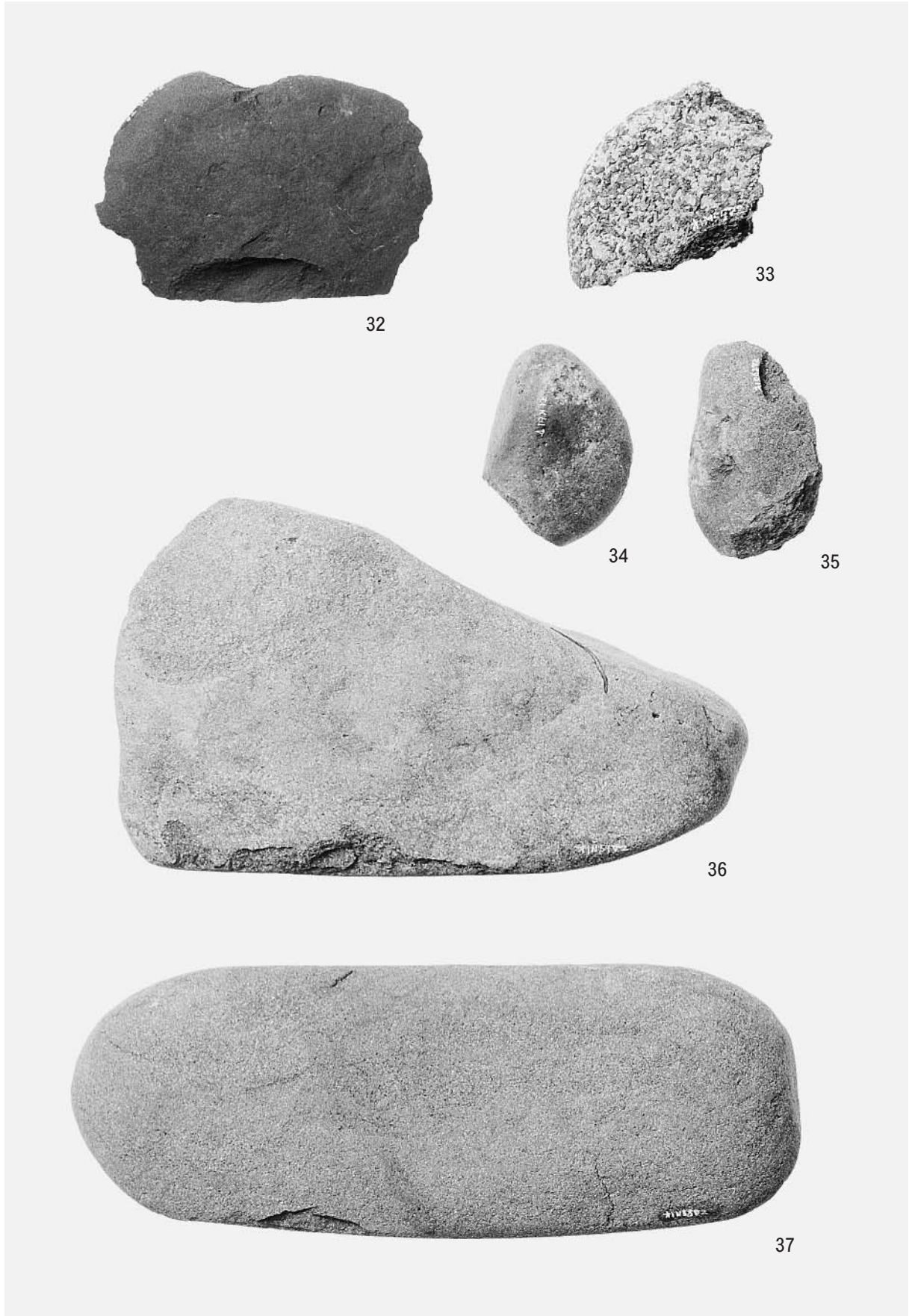
包含層出土の土器(3)



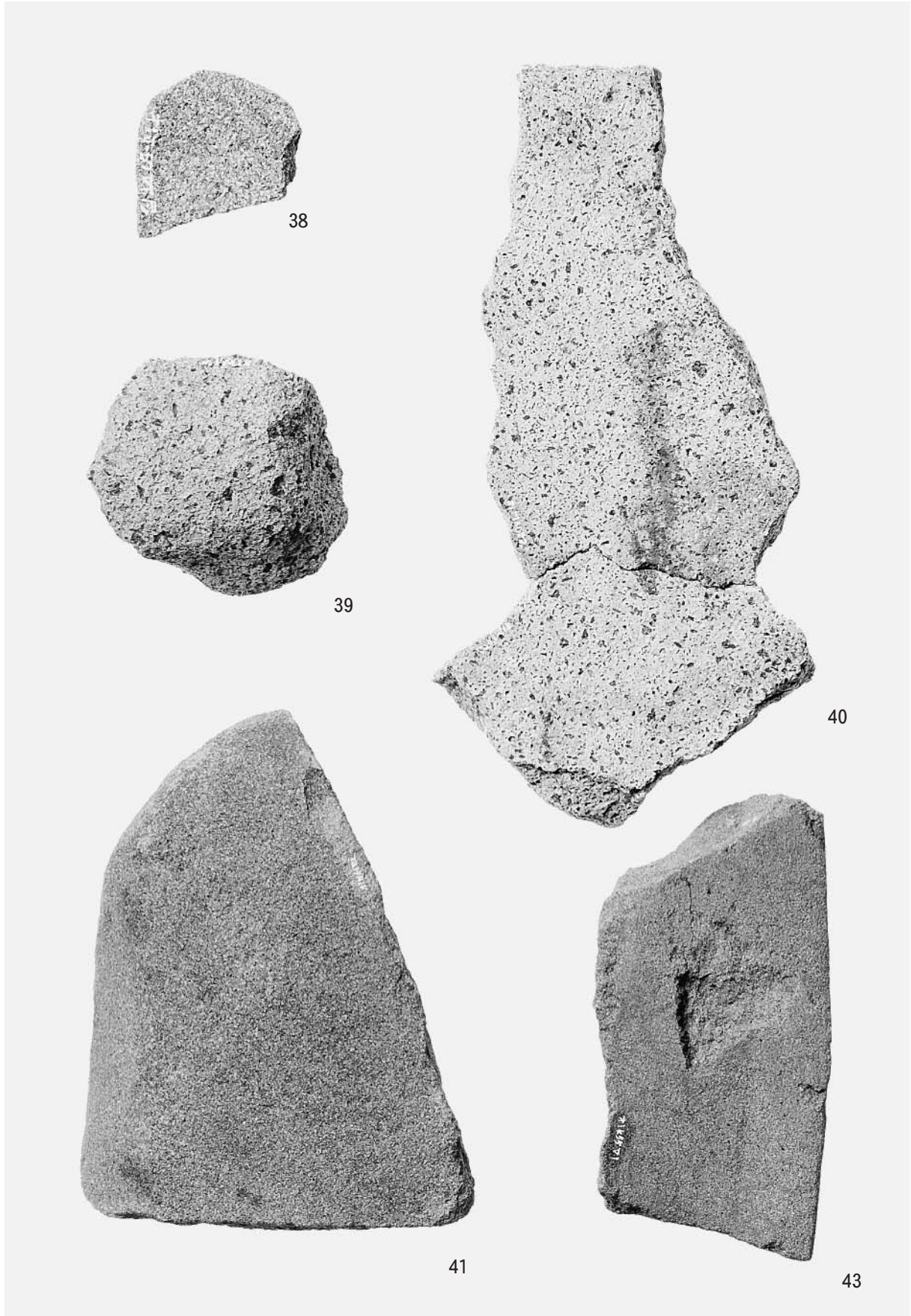
包含層出土の剥片石器



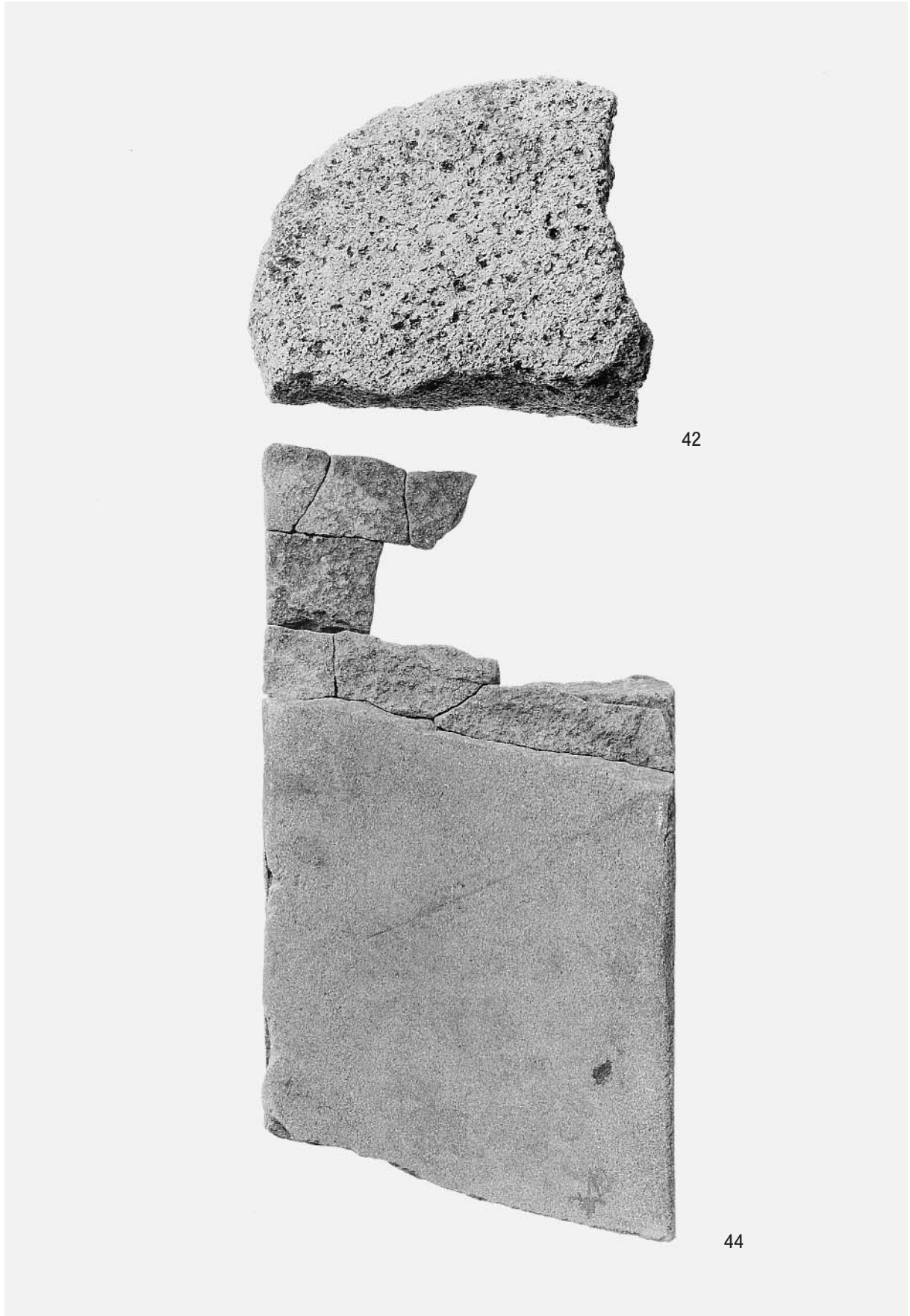
包含層出土の磨製石器



包含層出土の礫石器(1)



包含層出土の礫石器(2)



包含層出土の礫石器(3)

引用参考文献

論文・書籍等

- 大久保雅弘・藤田至則 1984 『地学ハンドブック・新訂版』 築地書館
菅野三郎・奥村 清 1978 『地学の調べ方』 地学のガイドシリーズ1 コロナ社
小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社

団体・組織刊行物

- 札幌開発建設部札幌新道建設事務所 2002 『道央圏連絡道路事業』
千歳市史編さん委員会 1983 『増補 千歳市史』
千歳市農業協同組合 1984 『千歳市農業協同組合史』（創立三十周年）
ペドロジスト懇談会 1984 『土壌調査ハンドブック』 博友社

埋蔵文化財発掘調査報告書

- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター 1984 『タップコプ』

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）

- 北海道埋蔵文化財センター 1982 『千歳市ママチ遺跡』 北埋調報9
北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市柏台1遺跡』 北埋調報138
北海道埋蔵文化財センター 2002 『千歳市チプニー1遺跡・チプニー2遺跡』 北埋調報173
北海道埋蔵文化財センター 2003 『千歳市オルイカ1遺跡』 北埋調報188
北海道埋蔵文化財センター 2003 『千歳市オルイカ2遺跡』 北埋調報189

報告書抄録

ふりがな	ちとせし おるいかいちいせき							
書名	千歳市 オルイカ1遺跡(2)							
副書名	一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北埋調報)							
シリーズ番号	第206集							
編著者名	菊池慈人・末光正卓							
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター (http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 (011)386-3231 mail@domaibun.or.jp							
発行年月日	西暦2004年2月27日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (1-59杭)	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おるいかいち オルイカ1遺跡	ほっかいどう ちとせし 北海道千歳市 ちゅうおう 中央2529-3・ 27・28	01224	A-03 88	旧日本測地系		20030506 ~ 20030711	1,600m ²	道路建設 (一般国道 337号新千歳 空港関連 工事)に伴 う事前調査
				世界測地系				
				42° 51' 25.963"	141° 42' 44.949"			
				42° 51' 34.891"	141° 42' 31.595"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
オルイカ1	散布地	縄文時代後期	土坑 焼土 礫集中		土器・石器類			

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第206集

千歳市 オルイカ 1 遺跡(2)

平成16(2004)年2月27日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地 1
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238
URL <http://www.domaibun.or.jp/>
Email mail@domaibun.or.jp

印刷 株式会社 総北海
〒078-8272 旭川市工業団地2条1丁目1-23
TEL (0166)36-5556 FAX(0166)36-5657
URL <http://www.sohokkai.co.jp/>
Email info@sohokkai.co.jp